
転生してもうた!!2nd ~ ソードアート・オンライン ~

咲魔@魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生してもうた！！2nd～ソードアート・オンライン～

【Nコード】

N4632V

【作者名】

咲魔@魚

【あらすじ】

英霊としての任務をまっとうする咲魔に、暇潰しとして大神から任務が出された！！
さて、次はどこかしら？

10/11 小説タイトル変更

剣と剣と剣の世界へ！（前書き）

転生してもうた！！のセカンドシーズンです！まあ、グダグダ転生日記を書くだけです…

剣と剣と剣の世界へ！

咲魔 side

「大神、帰ってきたわよ」

英霊としての仕事から帰還した

また直ぐに大神から仕事に駆り出される筈だ

英霊と言えば世界の奴隷みたいなものだ

本人の意思に関係なく世界の『自分を守る』という意思に駆り出される只の便利屋だ

そのほとんどがどっかの英雄サンである

私？私は：そうねえ、強いて言うなら馬鹿げた理想で人類を乗っ取るうとした厨二臭い王様から宇宙を救った：成り行きで

もともと世界に自らの意思で英霊になるんだけど何故だか私は強制的に英霊にされた：

：話が長くなつたわね

私は今奴隷の仕事を終えて大神に報告してる：んだけど

「ねえ、クソ大神。頑張った私を置いてなんのラノベ読んでるの？
(チャッ)」

大神の首もとに刈り取る死痛の二つ鎌を添える

これは私の愛用の武器であり、私が創った。もう一つの名をダース
サイスという

「知らんのか？咲魔。ソードアートオンラインじゃよ」

「知らないし興味もないから斬るわよ」

「残念。私の結界が張ってあるから例えEXランクの武器でも斬れないぞよ？」

「…断ち切れ、刈り取る死痛の二つ鎌」

スパアン

ラノベは見事に破れさった

「概念つき…また狡い武器を創ったもんじゃのう…」

先ほどから「創った」と言っているのは咲魔の能力によるものではないからだ

咲魔は、固有結界、無限の創造世界を持っている

簡単には、ありとあらゆる物を創造することができるチートができるわけだ

「まあ、ともかく。早速行ってもらいたい世界があつての」

またか…めんどくさいわ

「ソードアートオンラインの世界へ転生させとくぞ」

「はあ？意味あんの？それ」

「あるわけ無かるう気まぐれじゃよ」

……(チャッ)

「お主はもつと穩便に出来ぬかのう」

「黙れ駄神。貴方の暇潰しに付き合つのは飽き飽きよ」

「ところがギツチヨン お主は私の奴隷だからお主の意思は聞いていない」

質が悪い…死ねばいいのに…大神め

「…で、の姿が見当たらないけど？」

私の頭上の虚空に穴が開く

「あああああああああああああ！！咲魔あああああああ避けてえええええええ！！」

は大切だから衝撃吸収マットを創造してあげる

バフッ

「ワフッ！！…はぁ助かったぁ」

「ちよつとした演出じゃよ」

「本当に死にたいようね駄神」

「大神に向かってそんな口をきくのはお主だけじゃぞ。咲魔」

知らんがな

「それじゃあ転生するぞ」

足下に巨大な穴が開く

毎度毎度こういう行き方しかないのかな…

変なことを考えながら浮遊感に身を任せた

眼が覚めたら、石畳の上につつ伏せで倒れていた

「ここは…?」

大神の言っていたソードアートオンラインの世界だろうか

何故か落ちていたソードアートオンラインの説明書を読んだ

なんでも、剣だけの世界らしく、魔法は使えないらしい

その代わり剣技ソードスキルが使えるそうだ

あゝ、スキルがあるのか…

私のスキルは…と…

索敵

投擲

バトルヒーリング

鎌

それと…

エクストラスキル「双鎌」

エクストラスキル「創造」

チート臭いスキルねえ…

レベル1からスタートだし、熟練度も0からね。よし、大体わかったわ

すると、青い光に包まれて、視界がブラックアウトした

これはゲームであって遊びでは無いらしい(前書き)

ソードアートオンラインは一話当たりの話が短くなりそうですね
容量増やしてこれだよ…まったく

これはゲームであって遊びでは無いらしい

アインクラッド：百層にも及ぶ巨大な城

城といっても、中には大自然が広がっており、様々なモンスターが生息している

一層ごとに居るボスを倒すと、上の層にいける階段ができるシステムだ

ブラックアウトしたあと、眼を開けると先ほどと同じ街が広がっていた

唯一違うところと言えばざっと一万人の人々が集合していた

中には「ここから出して」とか「なんでログアウト出来ないんだよ

！」とか言う声が聞こえてくる

察するにこの世界はゲームの世界なんだ…

ファンタシースターのVR空間に少し似ている

大規模なネットゲームと言うわけ

んで、ここでひしめき合ってるのがプレイヤーで私はノンプレイヤーキャラクター（NPC）という扱いだろう

不意にローブを来た魔法使いみたいな巨大なモノが立っていた

周囲の人々の反応からゲームマスター（GM）らしい

長々と話し始めたから省略

なんでも、名前は茅場…茅場…名前が出てこない…ま、いつか

で、このゲームにはナーヴギアなるものがハードらしいんだけど、ゲーム自体にログアウトボタンは無く、殺される（この世界ではHPが無くなる）または、外部からの解除を試みた場合、ナーヴギアのナントカカントカが電子レンジみたいに脳をアポンするらしいえげつないわ〜

変な異世界に飛ばされるのは馴れてるから私に動揺はないけど、他の人達はかなり動揺してる人が多いわね…

ん、男の子二人が妙に落ち着き払った感じで話してる片方はちょっと他の人と感じが違うな…

「やあ君、名前は？」

男の子に話しかける

いきなり話しかけられたことに吃驚した様子だったけど直ぐに落ち着いた

「……キリト。君は？」

ふうん、キャラクターネームで名乗るのね…

「私はサクマよ。こっちがシキ」

のことは随分前の偽名にした

「サクマとシキか。俺に何のようだ？」

不意にバンダナの男が顔をだした

「俺にも名乗らせろよキリト…俺はクラインだ。宜しくな」

クラインはガン無視して

「キリト、私達とパーティー組まない？」

「悪いな、今クラインの誘いを断ったばかりなんだ…すまないが、足手まといはいて欲しくないんだ」

ふうん、足手まといねえ

確かに魔法は使えないから後衛で回復してもらえないからパーティーを組んでも無駄だと言いたいのね

「足手まといとは大きく出たわね…じゃあこうしましょう、どうせ次の街に行かないと周辺のモンスターは枯渇するから、次の街まで私が戦闘を行うわ。シキはキリトの護衛についてもらう」

キリトは考えた後いいだろうと言った

草むらに出ると、オオカミの群れに囲まれた

初期装備の軽くて何とも心もとない大鎌を持つ

鎌は他の武器とは違い、首に攻撃を当てたらクリティカルヒットになる

次々とクリティカルヒットを出してオオカミの群れを撃退していく
ソードスキルを使わず敵を薙ぎ倒して進む私にキリトは驚愕したよ
うだ

確かにクリティカルヒットを出せばソードスキルを使わずともそれ
と同等、またはそれ以上のダメージを与える事ができる

しかし、それには針の穴を通すような技術が必要な上、相当な精神
力が要求される

それを目の前の少女がさらりとやってのけたのだ。

キリトも負けじと片手直剣のソードスキルで薙ぎ倒していく

街に着いた

キリトがいかにも不信そうな眼で私を見た

「何者だ？君は」

「私？うーん…さあ？」

「さあ？つて…」

「サクマは悪い人じゃないよ。鎌の腕は凄いしパーティーに入れ
るなら今がお買い得だよ」

「人を商品扱いしないでくれる？」

キツつと を睨んだ

「仕方ない、しばらくパーティーに入れることにするよ…改めて宜
しく」

手を差し出して、握手した

これはゲームであって遊びでは無いらしい(後書き)

咲魔が無双したいらしいです

取り合えず七十階層くらい(前書き)

いきなり七十階層に行っちゃったりとかWWW

飛びすぎだろ!~!とか言わんどいておくれやす

取り合えず七十階層くらい

咲魔 side

七十階層のボスを倒し終えた私達とキリトは、パーティーを解散して、ソロプレイヤーに戻った

キリトはキリトなりの考えが有るらしく、しばらくは単独プレイをするって言った

私も私で人目の付かない場所で双鎌スキルの熟練度を上げたかったしね

あ、ついでにエクストラスキルの事はキリトには言ってる。彼奴は信用できるし、なんと彼奴も二刀流のエクストラスキルを持っていたのを隠してたらしいからね

二刀流の修行でもやるんじゃない？

そうそう、ゲーム開始一ヶ月くらいで大きく四つのグループに分かれたわ

先ず、全体の半分を占めたのが、茅場晶彦（名前思い出した）からの解放条件を信じず、外部からの救助を待った者達

まあ、無理なだけだね
気持ちは解るよ。何の罪もない自分達が電子空間に拉致されたんだからね

こいつらは最初の「はじまりの街」で少ないお金で寝泊まりしてる

んだってー

んで、そのほとんどが、モンスターとの戦闘は自殺行為と思っ込んでるらしく、街からでようとしな

二つ目は全体の三割

協力して攻略を目指そう！って輩が集まった大規模ギルド「軍」という、なんともただけな名前

しばらくは名前が無いギルドだったんだけど、勝手に誰かが呼び出したらしい

三つ目は、所謂PKだね
プレイヤーキルだっけ？

この世界じゃ、死んだら現実でも死ぬことになるんだけど、死んだときに持つてるアイテム全部ドロップするからそれで稼いでる人達だね

実際何度か教われたけど、私達所謂攻略組には歯が立たず、撃沈してる

何度か私もそいつらを殺したしね

ついでに言うけど、通常緑色のカーソル何だけど、PKとかした犯罪者プレイヤーはカーソルがオレンジになる

緑色がオレンジを殺してもオレンジにはならない

んで、四つ目がギルドを開いた人達

まあ、これはわかるでしょ

残りのグループに属さないのが私達「ソロプレイヤー」

単独で自己強化が有効と判断した人達の集まりね

そんな所が私達の状況ね

「ロイヤルストレートフラッシュよ、エギル」

「畜生！！ワンペアだ…持ってけ泥棒！！」

ただいま五十階層のアルゲードって都市の裏路地に有るエギルの店でエギルとポーカーしてんのシキことはビール飲んでる

んで、さっき勝った分、五千コル（この世界での通貨）をおいしく頂いたわけ

丁度終わった位に槍使い殿がアイテムの売却に来た商談してるなかでキリトが入ってきた

うむう、エギルがぼったくりしてる

槍使いは不信な顔をしたけどエギルが一睨みすると何も言わず出ていった

元々エギルは商人であると同時に攻略組の斧使いのハg…もとい、スキンヘッドの凶顔である

槍使いが店を出てった後、キリトが苦笑しながら

「うっす。相変わらず阿漕な商売してるな」

「よお、キリトか。安く仕入れて安く提供するのがウチのモットーなんでね…サクマにポーカーで負けて財布にがすっからかかって理由もあるがな」

「安く提供するってのは疑わしいけどな…っ と挨拶遅れたな。久しぶりだなサクマにシキ」

「うーい。私の財布はポーカーで勝ったからじゃらじゃらよ」

「キリトもビール飲むう？」

「いや、俺はオレンジジュースを頼む。それと、俺も買い取り頼む」

「キリトはお得意様だしな、あくどい真似はしませんよっ、と…」

エギルがキリトのトレードウィンドウを眺める

エギル (。 。 ;)

私も後ろから覗く

私 (ーー)

「エギル、私も同じやつ」

「おっ…おい、S級のレアアイテムじゃねえか。ラグーラビットの肉か、俺も現物は初めてだぜ…。おめえら自分で食おうとは思わねえのか？」

「飯くらい別に良いわよ？」

「こんなアイテムを扱えるほど料理スキルあげてる奴なんてそうぞう…」

「キリト君」

不意に後ろから女性の声が聞こえた

「シエフ捕獲」とキリト

「今日はご馳走ね」私

「私も食べたい」

「なっ……なによ!？」

栗色のストレート

顔は小さな卵型

でっかい眼

んで、紅白の戦闘服

アスナちゃんね

紅白の戦闘服つてのは血盟騎士団つてギルドのユニフォームだ。ナイツ・オブ・ザ・ブラッドの頭文字でKOBと呼ばれる最強のギルドで彼女はその副団長を務めている
当然剣技も凄くて、細剣術は閃光の異名をもつ。

「珍しいなアスナ。こんなゴミ溜めに顔を出すなんて」

エギルの顔が引きつる

アスナちゃんが「お久しぶりですエギルさん」って挨拶されるとニマニマし始めた

きめえ!!

「なによ。もうすぐ次のボス攻略だから、ちゃんと生きてるか確認に来てあげたんじゃない」

「フレンドリストに登録してんだから、それくらい判るだろ……」

「そ……そんなことより、何よシェフどうこうって?」

「あ、そうだった。お前いま、料理スキル熟練度どのへん?」

「聞いて驚きなさい、先週にコンプリートしたわ」

「なぬっ!」

「私はバトルヒーリング戦闘時回復をコンプしたわ」

「お前:バトルヒーリングって習得難しいんじゃない?」とエギル

「常時HP残り10前後で戦ってたわよ?」

因みに勿論HPが無くなれば現実でも死ぬわけで、みんな顔を引きつらせてる

たんもバトルヒーリングコンプリートしたんだけどなあ

「アスナ、その腕を見込んで頼みがある」

キリトがアイテムウインドウを可視モードにして示した

「うわっ！…！…！…これS級食材！？」

「私のも同じやつ」

「取引だ。こいつを料理してくれたら一口食わせてやる」

「一口とは可愛そう」

「は・ん・ぶ・ん！！」

アスナちゃんは顔をキリトの顔に近づけて言った

キリトは思わず頷く

「やった」

「悪いわねエギル、取引中止よ。二人とも」

「お…俺にも一口」

「感想文を八百字以内で書いてきてやるよ」キリト

なにこの鬼畜

エギルがこの世の終わりかって顔をした

ザマア W W W W

「料理はいいけど、君はどこでするつもりなのよ」

「うっ……」

「どうせ君の部屋にはろくな道具もないんですよ。今回だけ食材に免じて私の部屋を提供してあげなくもないけど」

うほっ。女子が男子を部屋に呼びますか
キリト君ラグってますよ〜

「今日はこちらから直接セルムブルグに転移するから、護衛はもういいです。お疲れさま」

うは、護衛いたんだ君たちw
ほとんど空気だったね

「ア…アスナ様！こんなスラムに足をお運びになるだけに留まらず、素性の知れぬ奴をご自宅に伴うなどと、とんでもない事です！
！」

「このヒトは、素性はともかく腕だけは確かだわ。多分あなたよりレベルが十は上よ、クラディール」

「な、何を馬鹿な！私がこんな奴等に劣るなどと…！」

そのとき、店の扉が急に開いた

「貴様アアアア！！サクマさんとシキさんをこんな奴等て言ったな
アアアア！！」

ふえ？

「初めまして、サクマ様、そしてシキ様。私はK○Bの中で結成された「S・S・親衛隊」の副隊長を務めてさせて頂いているものでございます……………（ながったるい自己紹介）」

「キリト、アスナちゃん、シキ、行くわよ（ボソッ）」

四人でゲート広場まで隠蔽スキルを全開にしてゲート広場へと走りだした

「……………って、お待ちくださああああい！サクマ様アアアア！！シキ様アアアア！！」

アスナの家

「ひろ〜い！！」

「すげえ広い！！なに？独り暮らし？私も住まわせろや！！」

「なあ……………これ、いくらかかっているの？」とキリト

「んー、部屋と内装あわせると四千kくらい。着替えてくるからそのへん適当に座ってて」

「うはwさっさと言うねえ」

「四千kと言えば四百万ですねww」

「キリト君、どんな料理がいい？」

「シ…シエフお任せで」

「んー、シチューにしようか。サクマもシキも良いわね？」

「「おけー」」

アスナが料理を始める
そりゃ凄いスピードで
ふつくしい

なんかさ、もうリズムに乗る感じ？凄いやね、殺伐とした殺し合い
の世界で戦闘の役にたたないスキルを上げる攻略組ってww

「おまたせ」

わはーいシチューだシチューだ
イリヤン家で食っていらいだわ

「「「「頂きまーす」」」」

ガッツガッツ

「おいひー（モゴモゴ）」

「コラ、食べながら喋らないよシキ」
それにしてもアスナちゃん料理上手いな

あれだね、愛を感じる

てか、前のアスナちゃんからイメージ変わったんだけど…
前はもつと冷徹だったようなく

クーデレ？いえいえあれがホントの彼女ですよ

最近は何からだけどキリトへの愛を感じるね

キリト鈍感バーサーカーだから気づいてないけどね

ん？なんでキリトがバーサーカーかって？そりゃあもうレベル上げ
の為にモンスターの大量にソロで行くようなアホよ
なんでアスナちゃん惚れたんだろね

あつ、キリトの顔見て赤らめた

「「「「ごちそうさま！！」「」「」

「今まで生き残ってて良かったあ」とキリト

「あはは、シキなんかホント綺麗に食べるわね…皿が洗った後み
たいに綺麗だし」私

「だって美味しいんだもん。仕方ないじゃん」

うはっ！！危ない

がにばあって笑ったので鼻血が出そうになった！

「んじゃあ私は帰るね」アスナちゃん」私

「ご飯美味しかったよ」

「俺も珍しい食材見つけたらまた頼む」キリト

「あら、普通の食材でも腕次第よ？」アスナ

私達一行はアスナちゃんの家を去った

キリトは自分のねぐらがある（すっごい汚い）けど私はエギルの店の二階に泊まらせてもらってる

お金はきっちり払ってるよ

あの裏路地は落ち着くんだ

取り合えず七十階層くらい〜(後書き)

ほのぼのと修了！

ラフィン・コフィン討伐戦（前書き）

シリアスのくせ、短い…ほんと短い…

マジで陳謝

ラフィン・コフィン討伐戦

咲魔 side

夜風が髪を揺らす

アインクラッドの夜は危険性を孕んでいる

一部の悪魔型モンスターなどは、夜にステータスが上昇する上にこちらから視認しにくいので、不意打ちに一層の注意が必要である

こんな危険性が孕む夜に私達が何故集まってるかと言うと、最近勢力を拡大してきた犯罪者ギルド『笑う棺桶^{ラフィン・コフィン}』討伐戦が繰り広げられるからだ

ラフィン・コフィンは犯罪者ギルドの中でも特に危険度が高く、レツドギルドとも言われている

こちらも攻略ギルド最大の『血盟騎士団』がいろいろと対策をしてきたらしいんだけど、奴らは新たな手口で殺人件数は一向に減らない

「ふああああ。眠い」

私はこつちに来てても生活リズムを崩さないからこんな真夜中起きることは滅多にない

「はは、もう少し待ってたら来るはずだぜ」とキリト

既にここに居る全員が武装してる。少ない知り合いは大体来てるね

黒の剣士キリト

ギルド風林火山のクライン

KOB副団長にして閃光のアスナ

ぼったくり商人ことエギル

ま、よく見るメンバーだね

そのとき

一瞬だけ俗に言う『嫌な感じ』を感じた

私と とキリトが同時に振り向く

「ラフコフよ!!」

私は叫んだ

奴ら、何故私達の待ち伏せに気付いたの!?!?!まさか

スパイ!?!

やばい、まだ状況が掴めてない!

「キリト!シキ!?!」

「わかってる!?!」

「こんのおおお!?!」

はしたつぱに囲まれてるけど大丈夫

キリトは刺剣の達人『赤目のザザ』だ…こいつは幹部クラスのはず

…キリトなら心配ないだろうけど…

私はジョニー・ブラック
毒付き短剣使いだ

「死ねよお嬢ちゃん」

「あんたが死ね」

短剣での突きをパリイ（武器の攻撃を弾く技術）して、鎌で首元を
狙うがしゃがんで避けられる

「っは！！やるな嬢ちゃん」

短剣を心臓に向けて突く

「ちい！！」

間一髪かわして、鎌で薙ぎ払う

「おおっと危ねえ」

こいつ…なかなかやるわね

鎌の柄で突く

「ぐっ！？」

仰け反ったのを見逃さず、首に一閃

「終わりよ！！」

ジョニー・ブラックの顔がニヤリと笑う

「スイッチ」

奴の後ろに構えてた奴が鎌の一閃を止める

ザクッ

「なっ!?!」

毒付き短剣が飛んできた

慌てて回避したが、当たってしまった…

したっばの剣が襲い掛かる

「うっ…ぐう…」

やばい…毒が回り始めた…ここで殺られる訳には…!

「サクマっ!!はああああ!」

アスナか…

閃光の名に恥じない高速の細剣術がしたっばを襲う

しかし、HPが危険区域に入っても下がらない

「早く…下がりなさい…よ!」

アスナに焦りが見える

「こっちは14人…ラフコフは20人強よ…」

私の問いにアスナが答える

14人…悪夢ね…

キリトが呆然と立ち尽くしてる

「キリト…」

「二人…殺った…一人は首を跳ねて、もう一人は心臓を突き刺した…」

「そう…」

現実世界に生きる人間にとって、人殺しは相当のストレスになるでしょう…

身を守るためとは言え

見たところエギルもクラインも立ち尽くしてる

殺ったのだろう…

実質動いてたのがこのメンバーだし、後ろの人達が動いてれば被害は最小限に留められた筈なのに…

「サクマあ…俺、五人も殺しちゃったあ…俺は…人殺しだ…どうしたら…いいんだよ…」

「クライン…」

ギルド風林火山のメンバーも皆生還しているとは言え、座り込んでしまってる

「人殺し…か…」

私は大体慣れすぎた

今まで殺してきた人の数なんて覚えてない
でも、 を除いて他は人殺しなんて出来ない優しい連中ばかりだ
そうそう忘れられるものじゃないだろう…

「茅場晶彦…これが、貴方の創りたかった世界なの？」

私は天を仰いで言った

夜はまだ続いている

これはアインクラッドの中でも最低で最悪の夜となったのだろう…

ラフィン・コフィン討伐戦（後書き）

想像上のラフコフ討伐戦ですねえ

こんなんで良いのかな…

クラディールきめえ!! (前書き)

クラディールがどうしようもなくキモい話ですw

クラディールきめえ!!

咲魔side

午前九時

七十四層の主街区ゲート広場でアスナちゃんを待っている

「来ない…」

キリトが呟いた

只今アスナちゃんを待つて一時間が経過しました
なにしてんだろ

あれか？ストーカーさんに襲われてるのかねww

すると

「きゃあああああ！避けて!!」

「うわああああ!？」

アスナちゃんダイナミックなご登場ありがとうございます

転移ゲートに飛び込んだのかな？やたらと勢いがあったからやっぱ
ストーカーさんに襲われてたとか？

アスナちゃんはちょうど勢いでキリトにぶつかって盛大に転けた

「おい、大丈夫…」

キリトの右手がちょうどアスナちゃんの胸に…

(。 。 ;)

「なっ…」

キリト…今さら気づいたか…

「や、やあ、おはようアスナ」

キレるのか！？キレちゃうのか？アスナちゃん！？顔が真っ赤だぞ
！！WWW

すると、また転移ゲートから人が表れる

純白のマントに赤の紋章。ギルド血盟騎士団のユニフォームを着用
わはー、クラディールさんだ

「ア、アスナ様、勝手なことをされては困ります！」

ヒステリックだねえ

ストーリーカー氏はクラディールさんかい？

「さあ、アスナ様、ギルド本部まで戻りましょう」

「嫌よ、今日は活動日じゃないわよ！…だいたい、アンタなんで朝
から家の前に張り込んでるのよ！？」

「ふふ、どうせこんなこともあるうと思ひまして、私一ヶ月前から

ずっとセルムブルグで早朝より監視の任務についておりました」

アスナ&キリト&私&。
。(。)

へっ…変態や!?

変態やで!

ロリコンですかいな。まったく、若い連中は…

おい、そこドヤ顔するところじゃない!!クラディール氏自重しなさい

「そ…それ、団長の指示じゃないわよね…?」

あの、血盟騎士団のヒースクリフまでロリコンやったらソードアトオンラインは混沌の闇に包まれるだろうね

「私の任務はアスナ様の護衛です!それには当然ご自宅の監視も…」

「ふ…含まれないわよバカ!!!」

だからクラディールさん、自重しようねマジで

どんだけ美少女を守りたくても限度があるよマジで

「聞き分けのないことを仰らないでください…さあ、本部に戻りますよ」

クラディール氏は私達をどけてアスナちゃんの手を握る

キリトが動いた

クラディール氏の右手をつかんで、力一杯握り締める

「悪いな、お前さんトコの副団長は、今日は俺の貸し切りなんだ」

「貸し切りで…（ニヤニヤ）」

「うっ…あっいや、そういう意味じゃ…／＼／」

「どうだか？んじゃ、ここはキリトに任せてっと、シキ、あそこに
アイスクリーム屋さんがあるから食べ行こ」

「うーい」

スタスタスタ

つと着いた着いた

「いらっしゃいませ」

NPCレストランですねぇ

メニューメニューっと

ヴァニラアイス 150コル

……バニラじゃないの？

え？あくまでもヴァニラアイス？ジョジョの？

茅場さんはジョジョ好きなの？

「…バニラアイス二つください」

「はい、ヴァニラアイス二つで300コルになります」

…バニラでよくな？

いや、凄く嫌な予感しかしない…

「お待たせしました」

ふう…普通のアイスクリームか…

よかつて「サクマ様アアアアシキ様アア！」え？

「親衛隊来ましたアアア！」

嫌な予感でこれかい！！

「ええと…急ぐから」私

「しっ…しっれいする！！」

「おっ…お待ち下さい。せめてアイスを食べてる風景をスクショで

…」

……スタスタスタ

「お待ちくださアアアい。一枚だけ撮ったら帰りますので！」

……ペロッ

「うつつ…我が生涯、一片の悔い無し…（血涙）」

こええよー！！

てか、北斗ネタやめいー！！ついていけん

…よし、戻るか…

キリトのところに戻ることにした

クラディール氏とキリトがデュエルしてる
結局剣を交えるのね

これって美少女争奪戦であってるよね

キリトは下段に構えてる

クラディールはどう見ても突進形ねえ

デュエルが開始した

クラディール氏は勿論突進するが、キリトは下段と見せ掛けてこちらにも突進する

キイン

二人が交錯する

クラディール氏の方が早だしだった

キリトはそこを狙って振った後の剣を攻撃した

クラディール氏の剣は弾け飛んだ

「武器を替えて仕切り直すなら付き合っけど…もっいいんじゃないかな」

「…アイ・リザイン（降参した）」

クラディールはいつの間にか集まったギャラリーを散らして、キリトの方を向いた

「貴様…殺す…絶対に殺すぞ…」

うっ…こいつなんなのよ…一体…気配がなんか怖い…

「クラディール、血盟騎士団副団長として命じます。本日を以て護衛役を解任。別命あるまでギルド本部にて待機。以上」

うっわ、クラディール氏乙ですw

「……………なん……………だと……………この…」

呪詛を呟いたあと、転移結晶を取り出してグランザム（血盟騎士団の本部がある場所）に行った

「っふいっ、やっと行ってくれたねえ」

が疲れたといった風に呟いた

「「めんね巻き込んだって」

「いやいや、私は別に構わないわ…キリトもバーサーカーしてたし」

「そうだな、アスナも俺らみたいなイイカゲンなソロプレイヤーと居るのも息抜きにいいんじゃないのか？」

「そうね、なら前衛は全般的にキリト君に任せるから」

「おいおい、前衛は交代だろう…」

「なっ…！？キリトに交代って考えがあったなんて！！」

「サクマ…それ、地味に酷くないか？」

クラデイルきめえ!! (後書き)

次はザ・グリーンムアイズ編です

ザ・グリーンアイズ(前書き)

いつもより長めに書けました!!

では、どぞどぞ (^・^)/

ザ・グリーンアイス

クラディール氏のストーカー行為から辛くも逃げ切ったキリト達一
向。得にやる事が無くなってしまったぜ！！
どうする？どうするんだキリト君！！

咲魔 side

「よし、迷宮区に行こう」

おお、キリト。何を言い出すかと思いきや、迷宮区攻略ですかい
流石バーサーカー一号。言うことが違う
アスナちゃんも折角の休暇なのにね！！
私？私は別に構わないわ

ってことで安全エリアを出て迷宮区に行こうとしたその時だった
遠くから十数人の足音が向かってきてる

「キリト、軍だよ。隠れよ」

「ああ」

軍って近づいて良いこと一つも無いんだよね
最近はなんか内部でも荒れてるらしいし

「あ………」

アスナちゃんが自分の服を見下ろした
うん、紅白の騎士服とか目立ちすぎるね

「どうしよ、私着替え持ってきてないよ……」

持ってきてないどころか男が目の前に居るのに着替えるとかいうこ
とは出来ないよね

「ちよつと失敬」

キリトはレザーコートを開いて、隣のアスナちゃんの体を包み込んだ

(. . .)

私

まあ、キリトのコートはボロだけど真つ黒だからハイディング隠蔽ボーナスは高
いんだけどね

つと、軍の連中が目の前に来たね

別に軍はPKとかするわけじゃないけど、なんかいろいろ噂が流れ
てて極力近寄ったら駄目なんだなこれが

「ふう、やっと去ったわね」

「…あの噂、本当だったんだ……」

アスナちゃんが呟いた

「噂？」とキリト

「あれでしょ？軍の連中が方針変更して上層エリアに出てくるとか
いうやつ…軍が来てどうなるってやつじゃないけどねww」

「うん、シキの言う通りなんだけど、軍の内部で不満が出てるらしいの。だから、前みたいに大人数で迷宮に入って混乱するよりも、
少数精鋭を送って、その戦果でクリアの意思を示すっていう方針に
なつたみたい…」

「実質プロパガンダなのか。でも、だからっていきなり未踏破層に
来て大丈夫なのか？」とキリトが言った

「ひょっとしたら…ボス攻略を狙ってるのかも」

「うん、アスナちゃんそれ正解かもよ、私情報屋からそんな話聞いた」

「それである人数か…。でもいくらなんでも無茶だ。七十四層のボ
スはまだ誰も見たことないんだぜ。偵察もまだしてない状態で攻略
はむりだろ。パーティーも少ないし…」

「ボス攻略だけはギルド間で協力するもんね。あの人たちもそうす
る気かなあ？」

「どうだかねえ。ま、軍の連中がどうなるうと私達は関係ナッシン
グなんだけどね。シキ」

「やっぱ？軍とかどうでもいいっしょ」

「連中もぶつつけでボスに挑むほど無謀じゃないだろ」

私達は立ち上がって迷宮区を目指した

群がってくる骸骨君（仮）はキリトの片手直剣ソードスキルの《バ
ーチカルスクエア》で薙ぎ倒される

「うおおおおお！！」

ズカアアアン！！

キリトの無双は続く
骸骨君かわいそ…

「キリトー、そろそろスイッチする？」

「まだまだあー！！」

ズカアアアン！！

四連撃が《デモニツシュ・サーバント》（骸骨君）を葬り去る

「キリトく、私も戦いたい」

は上目遣いを発動した

汚なっ!?

「うっ…わっ…わかったよ」

ちなみにシキこと は双爪使いだ

このスキルはかなりの接近が必要な上、ソードスキルがかなり使いに
にくいから誰も使いたがらない武器だ

そのかわり、重くないからかなり俊敏性が良くなる上、クリティカル率も
鎌ほどじゃないけど高い

「らあああああ!」

デモニツシュ・サーバントは爪に引っ搔かれ、粉々にされる

いっつも思うけど双爪って酷いよね

ズバアアアアア!

双爪は範囲攻撃が出来ないから打ち漏らしがでる

それを一匹残らず刈り取る

首を跳ね、肩口を切り落とし、胸を刺す

「…………お前らは戦闘と言うか…殲滅と言うか……………惨殺だよな…………」

とキリトの感想

「てへ」「」

その調子で（たまにキリトにスイッチしてやりながら）奥まで進ん

で行った

で、

「これ…だよな。ボス部屋」

「どうする……？覗くだけ覗いてみる？」

お、珍しくキリトが不安気ねえ

「今すぐボスの首を獲りたい」

「いやいやいやいや、なにいつてんだよ！！偵察もまだだし…」

ま、それが普通よね

「んじゃ、覗こつか。アスナちゃん、転移結晶よろ」

キィと音が鳴って扉が開く

そこには悪魔が居た

青色の巨体に山羊の角…

口からは青い炎が出ているそして特徴的な光る目に巨大な大剣

名前は《The Gleam Eyes》ザ・グリーンムアイズ…輝く目

そのとき、突然悪魔は部屋に響き渡る大音量の咆哮…

「うおおおおお！！」 キリト

「きゃあああああ」 アスナ

二人が全速力で逃げ出した！！

(。。(；)

置いていかんどいてええええええええ！！

猛ダツシュで迷宮区の入りに戻った

「はあ…はあ………」

キリトが息切れたあ珍しい…写メっとこパシャ

「ふう〜。いやあ逃げた逃げた〜」

アスナちゃんが笑いながら…

そついや、ボスって部屋から出られないんだつたね

「キリト君つたら私より全速力で逃げるんだもん」

「あっ…あはは（苦笑）」

アスナちゃんは軽く笑った後笑いを収めると

「あれは苦勞しそうだね…」
と表情を引き締めた

「そうだな。パツと見、武装は大型剣ひとつだけど特集攻撃有りだろうな…」

「火とか吹きそうだよねww」私が笑いながら言う

「てか、モロ口から火が出てたじゃんww」と

「盾装備のやつがたくさん欲しいな…それからスイッチしていくしかないな…」キリトがめんどくさそうに溜め息を漏らす

「盾装備ねえ…君、なんか隠してるでしょ？」アスナちゃんはキリトに問い詰める

「いつ…いきなりなんだよ…」

「だって、片手直剣のメリットって盾を持てることじゃない。でもキリトは盾もたないし…私の細剣はスピードが落ちるからだけどキリト君はそんな風じゃないし…」

だから言ったのに…カモフラージュの為に盾持つときなさいって…

「ま、いいわ。スキルの詮索はマナー違反だもんね。それより、お昼にしましょ」

「なにっ」

「キリト、あんなに色めき立ってんのよ……」

「だっ…だつてよう…て、手作りですか」

アスナちゃんは無言ですました笑みを浮かべる

アスナちゃんがメニューからバスケットを取り出した

サンドイッチでしたあゝ

「う…うまい…」

キリトが猛烈な勢いでサンドイッチを消費していく

「っと、私もいただきます」

む、この味は醤油…だと!?

そしてこれはマヨネーズではないか!?

醤油とマヨネーズのこの絶妙なコンビネーションアタックは!

「…………マヨネーズだ!…」

キリトが感動してる…

(。 。 ;) こんなん

「アスナちゃん、醤油の味の作り方を教えてほしいわ!!」

「んー、アビルパ豆とサグの葉とウーラフィッシュの骨よ」

ウーラフィッシュの骨とな!? 解毒ポーシヨンの原料WWW

「おまえ、これ売り出したらすごい儲かるぞ!!」

「そつ…そつかな?」

「いや、やっぱりだめだ。俺の分が無くなったら困る」

そういう問題か!!

「意地汚いなあもう! 気が向いたら、また作ってあげるわよ」

そしてキリトとアスナちゃんはイチャイチャし始めた

目のほよ

じゃねえ!!

ん? 下層部の方から人影が…

「キリト」

「ああ、気づいている」

先頭の奴が私達を見つけたようね…

ん？おかしい、武器も構えずに近づいてくる…

「よう、キリト…とサクマにシキが」

「「まだ生きてたかクライン」」

クラインか、ならいいか

「ちよっ！？酷くねえか！。珍しく他に連れがいるの……か…！？」

「あー…つと、ボス戦で顔は会わせてるだろうけど紹介するよ。こいつはギルド《風林火山》のクライン。で、こっちは《血盟騎士団》のアスナ」

キリトの紹介にアスナちゃんは礼をしたけど…クラインが（…）の状態

「おい、何とか言え。ラグってんのか？」

キリトが脇腹をひじでつつくと…

「こっ、こんにちは！…くくクラインという者です二十四歳独身」

クラインがわけのわからない事言い出した

後ろに下がってた五人も我先にと自己紹介を始めた

が爆笑モードに移行した

「…ま、まあ、悪い連中じゃないから。リーダーの顔はともかく
クラインはキリトの足を踏みつけた

「どっどどどっどっどいっことだよキリト!？」

キリトは胸ぐらを掴まれたw

「こんにちは。しばらくこの人とパーティー組むので、よろしく

アスナちゃんがよく通る声で言った

クラインと愉快的な仲間達は憤怒に狂った表情になった

「キリト、てんめえ………ちゃっかし美女三人に囲まれてハーレム作
りやがって………(怒)」

美女三人って私も入ってるのか…

私と はかれこれ1000年近く生きてるんだけどねえ

「キリト君、軍よ!」

なぬっ、気づかんかった

うー、めんどい…さっきの連中みたいねえ
すっごい疲れてるみたい何だけど迷宮区ごときでこんなに疲弊する
とかどんな鍛え方してんのよ…

「私はアインクラッド解放軍所属、コーバッツ中佐だ」

ほえ、軍つての正式名称だったんだ

「キリト。ソロだ」

無論キリト以外は名乗ってない

「君らはもうこの先も攻略しているのか？」

「ああ、ボス部屋の手前までマッピングしてある」

「うむ。ではそのマップデータを提供して貰いたい」

クラインが激昂しそうだったが横から風が吹いて遮られた

チャッ

「面白いこと言うわね。コーバッツ中佐だっけ？そんな都合の良いことあるとおもってんの？」

首に鎌を掛けたまま耳元で囁く

「我々は君ら一般プレイヤーの解放の為に戦っている！諸君が協力するのは当然の義務である！」

「義務ねえ…第一、この不意打ちに対応できないようじゃ迷宮区すら抜けれないわよ？それとも、ここで死ぬか？ガキ」

キリトが私に歩み寄って肩に手を置いた

「止めとけサクマ。どうせ街に戻ったら公開しようと思っていたデ
ーただ、構わないさ」

「なっ？あんだバカ！？キリト」

「そりゃあ人が好すぎるぜキリト」

クラインと私が抗議するが意に介した風もなく

「マップデータで商売する気は無いよ」

言いながらコーバツツとトレードした

「協力感謝する」

まったく感謝の気持ちがかもってない
鎌を握る手に力が入るがキリトにまた止められた

「ふんっ……キリトが言うなら私はいいよ……」

キリトは微笑んでコーバツツに向き直る

「ボスにちよっかい出すのはやめたほうがいいぜ」

「…それは私が判断する」

「さつきちよっとボス部屋覗いてきたけど、生半可な人数でどうこ
うなる相手じゃないぜ。仲間も消耗してるみたいじゃないか」

「……私の部下はこの程度で音をあげるような軟弱者ではない！貴様等、さっさと立て！」

コーバツツ達は迷宮区に行つたみたいね

「大丈夫なのかよあの連中」

クラインが気遣わしげに言う

「いくらなんでもぶつつけでボスに挑んだりしないと思うけど」とアスナちゃん

「…一応様子だけでも見に行くか？」

私はぶすくれた顔で肯定、は苦笑しながら肯定した

他も肯定したようだ…

「あー、そのお、アスナさん。ええつとですな…アイツの、キリトのこと、宜しく頼みます。口下手で、無愛想で、戦闘マニアのバカタレですが」

「な、何を言つとるんだお前は！」

「だ、だってよう…おめえがまた誰かとコンビ組むなんてよう。たとえ美人の色香に惑ったにしても大した進歩だからよう…」

「ま、惑ってない！」

私はふんと言つて迷宮区へと走つていった

先行していた私が敵をけちらしていったので順調に進んだ

「あああああ……」

悲鳴……

「急ぐぞ!!」

敏捷力が高い私たちはクライナー行を置いていく形になった

「おい!大丈夫か!」

キリトが叫んだ

巨大な青い悪魔ザ・グリーンムアイズが巨剣を縦横無尽に振り回している

軍の部隊は二人足りない

「早く転移アイテムを使え!!」とキリトが叫ぶ

「だめだ…クリスタルが使えない……」

へえ、結晶無効化空間ねえ

「何を言うか！！我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない！！戦え！！戦うんだ！！」

ふっ、ざまあないわね…私達の忠告を聞いていればこんなことにはなっていないのに…二人死んだなんて笑わせてくれる

「全員…突撃！」

「滑稽ね…」

悪魔の一撃がコーバツツを斬り飛ばす

HPが消滅していた

「だめえ！！！」

「アスナッ！！！」

アスナちゃんが飛び出したあ！？んなろっ！キリトのやつ、アスナちゃんを見てなさいよちゃんと！

とうとう全員が対峙するはめになった

アスナちゃんの一撃はろくに悪魔のHPを減らしていない

さらに、反撃がアスナちゃんを襲う

キリトは叫びながらアスナちゃんに降り注ぐ攻撃をパリィした

「アハハハハハハハハハハ！」

どんどん悪魔のHPが減少していく…

「ゴアアアアアアアア！」

グリームアイズは絶叫した

キリトの剣が胸を貫き、私の鎌が首を跳ねた

再生はもうしなかった

グリームアイズは欠片となって爆散した…

終わったのだ…

ザ・グリーンアイズ（後書き）

ふいふ、グリーンアイズの戦闘描写が余りにも少ない件について…

大体のネットゲヲタは嫉妬厨だとか聞いたことある(前書き)

遅くなって申し訳ない…

いまいちキリトのキャラが掴めないのが原因…

大体のネットゲヲタは嫉妬厨だとか聞いたことある

咲魔 side

青色の巨大な悪魔は鎌と剣の連撃により、HPが消失して、ポリゴンを崩していった…

普通大人数で狩るのが主流…というかソロとかペアでは無理なんだ。でも私らはユニークスキル無双ができる…んだけど、流石にノーダメージは無理

「あゝ、キツイわ。シキ、ポーションちょうだい」

「はいよ」

リポビタンドの味がする

キリトの方は気絶してる…戦闘が終わった瞬間ぶっ倒れたわね
アスナちゃんとクラインが必死でキリトを起こしてる。因みにキリトのHPは残り数ドット。死の瀬戸際ってやつ

お、キリトが起きたね

空かさずアスナちゃんが抱きつく

リア充ですねわかります

「君が…死んじゃうかと…思った…」

「…アスナ、そんなに抱き締めると俺マジで死ぬ…」

死因『アスナちゃんのハグ』…笑えない冗談ね…

「それはそうと、おめえら、なんだよ今のスキル」

クラインが聞いてきた…

「言わなきゃだめ？（か？）」「」

「つたりめえだ！！」

「エクストラスキル《二刀流》」

「エクストラスキル《双鎌》よ」

クライン一行と軍の生き残りがどよめく

因みにクラインもエクストラスキル《カタナ》なんだけど、あれは死ぬほど刀を振り回しまくったら出会える確率が高い

「し…出現条件は…？」

「気づいてたらもう公開してる」とキリト

だよなあ…という風に頭を垂れた

「私だったら公開しないわよ？」

キリト& amp・クライン「…だよなあ……」

「ってことで、三人目のユニークスキル持ちが出現したから一躍有名になるわね〜」

「他人事みたいに…」

キリトがひどく疲れた表情をした

「お前ら、今日あったことは上の方にちゃんと報告しとけよ」

クラインが軍の生き残りに言った

「あの…ありがとうございました」

十五歳くらいの少年は礼を言ってお下層部に仲間を引き連れて行った

「今回の功労者はおめえらなんだが、上層階のゲート開けるか？」

「いや、俺達は疲れたからクラインがやってくれ」

「そつか…気を付けて帰れよ」

クラインは仲間達と大扉に向かって歩いていく

「その…キリトよ。おめえがよ、軍の連中を助けに飛び込んで行ったときな…なんつつか、嬉しかったよ」

「なんじゃそりゃ?」

「それと、俺は人ができてるからともかく、サクマもレアスキル持ってるって広まるだろうから覚悟しとけよ。じゃあな」

「「なんじゃそりゃ?」」

クラインはぐつと親指を立てて上層階に繋がる扉を開けた

「私、しばらくギルド休む」

oh…爆弾発言

血盟騎士団の副団長どのが休むとかヒースクリフさん涙目だね

「休んでどうするんだ?」

「忘れた?しばらくキリト君とコンビ組むって」

なぬっ!? 男女二人一つ屋根の下ですかい

良いねえ若いつて

何年経つてもロリータボディですがねww私はwww

「じゃあ私らはお邪魔虫ね。とつとと帰る帰る」と

「そっか…じゃあな」

こんなリア充どもなんて見てられん…速やかにエギルの店に退散せねば

翌日

私はいつものとうり、エギルの店の / シキが寝ている横で眼を覚ました

なんてことはない朝…の…はずなんだけど…

限界まで鍛えた索敵スキルが教える…

パパラッチどもが私のユニークスキルを知って取材にでもしにきたんでしょね…まあ、隠蔽スキルをフル活用してるから中々見つからないんだけど…

ま、どうしようもないしね

取り合えず寝間着用の浴衣を脱いで、いつもと同じ黒と白のドレスを着る

一階に降りて行ったらエギルが珈琲を淹れてた

「おはようエギル」

「おはようサクマ。珈琲入ってるぞ」

「いつも悪いわねえ…遠慮はしないけど」

因みにエギルも双鎌のことは知っている

キリトと同様に信用の足る（胡散臭いが）人物だからね

クラインは…口が軽そうだし、アスナちゃんは、言う必要もないしね。キリトとエギルはほとんど一緒にいるから手持ちは公開しておいたに過ぎない

《創造》はイレギュラーの中のイレギュラーだから使つと言ってもバれない程度につかっている

今使ってる漆黒の鎌にちよっとだけ《刈り取る死痛の二つ鎌》の概

「だってよ？弁償してよねキリト」

「うう」

「冗談はこれくらいにして。やけに急いでたみたいけど？」とキリトに尋ねる

「だってよう、朝起きたら入り口に報道陣が押し寄せてたんだぜ？例のユニークスキルのせいで」

…キリトなりに苦労してるみたいだ…：少なくとも私のユニークスキルもバレてるし…：エギルの店の前で張り込みされたら困るな…

「よくあの小汚ないねぐらに張り込みもつしたわね…」

「ねぐらすら持ってない奴に言われたかねえ」

言い合いしている内にまた転移結晶の光が表れた
中から出てきたのは血盟騎士団の副団長のアスナちゃんだった

「どうしようキリト君…：大変なことになっちゃった…」

「「「え？」「」」

大体のネットゲヲタは嫉妬厨だとか聞いたことある（後書き）

てことで戦闘描写が無く、クオリティの低い一話です…ホントすいません

三人のユニークスキル持ち（前書き）

久しぶりの二日連続投稿です！では、どうぞ！！

三人のユニークスキル持ち

咲魔 side

「私の一時退団には条件があるって…キリト君と立ち会いたいって団長が…」

申し訳なさそうにキリトを見る

「キリトもてもて？」

「ちげえ！！ヒースクリフはホモかよ！！そんなことはどうでもいい…しかし、珍しいな。あいつが条件を出してくるなんて…」

まったくそのとうりよ。ヒースクリフときたらこの前のラフコフ討伐戦の会議でも「任せる」の一言だったし…いい御身分だこと

「仕方ない、ヒースクリフに会いに行くよ」

「本当にごめんなさい…君を巻き込んだじゃって…」

「どづつてことないさ。何せ俺の………」

お？来るのか？来ちゃうのかキリト！

「攻略パートナーだからな」

うはあ…流石バーサーカーだ…私が言えた事じゃないけど…

アスナちゃんは一瞬不満の表情を見せたが、直ぐに戻した

「じゃあサクマ、行ってくるよ」

「行ってらっしゃい。クソリア充」

「……………」

微妙な表情を見せたがアスナちゃんと手を繋いで結晶で転移した

「ユニークスキル持ちも苦労するんだな…」とエギル

「そうねえ」

素っ気なく返した

突然、目の前にメールが送信されたと表情される

「んお？誰からだろ……………」

《ヒースクリフ》

《キリト君を招待してみたのだが、ユニークスキル持ちとして君にも用がある。》

私は君にユニークスキルを与えた覚えはないのだが、何故持っているかを参考程度に教えて欲しいな。
場所と時間は後程伝える》

めんどくさいなあ…

まあ、断る理由ないし、了承しとくか…

因みにヒースクリフはこのゲームの製作者である茅場晶彦その人である

まあ、突然何だけど…ヒースクリフは権限で私がプレイヤーでないことを知っていた…取り合えずAIって誤魔化した…
流石に英霊としてクソ大神の暇潰しに付き合わされてるとは言えないしね

さらにAIがユニークスキルを茅場…ヒースクリフから与えられないのを持つてるなんて考えられない

むう…めんどくさいことになってきたわね……

「サクマ、どうかしたのか？」

「むう…私までヒースクリフに呼び出された…」

エギルは半分予想していた風に「そうか」と頷いた

昼になって今更 / シキが起きてきた

先ほどのヒースクリフからのメールの内容を伝えると「ヒースクリフも戦いたいんじゃない？」と返された。まあ、その線も無くは無いと思う

自分が与えたスキルをどこまで使いこなせてるか見たいだろうしね

「…ただいま」

バツチリはもった挨拶が聞こえた

無論、キリトとアスナちゃん

次いで、エギルと私と もおかえりと返した

「んで、どうなった？」

「ヒースクリフとデュエルすることになった。場所は七十五層の《コリニア》にあるコロシウムだ」

が「ほらね」と小さな声で言ってこっちを見た

「端からみたら女の奪い合いね…妬ましい」

「妬むなよ…まあ、だいたい有ってるがな」

アスナちゃんが無言で二階に上がっていく
なんかキリトが変なことでも言っただんかな？
キリトも続いて階段を登る

「どうしたんかな？」

「キリトの奴、アスナちゃんがヒースクリフを説得してるのに自分からデュエルしたいって言うシチュエーションが浮かぶなあ」と
ノシキ

「あっははは！！それあり得る」

先日私達が開通させた七十五層は古代ローマ風の造りな感じね
街はキリトの《二刀流》とヒースクリフの《神聖剣》との試合が見
れると聞いた見物客で賑わっている
因みに昨日聞いた話では、キリトがデュエルに負けたら血盟騎士団
に入団しないといけならしい
ギルドに良い思い出が無いキリトにとってはいやだろうね…でもな
んかアスナちゃんと一緒に居たいだけらしく、ペアを組んでも血盟
騎士団に入団しても目的は達成されるわけだ

さて、コロシウムに着いたんだけど何故か血盟騎士団の団員がチケ
ット売ってた

ヒースクリフの策略……ではないだろうね…

コロシウムに入ってみるとここもまた凄い量の観客が居た
中には「殺せ」だの何だの言ってる奴もいる

「サクマ〜、始まるよ〜」

勝負は、一撃でも大ダメージを与えるかHPが半分になるまで続ける
勿論HP全損ルールは論外だしね

カウントダウンが残り五秒を切った

キリトは二刀を構え、ヒースクリフは十字剣と十字盾を構える

試合が始まった

キリトside

キリトがいきなり突進型のソードスキルで距離を詰める

ヒースクリフが盾でパライして、十字剣を横薙ぎに振るうが、キリトは寸での所を最小限の移動で回避して、《ヴォーパルストライク》を繰り出すがやはり盾でパライされる

「見事な反応速度だ」

「そつちこそ堅すぎるぜ」

両方の剣を叩きつける。パライされるが、ようやくヒースクリフも仰け反った

「はあああああああー!!」

二刀流の上位ソードスキル《スターバーストストリーム》を放つしつこく防御してくるがジリジリとHPは減っている

そして、ヒースクリフは俺から見て右に盾を持っているが、このソードスキルのラストは左からだ

いける!!

一瞬世界がぶれた

ヒースクリフがポリゴンさえ追いつかないとてつもないスピードで盾を左に移したのだ…

大技をパリイされて俺に大きな隙が発生した
そこに強攻撃を入れられ、デュエルが終了した

ヒースクリフを見る。そこには勝利の喜びの表情は無く、何故か、
険しい顔をしていた…

咲魔 side

まあ、そうでしょうね。最初からヒースクリフが勝つって思った
し。キリトが予想していたより強くてもシステムのオーバーアス
ト使ってもね

「うう。キリト負けた…応援してたのに…」

は残念そうだ

「キリトが負けることくらい見なくても解ることよ。ヒースクリフ
は最強でなければならぬ存在だしね」

「なんで？」

「負けたらこのゲームが終わるじゃない。ラスボスなんだから」

「あ、そっか」

んお、メールが来た

《ヒースクリフ》

《三十分後、グランザムの血盟騎士団本部の私の部屋にシキ君も連れて来たまえ。以上》

へーいへい

「シキ、血盟騎士団本部に行くよ」

「あい」

三人のユニークスキル持ち（後書き）

キリト対ヒースクリフでした！！戦闘描写が（も）相変わらず下手ですが次回もヨロシクです！！

番外編〜タイタンスハンド上 (前書き)

勢い余って番外編!!では、どぞどぞ

番外編くタイトンスハンド上

咲魔 side

五十階層にある、エギルの店にキリトが入ってきた

「ういゝ。お久しぶり、キリト」

「久しぶり、サクマ。実は犯罪者^{オレンジ}討伐クエを受けたんだけど、一人じゃ色々ときついからパートナー探してたんだよ」

ほお…キリトがパーティー組もうなんて珍しい…
まあ、犯罪者はなにしかか解らないし犯罪者自体探すのは一人だと効率が悪いからね

「ん、いいよ。じゃあシキ呼んでくる」

一階のソファーベッドで寝ているエギルを起こさないように気遣いながら二階に上がる

「シキ、オレンジ討伐クエ行くよ」

「オレンジ？なんで？」

「さあ？理由は聞いてないけど、どうせパーティーは私とキリトとシキの三人だし？」

「ん、わかった」

キリトに / シキも大丈夫だと伝えた

「で、クエの内容は？」

三十五層の主街区で歩きながらキリトに尋ねた

「ターゲットはオレンジの《タイタンズハンド》って言うギルドだ。八日前に《シルバーフラグス》ってギルドを襲ってリーダー以外皆殺しだそうだ。リーダーだった男は最前線のゲート広場で泣きながら仇討ちしてくれと頼まれたもんでな…」

「へえ…んでここにそいつが居ると？」

「なんでも、とあるパーティーに潜入してるらしい。明日には《迷いの森》ってダンジョンに入るらしい。先ずは尾行だ」

調べてるなら自分でやれよ…とか思っただけではない

「因みに転移結晶は使えないからな」

あ、そゆこと…

取り合えず今日そのパーティーは何処にいるか解らないらしく一日目は宿屋に泊まることにした

久々の宿屋での夕食にありついた。いつつも堅パンしか食べてないからね…

「キリト、おごってよね」

「いや、ここは自分のは自分で…」おごって…くれないの?」……仕方ないな…」

必殺上目遣い

一回クラインにやったら鼻血出しやがった

しばらくするとNPCの店員が注文を聞きに来た

「私はきのこのクリームパスタで」

「俺は…これで…」キリトがステーキを指差す

「うーん…じゃあ、苺タルト」

それはお菓子に入る気がするんだけど…

「かしこまりました」

アインクラッドでは、一々料理をする必要は無く、料理スキルを修得していて、一定時間料理していれば勝手に出来る仕様だから、一

分位したらまた、料理を持ってきた

「でさあ、迷いの森って何階層くらいの強さなの？」

「知らない。でも中層レベルの人達が狩りをしてるから少なくとも俺たちが死ぬ可能性はないな。戦闘時回復で完全に回復できる圏内だろうから」

そういつてキリトは肉にかぶり付いた

「…何の肉なんだよ……」

スツゴク微妙な顔をした

ノシキは美味しそうに食べてる

私もパスタを食べるが…

「こんなものがパスタであるものか…」

固い…スツゴク固い…

そして、きのこもなんか紫色したのがある…

麺はもはやパスタの味がしない…なんか…何なのよこれ…

割りに会わない食事の代金は全てキリトに払わせた
そのまま宿屋の自室に戻る

そのまま浴衣に着替えて寝てしまった

「ねえ、あれがパーティーじゃない？」

現在迷いの森に入って目的のパーティーを見つけた
みれば猿人型モンスターの《ドラंकエイプ》って言うところらで
最強クラスのモンスターとやりあってる
六人編成みたいでターゲットのロザリアもいるはず…

「ああ、あの細身の長槍使いがターゲットだぜ」

みれば小さな女の子と言い合いをしているようだ

んお？

「あの子ビーストタイマー？」

肩にパールブルーの綿毛に包まれた小竜型レアモンスターである《
フェザーリドラ》が乗っかってる

遭遇すら困難らしいんだけど、どうやらかなり運がいいんだらう

「そうみたいだな…ロザリアがかなり挑発してるみたいだぜ」

結局業を煮やした女の子がパーティーを離れていった…

っておい…！

「キリト！！《ドリンクエイプ》って特殊能力もってなかった？」

「ああ、確か壺で回復をする筈だが…」

私たちは隠蔽スキルが熟練度がMAXだから一度もモンスターにエンカウントされずに来たけど、中層プレイヤーはその限りではない。さらにドリンクエイプの群れに囲まれたら体力を減らしてもスイツチされて最悪殺されるのが落ち…

ノシキは気づいたようにはっと顔を上げる

「それってスツゴイ危なくない？あの子」

ようやくキリトも気づいたようだ

「仕方ないな、二手に別れよう。どうせ大人数でロザリア追っても意味無いし、隠しボスみたいなのも居るかも知れない…シキは単独で残りのパーティーを追ってくれ」

シキは「うん」とうなずくと隠蔽スキル発動状態で追いかけて行った

「サクマ、今頃あの子が遠くに行ったたかも知れないから走るぜ」

「ええ」

できるだけモンスターとエンカウントを避けて走って行った

「見えたよ！！つて…多くない？」

見えたと言うのは比喻で索敵圏内に入ったというだけで、少女の姿は見えない

が

大量のドラクエイプが一定方向に向かってる
所謂集団リンチだ

先陣を切ったのはキリト
背中の黒光りする大剣を振り回す
私も鎌を背中から抜いて、猿人の首を切り落とす

因みに私がソードスキルを使わないのは、システムに頼るのが癪だからだ

何千年と自らの鎌術で戦ってきたので今さら変えるつもりもない

キリトが片手直剣の単発スキル《ヴォーパルストライク》でドラクエイプを串刺しにする
キリトと私はレベル78
で、ここの安全マージンはレベル38…ぶつちやけ一撃で倒せる

私がひたすら首を跳ねて、キリトがひたすら斬り倒したら、ようやく女の子が見えてきた

その瞬間

パァーン！！

ポリゴンが消滅した

女の子をかばったフェザーリドラがドラクエイプの棍棒に叩き殺されたのだ

キリトは彼女を襲っていた猿人を横薙ぎに斬った
辺りの猿人を殲滅しおえた私達は女の子に駆け寄った

「……すまなかった。君の友達、助けられなかった…」

キリトが謝る

女の子の全身から力が抜けた。そのまま膝について涙を流し、嗚咽を洩らしながら言った

「お願いだよ…あたしを独りにしないでよ…ピナ…」

「すまなかった…」

「…いいえ…あたしが…バカだったんです…。ありがとうございませ…助けてくれて…」

ん？おい少女、その羽根…

「その羽根って心アイテムじゃない？アイテムの名前見せて？」

私が駆け寄ったらウィンドウを見せてくれた

《ピナの心》

それをみて、また泣き出しそうになった

「ま、待った待った。心アイテムが残っていれば、まだ蘇生の可能性がある」

キリトの言葉に少女は慌てて顔を上げる

「え!？」

「最近解ったことだから、まだあんまり知られてないんだ。四十七層の南に、《思いの丘》っていうフィールドダンジョンがある。名前の割りには難易度が高いんだけど…。そこのでっぺんに咲く花が、使い魔の蘇生用アイテムらしい」

「ほ、ほんとですか!？……四十七層…」

一瞬希望に満ちた表情を見せたが、安全圏とは言えず、気を落とした

「うーん…実費と、報酬をポツキリ貰えば俺が行ってきてもいいんだけどなあ…。使い魔亡くしたビーストテイマー本人が行かないと、肝心の花が咲かないらしいんだよな…」

「いえ…。情報だけでも、とってもありがたいです。頑張ってレベル上げすれば、いつかは…」

「使い魔が蘇生できるのって確か死んでから三日の筈だったわ。過ぎたらアイテムの名が《形見》になっちゃうの…」

「そんなー!!」

キリトが立ち上がり、何やらウィンドウを操作した

「この装備で五、六レベル程度は底上げできる。俺とこいつともう一人居るんだけどなんとかなる筈」

「えっ……………なんで…そこまでしてくれるんですか？」

キリトは口を開くがすぐに閉じ小声で言った

「……………マンガじゃあるまいしなあ。……………笑わないって約束するなら、言っ」

「笑いません」

「きみが…妹に、似てるから」

余りにベタベタな発言に私も吹き出した

キリトはころげまわる私を一瞥して言った

「わ、笑わないって言ったのに…サクマまで酷いぜ…」

必死に笑い転げるのを押さえるが、お腹痛くて死にそう

「よろしくお願いします。助けてもらったのに、その上こんなことまで…こんなんじゃないやせんぜん足りないと思っんですけど…」

「いや、お金はいいよ。どうせ余ってたものだし、俺達が来た目的と多少被るからな」

「すみません、何から何まで…。あの、あたし、シリカっていいます」

「俺はキリト、こいつはサクマ。しばらくはよろしく」

「あはははっよろしくね」

キリトはいまだに笑い続ける私をみて、ガツクリと頂垂れた

番外編くタイトンスハンド上 (後書き)

ふと、見ましたら、お気に入り登録されてる方がいらっしやるではないですか!!

いや、もうホント感謝に次ぐ陳謝です!!

こんな小説ですいませんでしたーつつつつく(＾o＾)ノ

番外編〜タイタンスハンド下〜（前書き）

ながいながい番外編下巻です！！圧縮不可能ww
では、ゆっくりしていいね！！

番外編〜タイタンスハンド下〜

咲魔 side

シリカと一緒に三十五層の主街区に来ていた
白い壁に赤い屋根の建物が並ぶ農村っぽい造り
現在は中層部の主戦場になっているらしい

「お腹空いたな」と私

「そうだな…シリカ、旨い飯屋はないか？」

「あたしの泊まってる宿屋のチーズケーキがスッゴク美味しいんで
すよー!」

「よし、そこにしようぜ! ……シキはどつする?」

「ちょっとまって、メールする」

手早くメールを送信する。向こうも直ぐ気づいたみたいで、直ぐに
来るらしい

「おつす! つて…どちらさん?」

疾風の如く帰ってきた はシリカをみて頭に?マークを浮かべる

「ああ、この娘はシリカ。タイムモンスターを生き返らせる為に思い出の丘に行くことになった…って、尾行してたパーティーに居たじゃん」

「あ、そう言えば単独で無茶してた女の子か。私はシキ、よろしくな！」

「シリカです、よろしくお願いします！！」

さつきいった宿屋に向かう

途中シリカ…と私とシキをついでにパーティーに勧誘してきた。ウザい…

「あ、あの…お話ありがとうございますけど…しばらくはこの人とパーティー組むことになったので…」

シリカは受け答えが嫌味にならないようにそれらの話を断る

私も勧誘されたことあるけど正直ダルいんでバツサリと切り捨てたことがある

大体SAOに女性が少ないから、アイドルとして勧誘するケースは少なくない…とストーリーカーもね…

ええー、そりやないよ、と不満の声が上がる

キリトは黒革のロングコートとシャツ、私は白黒のドレス、シキはハッピーノエルと呼ばれるpsp2iに出てくるワンピースしか装備せず、全員鎧はなし、キリトは片手直剣一本の盾無し
パツと見強そうに見えない

「おい、あんた」

熱心なシリカ信者…もとい、勧誘してきた背の高い両手剣つかい（笑）がシリカを除く三人を見下ろし、口を開いたら

「見ない顔だけど、抜け駆けはやめてもらいたいな。俺らはずっと前からこの子に声かけてるんだぜ」

キリトがなんか言おうとしたが、私が先に口を開く

「調子に乗んなロリコンが。奪いたきゃ心で奪えカス」

ドスの効いた声で言った。男はビックリしたが、気をとりなおした

「んだと？お嬢ちゃん。喧嘩売ってんのか？ワレ」

「ああ売ってるさ。やりたきゃやっても良いわよ？」

「デュエルだ畜生め。ボコボコにしてやる」

血の気の多い男ね…

「おい、サクマ…」

キリトがかなり呆れてる

「わるいわね、ちょっと時間さいて頂戴」

キリトは無言で了承した

「三、二、一」

両者とも抜刀する

「DUEL!!」

男は雄叫びを上げながら突進型ソードスキルをする

「うおおおおお!!」

両手剣が頭に振り下ろされる

「システムに頼りすぎ、もっと通常攻撃も使った方が良いわよ」

斬撃は人差し指と中指に止められた

男は驚愕の表情を見せる

そのまま指で男ごと剣を放り投げた

地面に叩きつけられる

予想外にそれだけで強攻撃扱いらしく、デュエルは終了した

「おっつかれ〜。ナイスファイト!!」

戻ると が笑顔で向かえた

「あれがファイトと言えるならな…」

呆れるキリト

シリカは驚愕して眼を見開いてる

体術スキルMAXですがなにか？

遅くなっただけど、今日の夕食が始まる

全員、黒パンにシチュー。そしてシリカおすすめのチーズケーキを頼んだ

「今日はすみません、迷惑かけちゃって…」

「いやいや、それにしてもすごいな。シリカは人気者なんだ」

「マスコット代わりに誘われてるだけなんです、きっと。それなのに…あたしいい気になっちゃって…一人で森を歩いて…あんなことに…」

あー、悪いムード。シリカのまぶたに涙が浮かぶ

「大丈夫。絶対生き返らせられるさ。心配ないよ」

キリトが落ち着いた声で微笑みかけた

これだからモテる男は…

「あ、キリトさん。ホームはどこ…」

「ああ、いつもは五十層なんだけど…。面倒だし、俺もここに泊まろうかな」

「そうですね！」

シリカが嬉しそうに手を叩いた…

おい、女の子だからって誰でもフラグ立てたらいかんぞコラ

代金を支払い終えて外に出た瞬間、隣の道具屋からぞろぞろと五人
集団がでてきた…ターゲットも確認。昨日のパーティーね

「あら、シリカじゃない」

「……どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね。でも、今更帰
つてきても遅いわよ。ついさっきアイテムの分配は終わっちゃった
わ」

「要らないって言った筈です！！急ぎますから」

ムカつく女ね…ようじ…ゲフン。少女苛めなんて死ねば良いのに…

「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？…あらら、もしかしてえ」

「死にました…。でも！ピナは、絶対に生き返らせます！！」

シリカはキツとロザリアを睨み付ける

「へえ、てことは、《思い出の丘》に行く気なんだ。でも、あんた

のレベルで攻略できるの?」

「できるぞ」

キリトはシリカをかばうように前に出た

「そんなに難易度の高いダンジョンじゃない」

「あんたもその子にたらしこまれた口?見たところそんなに強そうじゃないけど」

「一回死ねば?クズが」

あ、声に出っちゃった

「何!?!」

「サクマ、行こう」

キリトに促され、宿屋に入っていった

部屋は女子部屋と男子部屋に分けた

「なあ、シリカ」

「なんですか?シキさん」

「キリトに惚れたろ?」

「なっ…なにを／＼／」

赤面してちゃ否定は肯定にかわるわよシリカ…

「ほれ、シキもシリカをからかうなって。それと、ホイ、これあげるわ」

金属製の小さな鎧を渡した

「ありがとうございます…これは何ですか？」

「勿論ピナ専用の鎧だよ。これさえあればぶっちゃけモンスターの攻撃で一撃死はないから」

てか踏ん張り効果つけたからボスの攻撃でも一撃は耐えられる
勿論創造した

「ピナ…」

風呂に入って浴衣に着替え、明日の予定確認の為キリトの部屋に向かう

シリカもついてきたがってたから来させた…まじでキリトに惚れたのかな…

んで、会議なう

まあ、キリトが明日の予定をいうだけだけどね

「……………ここが主街区で……………!!」

三人が一斉に顔を上げた

キリトがドアに駆け寄る

「誰だ!?!」

次いで慌てたような足音

「ど…どうしたんですか!?!」

シリカがビククリして訪ねる

「どうやら、盗み聞きされてたらしいわね…」

「でっ…でも、ドアの向こうからじゃ聞こえないんじゃない…」

「聞き耳スキルを上げてたらその限りじゃないんだ。そんなやつ、
上げてる奴は少ないんだけどな…」

ターゲットの仲間かね? まあいいわ、オレンジギルドの一つくらい
崩壊させてやんよ

「殺しは無しだぜ?」

キリトが私の心中をトレースしたらしい
シリカの頭には? マークが立っているのだが

取り合えずキリト部屋にシリカを放って寝ることにした

脳内に起床アラームがなる…ふと眼を覚まして部屋を見回す

…シリカが居ない

寝起きの無感動な脳内で機械的に確認した瞬間、隣の部屋からドンと音がした

は？

少しすると、シリカが部屋に転がり込んできた

「…おはよ、どうかした？」

「いつ…いえ。なっなんでもないでしゅ／＼／＼…噛んじゃった…／＼」

ん？妙に赤面してるわね

「まいつか。なら《思い出の丘》《に行こう」

「あ、あの…」

「ん？」

「えっと、サクマさんってお幾つくらい…って現実の話は厳禁で

したね…」

「歳くらい聞いてもいいんじゃない？私は……十六よ…」

流石に千歳超えとか言えないし…

「年上でしたか…あたしは十五です」

ああ、身長低いから同年齢くらいって思ったのねあんまり変わらな
いけど…

「はは…やっぱ十六でこの服装はないわよね…」

「いつ…いえ、とても似合ってると思いますよ」

高一でコスロリっぽいドレスってホントギリギリよね…

しっかり朝食をとった後、道具屋でポーション等の準備を済ませ、
ゲート広場に向かった

「あ…あたし、四十七層の街の名前知らないや…」とシリカ

「いいよ、俺が指定するから」

シリカがキリトと手を繋ぐ…やっぱり赤面してる…

「『転移、フロリア』」

一瞬眩い光が包み、転移された

「うわあー!!」

シリカが歓声を上げる

ゲート広場には、様々ないろとりどりの花々で溢れていた

「すごい…」

「ん〜、久々の『フラワーガーデン』は良いわね〜。空気がきもちいい〜」

シリカも花壇の前にしゃがみ込んで、花々を眺めている

シキは…昨日のパソコン（私がiMacを模して創った）でネット（無理矢理SAOの回線を通じて、魔法で隠蔽した完璧なやつ）でニコ動（言うまでもなく）を朝の五時までしてたから眠たそうだ

「さ…さあ、フィールドに行きましょう!」

はっとして立ち上がったシリカ。皆が頷いた

ゲート広場をでて、メインストリートを歩く

「あの…キリトさん。妹さんのこと、聞いてもいいですか?」

「い…いきなりどうしたんだ?」

すごい意気込みでフィールドに入っていったシリカだが、予想もしていなかったものだった

モンスターの容貌

ぱっと見「すごいでっかい歩く花」

私もこのフィールドに来たときは苦笑してしまった
キモいとしかいいようなないモンスターがたくさん出てくるこのフィールドは数多の女性プレイヤーを発狂させたことだろう

「慌てるなシリカ!!そいつの弱点は白いところだ!!」

「だって…きもちわるいんですううう!!」

幼ゴホン少女vs触手付巨大植物モンスター

これは酷い…

あ、シリカがソードスキル外した…

その瞬間触手を伸ばして、シリカの胴に巻き付く…
何が面白いのか宙吊りにしてしまった

パンツが見えそうで見えない

左手で必死にミニスカを死守するシリカ
顔を赤くして顔を隠すキリト

え?私達?

(^ q ^) (^ q ^)

え

「助けてくださああああい!!」

大して体力も減ってないし…観戦続行(^ q ^)

シリカはチラツとキリトが見てないのを確認すると、左手を外してソードスキルをぶちこんだ

あ、白だ

モンスターは絶叫してポリゴンと化した

ひょいっと着地したシリカが訪ねる

「……見ました？」

「…見てない……」 キリト

「バツチリ見ましたあb」 私とシキ

シリカはキリトに見られなかったただけ良しとしたらしい

シリカ vs イソギンチャク

続いてのエンカウントは…

あら、キモい

触手を生やしたヌルヌルのイソギンチャクだわ!!

「よし、シリカ。回復は任せなさい!!」

「……………（半泣き）」

因みにシリカの装備は短剣だからどうしても超接近しないといけない

はっはww次は粘液vs少女ですかwwww

おい、いまk t k rした奴前に出なさい

「いやあああああ!!」

あ、巻き付かれた

シリカがトラウマになったら困るのでっつ

「ていつ!!」

触手を一本斬って退避

止めのソードスキルでシリカがイソギンチャクを撃破した

うはw身体中ベトベトだぁww

イソギンチャクがポリゴンとなって消えたら粘液も消えるんだけどね

「うう…」

シリカの瞼に涙が溜まっていた

「よし、次々いー!」

その後はモンスターの姿にも慣れてきたらしく、着々と進んだ
でも、イソギンチャクが出てきた瞬間スイッチしてた

「丘が見えたわよ」

聞いた瞬間シリカがダツシュする

丘の頂上に来た

丘の上には使い魔蘇生アイテム《プラウネの花》の蕾があるはず
ビーストテイマーに反応して花が咲き、花に乗ってる雫を命アイテムに振りかければ蘇生する

「あつー!ありがとうございましたよ!」

「よし、ここは高レベルのモンスターが多いからな。帰るまで蘇生は我慢だ」

「はい」

ん、メールだ

《キリト》

《索敵圏内にロザリアが入った。手筈道理たのむ》

よし、作戦開始

シリカには軽くモンスター狩ってくると言い、橋の近くの草むらに
隠蔽スキルを発動させて待機する

後はキリト達が来るのを待つだけ…

お、来たね

「そこに隠れてる奴、出てこいよ!」

キリトが橋の向こうに向かって叫ぶと人影が現れた

「私の隠蔽を見破るなんて、大した索敵スキルね剣士さん」

「ロザリアさん!?!どうしてここに」

シリカが驚いている

「その様子だと、都合よく《プラウネの花》を手に入れたようね。

「私に頂戴」

「……！？な……何を！？」

「そうは行かないなロザリアさん。いや、オレンジギルド《タイタンズハンド》のリーダーさん、と言った方がいいかな？」

「え……でも……だって……ロザリアさんは、グリーン……」

「シリカ、犯罪者が皆オレンジと思ったら間違いなよ。パーティーに紛れ込んで、待ち伏せポイントに誘導する……とかね？」

シキが低い声で言う

「そ……そんな……じゃ……じゃあ、この二週間、一緒にパーティーにいたのは……」

「そうよお。あのパーティーの戦力を評価してえ、たっぷりお金が貯まるのを待ってたの。……… なんてけどお、一番の楽しみが抜けちゃったからどうしようかと思ってたら《プラウネの花》を採りにいくって言うじゃない？レアだから売ったら高くつくわよお」

「ロザリアさん、お前にはあげられないな。この花はシリカが使うものだけ。おいそれと渡せない」

「あんたって本当に馬鹿？それともマジで体でたらしこまれちゃったの？」

シリカはロザリアがキリトを侮辱するのに眼が赤くなるほど憤りを

覚えた

「いや、俺たちもあんたを探してたのさ」

「どづいつことかしら？」

「十日前に、《シルバーフラグス》ってギルドが襲われた。四人殺されて、リーダーだけが残った…タイタンズハンドの仕業だぜ」

「あの貧乏な連中ね」

「リーダーが俺に泣きながら頼んできたぜ。黒鉄宮の牢獄に入れてくれとな」

「で、あんた、その死に損ないの言うことを真に受けてアタシらを探してきた分けた。でも、たった三人でどうにかなると思ってるの？」

待ち伏せは十人…まあ、楽勝レベル

「き、キリトさん…人数が多すぎます、脱出しましょう」

だがキリトは動かない

「キリトさん!!!」

「キリト？」

不意に賊の一人が呟いた

「その格好…盾なしの片手剣…《黒の剣士》？…！！小さい黒のワ
ンピも《二爪の黒戦姫》！？ヤバイよロザリアさん…こいつら、攻
略組だ！！！」

キリトもシキも厨二みたいなあだ名付けられたものよね

男の言葉にシリカを含め驚愕する

「こ…攻略組がこんなところでウロウロしてるわけないじゃない！ど
うせコスプレ野郎よ！！てか、この人数なら余裕だわよ！！！」

口々に同意の言葉をわめいて、一斉に抜剣する

「キリトさん…無理だよ、逃げようよ！！！」

シリカが叫ぶが無論、二人とも抜剣すらしめない

「『オラアアアア！！！！』」

「『死ねええええ！！！！』」

「いやあああああ！！やめて！やめてよ！！キリトさんたちが…死
んじゃうよ！！！」

両手で顔を覆い隠しながら叫ぶが、とどくはずもない

しかし、シリカはあることに気づいた

二人のHPが減っていない

正確には減っているが、数秒後、全回復するのだ

「あんたらなにやってんだ！！さっさと殺しな！」

苛立ちが含まれるロザリアの命令に、再び斬撃の雨が降り注ぐが、やはり、状況は変わらない

「お…おい、どうなってんだよコイツ…」

「十秒あたり四百つてどこか。それがあんたら十人ちよいで俺とシキに与えるダメージの総量だ。俺のレベルは七十八、HPは一万四千五百…さらに、バトルヒーリング戦闘時回復が十秒あたり六百ポイントある。何時間攻撃しても無駄だ」

「そんなのアリかよ…ムチャクチャじゃねえか」

「たかが数字が増えるだけで差がつくなんて、レベル制MMOは理不尽だねえ…」とシキ

「チツ…転移」

ロザリアは結晶を掲げるが、言葉が言い終わらないうちに、結晶をとられた…首には血の色のような真っ赤な鎌の刃が当てられている

「今日は、ロザリアさん。悪いこは一回死ぬ？」

「ひっ!?!」

ロザリアは体を強張らせる

「ロザリアさん…そいつが一番ヤバイよ!! 《殺戮人形姫》だよ！
攻略組だ!!」

「そんな名前望んで無いんだけどね」

キリトはポケットから結晶を取り出す

「これは、俺に依頼した男が全財産をはたいて買った回廊結晶だ。黒鉄宮の監獄が出口になってる」

「もし、嫌だと言ったら？」

「全員殺す…と言いたいのには山々なんだが、そのサクマとシキが拷問を心得てるらしいからな。コリドーオープン」

オレンジプレイヤーは毒づいたり、無言だったり飛び込んで行った

残りは、ロザリア一人

「やりたきゃ、やってみなよ、グリーンのアタシに傷をつけたら…」
「残念、私は既にそういった人に傷をつけてオレンジになったことがあるから」

そのまま回廊にぶちこんだ

「ごめんな、シリカ。君を囿にするようなことになっちゃって。俺のこと、言おうと思ったんだけど、君に怖がられると思って言えなかった…街まで送るよ」

「あ…足が動かないんです…」

シリカは何故か私がおんぶして帰った

それから宿屋で別れたが、シリカとは今でもメールを交換し合っている仲だ。キリトもたまにメールのやり取りをするらしい…

ピナの防具は何回も二人の命を救ったらしい…幸運をMAXにしておいたからね

番外編〜タイタンスハンド下〜（後書き）

殺戮人形姫 W W W テラ厨ニ W W W W 誰がつけたんでしょか… S S
親衛隊あたりでしょうか W W W 意外とヒースクリフだったり W W

p
s

ヒースクリフを一発変換したら、《日一好く利府》になりました W
W…はい、どうでもいい

驚愕の事実（前書き）

こんにちはー。今回は結構みじけえです

予告としては、ヒースクリフ、驚愕の事実ですね！！

それと、この小説の前作を読まないといけない場面があるのは、
愛敬で

では、ゆっくりして行ってね！！

驚愕の事実

咲魔 side

ヒースクリフの呼び出しに応じて、グランザムにある、血盟騎士団の本拠地にやってきた
付いた瞬間、親衛隊に囲まれて写真撮られたりしたのはこの際どうでもいいことである

今は、血盟騎士団本部の団長室前に居る

コンコン

「入りたまえ」

「失礼するわ」

赤の絨毯が引かれ、壁が辛うじて白地なもの、ほとんどが赤い部屋奥には、通常血盟騎士団のユニフォームは白地に少し赤なのだが、それを反転したようなユニフォームを着ている団長：ヒースクリフが赤い椅子に座っている

私達二人は言われずとも、ヒースクリフの前に用意された、ソファーにドサツと座る。これが面接ならば一発で失格である

「この部屋の防音は？」

私の問いにヒースクリフは答える

「外部からは絶対に聞こえないよ。無論、聞き耳スキルを上げていてもね。そして、こちらの了承無しに扉は開かない」

「大した設備ね、ヒースクリフ。……いえ、茅場晶彦と言った方が良いかしら？」

「うむ、いかにも。しかし、君達は何者だ？」

「「AIよ」「」

何故か見事に声が重なる

「ふむ。私の知らないAIは居ない筈なのだがな。私のGM権限も効かないのなら確かにプレイヤーですらない……」

GM権限行使したんだ……実のところ、私達のSAOでの扱いはわからない……大神が現実に転移させて無理矢理ナーヴギアを被せた可能性も無いわけではない……が、GM権限を通さない理屈はどう考えてもわからない……ケータイも何故だかもってるし大神にメール打つところ

「どんな権限を行使したんだ？」とシキ

「無論、サクマ君のユニークスキルの削除だよ。双鎌と創造だったかね。創造なんて、私とカーディナル以外持っているのは不自然だからね」

まじで？固有結界ってそんなに万能だったっけ？

幾ら固有結界《無限の創造世界》でも、この世界はシステムが神み

たいなものだし…能力がシステム超えた？

「まあ、おいそれと創造してるわけじゃないし、人前では全然使って無いから気にしなくても大丈夫よ。それと…」

一旦言葉を切って、繋げる

「…システムのオーバーアシスト使ったわね？」

「バレてしまったね。しかし、どうして…時間を止めたのだが、君達は動けるのかね？」

「あちゃー。見られてたか。まあ、愛敬してよね」

「しかたない。では、保留としよう。ならば、当分君達はAIということにしておこう…それと、サインを…」

私達の前に色紙とペンを出した

「「はい？」」

「私とて、君達の親衛隊の名誉会員なのだよ」

(。。。;) (。。。;)

なん…だと!?

「驚愕の事実ね」

「びっくりだよホント」

取り合えず書いてあげた

「うむ、ありがとう。これからも君達を後ろから守っていくよ」

「「似合わねえー」」

血盟騎士団本部を後にして、エギルの店に戻って行った

エギルの店

二階にキリトとアスナちゃんが居ると聞いたので二階に上がる

純白の騎士団のユニフォームで身を包むキリトを発見

「ぶっ」

「あはははははwww」

似合わねえwww

「地味なやつって言わなかったっけ？」

「それが一番地味なやつなのよ。うん、すっげく似合ってるよキリト君」

「そのわりには、後ろの二人は大爆笑してるんだけどな……」

「「似合わねえwww」」

んー、これからどうすっかな？キリトはギルド入りしたし、……ソ
ロのレベル上げも面倒だしね
ともあれ、ギルドは性に合わないしな

エギルが二階に上がってきた

「キリトが騎士団に入るならサクマもシキもギルドに入ったらどう
だ？クラインが募集してたぜ」

「んあー。ギルドは好きじゃないんだけど……まあ、クラインだから
いつか」

「団体行動とかひさしぶりだなー」

早速メールつと

……

お、返信きた…早いわね

《クライン》

《おう、おめえらなら大歓迎だぜ。今からそっちに向かうからよ》

かくして、クラインのギルド《風林火山》に入ることになった

驚愕の事実（後書き）

みじけえー

と言っわけで、ヒースクリフえ W W

風林火山（前書き）

誠に申し訳ないことで、今回は短くなっております…

私の文章力の問題やSAN値の問題や…

では、ゆっくりしていいね!!

風林火山

咲魔 side

クラインが迎えにきた
どうやら、他のメンバーは最前線に居るらしく、七十五層まで、ゲートで転移した

「知ってると思うが紹介するぜ、コイツは今までソロで戦ってきた攻略組のサクマとシキだ。おめえら仲良くしろよ!!!」

ギルメンはクラインあわせて七人。かなりの小規模ギルドだが、最前線で戦えるだけの戦力を保有し、クラインに至ってはここまで誰一人死なせずに上がってきたということで、キリトからも少し尊敬されてるらしい

クラインが紹介すると、男どもは雄叫びを上げた

ギルメン六人は我先にと自己紹介を始めた

両手槍使いのゼロ

棍棒使いのハイド

両手剣使いのアスカ

片手直剣と盾使いのイクス

重槍使いのコツヘル

海賊刀使いのアルス

そして、刀使いのクライン

全員友達だそうだ

「よし、自己紹介もすんだし、レベル上げ行くぜ!!」

「○○オオオオオオ!!」

うお、すごい迫力

「クライン、いち早く蟻山からまた蟻が湧き出したらしいわ。そこならかなりいけるはず」

と、さつき買った情報を言う

「じゃあそこ行くぜ!!」

「○○オオオオオオ!!」

蟻山

「よし、おめえら、転移結晶はオブジェクト化しとけよ!!」

蟻は…正式名称は《キラアアント》は攻撃力が高い割りに防御力と体力がかなり低い上経験値はガツポリはいる
絶好のレベル上げモンスターである

因みに安全マージンはレベル七十で、風林火山のメンバーの平均はレベル八十五、クラインはレベル八十八
そして、私とシキはレベル九十五

しかし、そのレベルでも蟻の経験値は美味しいくらいである
なにせ、湧くように出てくるから経験値はガツポリ頂ける

ゼロとコツヘルが後ろから突き、アスカ、アルスが中陣、ハイドと
イクスが近接攻撃で、近接、中陣はクラインとスイッチする
クラインにはなかなか統制があるわね

近接が二人増えることで、クラインは中陣から攻撃に集中できて、
後ろ二人も楽になる

たまに近接がダメージを受けすぎたら空かさずスイッチで近接と中
陣が交代する

蟻の大群が雪崩こむが、統制された連携プレーで掻き分けていく
まもなく制限時間（蟻狩りをする輩は多いのだ）にたつする

「よし、撤退するぞ！！」

「「「オオオオオオオ！！」」」

「「「おー！！」」」

適当に掛け声かけてみた…

…あれ？なんでそんな微笑ましいものを見るような目で見るの？

ヤメテーンナメデミナイデー

「よし、おめえら、レベルは上がったか？」

「「「オオオオオオオオ!!」」」

「上がってないわよ…」

「全然だよ」

「よし、もう一回行くぞ!!」

「「「オオオオオオオオ!!」」」

「「おー!!」」

その後、五回に渡って蟻狩りをした。
チームの平均レベルが九十になった…

あれ？

レベル上がるの早くない？

まさか、風林火山のメンバーはバグ仕様なのかな…

私はレベル百を超えて百…私もバグ仕様だったことに今更思った

ってことで、七十五層の迷宮区なう

攻略じゃなくて、どんなタイプのが出るのか観察だそうだし
しっかりしてるねクラインのくせに

出てきたのは骸骨たち…またかよ!!…じゃなくて、騎士っぽい骸
骨で…名前が《ゴーストナイト》

ゴーストナイトでも、骸骨の馬に乗っていたり、剣の種類とかも様々だし、弓まで使ってくる
なかなか手強い相手である

まずは、前衛も後衛も関係なくモンスターと戦い、コツを掴むそうだ

「はああああっ!!」

骸骨騎士に一閃

骸骨系モンスターは首がクリティカルという前提が無いため、運任せでクリティカルを出すしかない

だいたい、鎌自体攻撃力は片手剣と同じくらいな上、片手剣の重いやつよりかなり重い
ならば…

何度か攻撃して、サイドステップ

後ろには両手槍使いのゼロが待ち構える

盾を付けない槍なので、振り回しやすいため、連続攻撃がはいる
遊撃手として、片手直剣と盾を構える片手直剣と盾を構えるイクスが攻撃する

流石友人たちだけあってコンビネーションがすばらしいわ

私は邪魔をしないようなギリギリで鎌で範囲攻撃をする

数分後、戦闘は終了した

「サクマもシキもすげえな！！俺らのコンビネーションを一発で見抜くなんてよ！」

クラインが目をキラキラさせて近寄る

「伊達に戦闘経験積んでないわよ？クラインこそ、よくあんなコンビネーションを作れたわね」

「あれはよ、なんつうか…前までは俺らにしか出来ないコンビネーション技だったんだぜ？それに合わせれるのは居なかった…だがおめえらは違う！！俺…なんか嬉しくてよ…」

「なっ…涙浮かべられても困るんだけど…」

「いよっしゃあああ！！もういつちよ行くぜえええ！！」

クラインの号令に雄叫びを上げる男ども

私達も苦笑しながら号令に加わった

風林火山（後書き）

なんというか…クラインのギルドのことが書きたかったんですが…
こんなもんなんですかね…

それにしても俺のSAN値は直葬しそうです（エ

七十五層（前書き）

さて、骨百足との死合です。

戦闘描写は苦手ですが、今回は咲魔と に視点を分けて書きました
では、ドゾドゾ

七十五層

咲魔 side

ギルド風林火山に入ったのもつかの間：新たなボス部屋が発見された
ギルドに入ってから二週間だ…

因みにキリトとアスナちゃんは結婚したと風の噂

一応メールで祝ったけどそれだけで顔も合わせてない…二十二層の
田舎で家をついたらしいけど

そのキリト達もヒースクリフから収集がかかった

アインクラッドではクォーターエリア：つまり二十五層、五十層で
は、他のポイントと比べられないほど強く、死者を出した

今は七十五層、クォーターエリアだ

さらに警戒すべき点がある…

調査隊が全滅した

調査隊は普通、二つの班に別れるのだが、見るだけなので、攻略組
ほど危険がない…のはずだった

結晶無効化空間

入ると開かなくなる入口

この二つのトラップに掛かり、無惨にも、狩られたのである

残念ながら超高レベルの攻略組が半強制的に収集がかかり、集まった

で、只今グランザムの血盟騎士団の本部で会議が繰り広げられている

「…諸君に集まってもらった理由は言うまでも無いだろう。まず、偵察部隊が全滅した。と言うことはボスに対する情報は一つも無いのである。まずは諸君の意見を聞かせてもらいたい」

情報が無いとは嘘だ。ヒースクリフ…もとい、茅場晶彦はSAOの製作者である。知らないことはない筈だ。七十五層…いや、アインクラウド全土において、茅場の知らないものはない

「どうもこうも、数で圧す為に俺達を呼んだんだろう？今さら聞くまでもない」とキリト

キリトは言うまでも無く、セオリーに乗っ取った戦い方を主張する

壁役でボスを固めて、袋叩きにする方法だ

しかし

「駄目よキリト。壁役でもボスの攻撃を防げない可能性があるわ。ここは、クォーターエリアなのよ」

「だよなあ…」

「しかし、私達ユニークスキル持ちだけで勝てはしないだろう」

「待ってくれよ、俺達もいるんだぜ！！」

クラインの主張に風林火山のメンバー、エギルなどが激しく同意する

「ん？逆の発想でユニークスキル持ちに壁役させるとか？」

なるほど、の言う通り、なにもユニークスキルにだけ攻撃させても変わらないか…でも…

「敵の攻撃パターンにも寄るわね…キリトも二刀流は完璧攻撃型だから防ぎきれるか微妙だし」

「いや、あるいはそれも良いかもしれん」

ヒースクリフは否定も肯定もしなかった

会議が終わった

結局はなんの解決もしなかったが、自らの意思はそれぞれ改めて自身の胸に決めただろう

私は最優先で風林火山のメンバーを守る。入ったからには仁義は通さなければならぬ

多分 もだ

キリトはアスナちゃんを守る為に戦うらしい

リア充になりやがって…

そしてエギルは商売の為…と言っていたがもう私達は彼のことは知っているから敢えて言わないでおこう

「結晶無効化空間か…」

ポツリと呟く

つまり転移もできず、回復も大幅に制限される
ポーシヨンだけでは回復に時間がかかりすぎる

「てめえら、俺は一つだけ言っておく」

クラインが風林火山のメンバーに呼び掛ける
全員の表情が引き締まった

「おめえらは来ても来なくても良い。いや、嫌な奴は来るな。だが、
来た奴は命に代えても俺が守ってやる」

メンバーはポカンとなった後、少し微笑をした

片手直剣使いのイクスが前に出る

「行くに決まってるぜクライン。お前だけ美少女と一緒ににはさせね
え」

今度はクラインがポカンとする方だった
その後、涙を少し瞼に浮かべた

「おめえら…まったくよお……しょうがねえ野郎だ……でもよお…
ありがとな…」

次の瞬間クラインは号泣した

さて、護られるのは性に合わないからね
いっちょやるか…!!

と目があった

七十五層のコリニア市のゲート広場では、攻略組がひしめき合っていた

「ん、キリト発見」

めざとく見つけた

「どこだ？」

クラインに指さしで教えた
アスナちゃんと並んでいる

「よっー」

景気良くクラインがキリトの方叩く

エギルも連れて居るので、メンバーはいつもどおりだ

「なんだ…お前らも参加するのか」

「今回はえらい苦戦しそうだって言うから、商売を投げ出して加勢に来たんじゃねえか。この無私無欲の精神を理解できないなあ…」

「無私の精神はよく解った。じゃあお前は戦利品の分配からは除

外していいのな」

「いや、そ、それはだなあ……」

朗らかな笑い声が響き渡ったので、プレイヤーの間に伝染していき、緊張が解れていった

一時ジャスト。ヒースクリフが転移してきた
皆一様に緊張が深まる

ヒースクリフの号令とともに気合いが入るのが見える

回廊結晶を開いて、ボス部屋前に到着した

「ビビんなよ？クライン」

「つたりめえだ！！」

やがて、扉が開く

私は一番乗りで突入した

辺り一面黒い壁に覆われており、比較的広い戦闘フィールドには異様な空気が流れている

これから扉は開かないだろう…ボスが死ぬか、私達が死ぬまで

鎌の二振りを構える

キリトも二刀流の構え

は自然体で爪を装備している

「上よ！」

私とアスナちゃんの声が重なった

百足…

全長十メートルほど

骸骨の体に人間の頭蓋骨みたいで…しかしどこか違って
いる頭
そして目には蒼い焰

《The Skullreaper》 骸骨の刈り手

骨百足は天井を這ったあと、降ってきた

逃げ遅れた三人に、今まで隠れていた右の骨の大鎌が襲う

黄色から赤へ

そしてゼロに

「うそ…だろ!？」

クラインの悲痛な呟きが聞こえる

一撃死

「こんなの…むちゃくちゃだわ」

アスナちゃんの叫び

ヒースクリフは駆けていた

右の鎌に到達するや、受け始める

キリトとアスナちゃんは左の鎌を受け始めた

「私達も行くわよ!!」

ギルドでの攻撃をしながら、左右から振られる攻撃を、私と で受け流していた…風林火山とエギルの猛攻は続く

メンバーのHPを注意域に落とす訳にはいかない…
細心の注意を払った

が

骸骨の骨が飛んでくる…一人が危険域に入った

目の前が真っ白になる

「うわああああああああああ!!!!!!」

骸骨の周りに無数の剣が現れる…

「無限の創造世界！」

剣が突き刺さるすべて、SAOの武器の攻撃力を超越した剣だ…

流石のボスも、剣の雨には勝てなかった…

最後の一撃で、ポリゴンと化し、爆散した

ノシキside

よ、ボス戦直前なうだよ

取り合えず死なないようにかつ風林火山を護りながら戦うよ

「……アインクラッド解放の為に……！」

ヒースクリフの号令だね。目の前の扉が開いた

「いつちよ、殺るかね……！」

アイテムウィンドウ…もとい、ナトランサーからモーニンググローリーを装備する

まあ、グラールの… p s p o 2 i のツインクローだね

知らない方は p s p o 2 のパッケージをご覧くださいあれ

「「上よ!」「」

咲魔とアスナの声が聞こる。上には骨百足がいた…

「ぎ・すきゅれいぱー?ま、いつか」

百足が陣営のど真ん中に落ちてきた

三人が逃げ遅れた

「こつちだ!!」

キリトの声に促され、走り出した

しかし、もう骨百足は右の鎌を振り上げていた…

三人は吹き飛ばされ、宙を舞った

HPバーは黄色の注意域から赤の危険域へ…

ポリゴンとなって爆散エフェクトを発した…

「んなっ!?!一撃死だつてえ!?!」

流石に驚いた…一撃死かあ…キツツイナ…あれ?かの有名なカムハ
ーンもある意味一撃死攻撃をもって無かったっけ?

…ああ、pspoiの話です

漸く呪縛から解き放つ咲魔の音が聞こえた

風林火山の連中はクラインを筆頭に側面から攻撃を仕掛ける

咲魔と私は左右の攻撃を受け流し、クライン達はいつもの陣形でコンビネーションを仕掛ける

防御の最中、チラツと風林火山のメンバーのHPバーを確認した…
クラインがヤバイ…

まったく…無茶しやがる…

「仕方ない!!」

全身の力を込める…咲魔にも、ヒースクリフにも知られていないあのエクストラスキルを発動する

「はああああああ!!」

全身が金色に光りだす

徐々に指が鋭利になる

帽子がとれ、髪が逆立ち、銀色に変化する…

犬歯が剥き出しになり、赤色の眼は、赤より紅くなり、ぼんやりと発光する

「…エクストラスキル、ナノブラスト獣化」

ナノブラストとは、psp2iで、種族ビーストが身体を変化させ、強化する業だ

幾つか、種類があるのだが、ナノブラストが発動するナノブラストは完全オリジナルである

制限時間は無く、攻撃力の底上げ、敏捷は三倍になる

ヒースクリフが驚いたようにこちらを見たが気にしている暇は無い

「クライン！！ギルメンを後ろに下げて！」

クラインは少し呆けたが、直ぐに取り直し、メンバーとエギルを下げた

咲魔は既に《無限の創造世界》を発動させていて気づいてない

「オラアアアアアア！！」

爪のラッシュが骨に食い込む

骨は無惨にも一撃で部位破壊され、四散していった…

骨の大百足は爆散した

七十五層（後書き）

どうでした？戦闘描写が上手くなってたらいんだけど…

夢に描いたあの浮遊城へ（前書き）

早くもアインクラッド編最終話です!!

私はギャグが欲しいのに結局シリアスになる…

ナンテコッタイ!!

では、ゆっくりしてってね!!

夢に描いたあの浮遊城へ

咲魔 side

骨の大白足は爆散した…

残ったものは達成感ではない

私は風林火山のメンバーは全員護ったし、エギルをはじめとする、友人を一人として死なせてはいないが…

創造したあとも続いたプレイヤーの爆散音が脳内に無限ループする

「何人…死んだ？」

キリトが生き残りに聞いたが、返答はない

全員我が身を守るために必至だったのだろう…

キリトはマップを開いて元いたプレイヤーの人数から逆算する

「十四人死んだ…」

辺りにざわめきが走る

十四人とは…あのラフコフ討伐戦に匹敵する死者の数だ…

「シキ、ナノブラスト使えたんだね」

「私も最近気づいたんだよ。スキルには乗ってなかったし、気合

いでやったらなんか出来たし」

ほう、ならその気になれば最初から出来たというわけか

つくづく大神は重要なことを教えてくれないな…

「お…おいサクマ、シキ。なんだよ…今の」

クラインが眼を見開いて問うてくる

「エクストラスキル《創造》」

「エクストラスキル《獣化》」

淡々と述べる

「なんだよ…むちゃくちゃじゃねえか…」

「「ごめん(な)…」」

うつむいてクライン達に謝る…

自分だけこんな待遇があるなんてセコいからね…

みんな公平にデスゲームを死に物狂いでやってるのに私達だけチートだから

ふと、キリトが駆け出した…方向はヒースクリフだ

ヒースクリフはこの戦いにおいても、HPバーは緑だった…

キリトも不信に思っていたのだろう…それが、今回の戦いで確信に

至った…

キリトは突進系の低レベルソードスキルを発動する

ヒースクリフが驚いてキリトを見た頃にはもうキリトの間合いだった

「キリト君…何を…!?」

アスナちゃんは言った後直ぐに現れた表示に眼を奪われた

《不死存在》

目の前に広がるその事実そこにいた全てのプレイヤーが眼を向けた

「おっ…おい…システムの不死って…どういうことだよ…」

クラインが叫ぶ

「システムの不死…!?…って…どういうことですか…団長…?」

副団長として彼の隣に居たアスナちゃんの驚愕

「システムの不死…伝説の正体ね。不死属性をもつのはこのゲームではシステム管理者以外いないはず。そう考えると自ずと答えは見つかるはずよね…キリト?」

「ああ、この世界に来てからずっと思ってたんだ…あいつは今、どこから俺達を観察して世界を調整してるのか…でも、俺は一番単純な事を忘れていたよ…」

キリトはヒースクリフを見上げて言い放つ

「《他人のやつているRPGを傍から眺めるほど詰まらないことはない》。……そうだろう、茅場晶彦」

辺りに少しの静寂が訪れる

「団長…本当なんですか…?」

ヒースクリフはそれすら答えず、新たに口を開いた

「なぜ気づいたか、参考程度に教えて欲しいな」

「最初におかしいと思ったのは例のデュエルの時だ…一瞬だけ世界がぶれて見えたよ」

「やはりか…だが、君以外にも、あの時点で気づいてるイレギュラーは二人居たのだがね…いや、プレイヤーじゃないな…そうだろう? AIの諸君」

今度はキリト達が驚愕する方になった

「あああ、まだ確信してないのに…でも、今はAIだと言っておくのかな?」

「サクマとシキは…AI!??」

「うむ、私も不思議に思っているのだ…何故私が創っても居ないのにAIが存在するのか…いや、AIであるかどうかも分からないのだがね…システムコマンドが効かないとなるとAI以外あり得ない

ことだからね」

「そんなことどうでも良いじゃない？茅場晶彦、私の予想が当たってたら、あなたはアインクラッドの百層の最終ボスでしょ？」

茅場はゆっくり頷いた

「如何にも」

淡々と述べた…そこに、怒りを露にした血盟騎士団の幹部が立ち上がり、何かを叫んだ後、ハルバード斧槍を握りしめ…

「よくも　　！！」

絶叫しながら地を蹴った

だが、茅場はすぐさまウィンドウを操作する…

男は地面に倒れた

麻痺状態…

さらに次々と麻痺状態で倒れていく…

「な…！？私も！？…」

「ちいつ！！」

私達まで麻痺状態になった…確かに麻痺は戦闘でもなる…麻痺まで無効化はされていない…

キリトを残して全員地面に這いつくばる…

「こうなってしまうては致し方ない。予定を早めて私は最上層の《紅玉宮》で君たちの訪れを待つことにするよ…しかし、キリト君、君には私の正体を看破した報酬を与えなくてはな。チャンスをあげよう」

茅場は一度言葉を切った

「君には今この場で私と一対一で戦うチャンス。無論不死属性は解除する。私に勝てばゲームはクリアされ、全プレイヤーはこの世界からログアウトできる…どうかな？」

「一対一？私には創造があるのよ！！」

茅場の周りに無数の剣が召喚される…が…

全て地に落ちた

「やれやれ、君達はもう少し、聞き分けがあると思っていたのだがね…システムコマンド《オブジェクト槍》座標固定、サクマ」

私の腹に深々と槍が突き刺さる…

HPバーは少しずつ、しかし、確実に無くなっていく

「ぐ…は…この…」

アスナちゃんは声を上げる

「だめよ…キリト君、あなたを…排除する気だわ!!」

キリト side

「ふざけるな!!」

奴は自分の世界に一人を閉じ込め、四千人を殺した男なんだぞ！
サクマ達がAIだというのは驚いた…だが、関係ない…あいつは今
苦しんでるんだぞ!!

アスナも…二十二層で俺にすがって泣いたんだぞ…茅場は、世界創
造の快感のために、アスナを泣かせたんだぞ！

「いいだろう…決着をつけよう」

アスナの悲痛な叫びが聞こえたような気がする…

「ごめん…ここで逃げるわけにはいかないんだ…」

俺は歩き出した…エギルやクラインは俺に止めるように叫ぶ

「サクマ、これ飲んどけ」

サクマの口にハイポーションを流しこんだ…これでサクマはこの時
間では死なないだろう

「クソ…キリト…逃げな…さい…よ」

「サクマ、シキ…今までパートナー組んでくれてありがとな…いつ

か、恩は返すぜ」

「キリト！！私は、絶対許さないからな！！…死んだらあの世でまた殺す！！」

シキの叫びが聞こえた… AIなんだからあのも何も無かるうに…

「エギル！！今まで、剣士クラスのサポート、サンキューな。知ってたぜ、お前の儲けのほとんどが、中層クラスのプレイヤーの育成につぎ込まれてきたこと」

巨漢は眼を見開いた

「クライン。……はじまりの街で置いてって…悪かった…後悔してたんだ…」

「てめえ！！キリト！謝ってんじゃねえ！！今謝んなよ！！許さんぞ！！向こうでちゃんと、メシ奢ってからじゃねえと、許さねえからな！！」

俺はクラインに微笑みかけ、右手の親指をつきだす

「茅場晶彦、一つだけ頼みがある…アスナを少しの間自殺しないように計らって欲しい」

「…解った」

後ろからアスナの涙混じりの叫びが聞こえてきた気がする…

俺は背中 of 漆黒と白銀の剣を抜き放つ…

茅場はそれを見るや否や、二人のHPバーを赤のラインまで落とす

「殺す…」

俺は地を蹴った

剣が交錯する

以前茅場と戦った時に見せた人間らしい眼は持つて居なかった…

しかし、俺には勝機がある…

前のデュエルではシステムのオーバーアシストがあったから攻撃が防がれたのだ…ならばまた同じような状況を作れば！！

そして、ゲームの管理者である茅場はソードスキルを知り尽くしている…と言うことは、こちらはソードスキルを使つては負けてしま
う…

俺は本能の赴くまま、剣を振り続けた…

しかし、茅場は見透かしたような眼で全ての攻撃を楯で防ぎ、隙あらば、反撃してくる…

そこで、俺は焦った…この男はオーバーアシストを使う必要はなかったのではないのか？

焦りが不安に変わる

ならば…これでどうだ…！！

「うおおおおー!!」

二刀流上位ソードスキル《ジ・イクリプス》

だが、初めて茅場の表情が今更ながら変わった

口元が歪み、勝利を確信した笑みを作った

ああ、そつだ茅場は俺がシステムに規定された技を使つのを待って
いたんだ…

もはや連続技を止めることはできない…

二十七の連撃は全て止められる

直後、俺の左手に握られた白銀の剣は砕けた

「さらばだ　キリト君」

俺の頭上に長剣が振り下ろされる…

キリト君は…私が守る

「え?」

長剣は振り下ろされることは無かった

振り下ろされた先にいたのはアスナだった

アスナのHPバーは消失し、爆散した

「アスナあああああ!!」

「驚いた、スタンドアロンのRPGみたいじゃないか？あの麻痺から脱出する手立ては無いはずだが…」

もう、茅場の言っていることは頭に入らない…

アスナの細剣を持つ

もうアスナの意識が残っているのはこれしかない

ゆっくりと攻撃する

技と言えない攻撃を茅場は哀れみを持った目で受ける

長剣はキリトの胸を貫いた

このままHPバーが無くなって死ぬのか…

アスナのもとへ…

不意に葛藤を感じる

駄目だ!!こんなシステムに負けるわけにはいかないんだ!!茅場でさえこのシステムの一部なんだ!!アスナを殺したのはこのシステムなんだ!!

見える！！まだ茅場が見える！！

右手のアスナの細剣をつきだす

徐々に崩れていく体は言うことを効かないが、システムに抗えているのは確かだ

茅場は驚愕の表情を見せたが、直ぐに眼を閉じて、それを受け入れた

茅場のHPバーは消失した

後ろから聞こえた声はエギルとクラインとシキだろうか…後ろから爆散した音が聞こえる…サクマも死んだのか…

無機質な音声が流れ出す

ゲームはクリアされました…ゲームはクリアされました…ゲームはクリアされました…ゲームはクリアされました…ゲームはクリアされました…

夢に描いたあの浮遊城へ（後書き）

次はフェアリィダンス編…ではないですよ？

目覚め(前書き)

結構短いですが、日常的な話が始まります!!

では、ゆっくりしていきましょう!!

目覚め

咲魔 side

「で、ここは何処よ…」

見た感じアインクラッドでは無さそうね…なんたって機械…エアコ
ンがある時点で違う

で、何やら最新鋭のベツトみたいな…ジェル状のなんかに横たわっ
てるんだけど…

「ん？頭になんか着いてる…」

ヘッドギアタイプの濃紺色のそれにはローマ字で《ナーブギア》と
書かれていた

あー、大神の奴は大方、アインクラッドその物に転生させたんじゃ
なくて現代に転生させて無理矢理SAOにログインさせたわけか

そう言えば が見当たらない…

横を見ると、同じくナーブギアを被った がいた…とつくに目覚め
ていたらしく、眼を開けてる

「おはよう、」

「もー、咲魔は起きるのが遅いから暇だったんだよー！」

知らんがな…

キリトside

ここは…何処だ…

空気に臭いがする…消毒液の匂い…

病院か…

エアコンがかかってる…今は冬なのか…？

体を起こそうとする

「……っ！！」

力が入らない…

続いて右腕をどうにか上げてみる…

酷く痩せ細っている…こんなんじゃない…剣なんか握れないよ…

ああ、でも…ここは現実世界なんだ…俺は…ゲームをクリアしたのか…

さしたる感慨は湧いてこない…というか、脳が働いてない…

そっだ…彼女は…

「あ………」

鋭い痛みが喉に走る…当たり前だ…二年間も使われてないのだから…

「あ……す……な……」

アスナ。アインクラッドで俺が愛し、妻にした女の子…

茅場はいっていた…ゲームクリアおめでとつ、キリト君アスナ君…

と…ならばアスナも還ってきたはずだ!!

すこしばかり安堵する…

でも…サクマやシキは居ないんだよな…あいつらはAI…あの少女を含めると三人のAI…現実世界で会うことはできないのか…

ふいに、頬に一筋の涙が流れる…

……そこから声が聞こえる…少女の声だ…

何故か俺の病室に向かっていているようだ…

ドアが開く…音が聞こえる

残念ながら力が入らないから首を動かせない

「おはようキリト。残念ながら初顔合わせはこの私、シキでした」
シ……キ？

はあ？

「こら、病人に向かって刺激的なことをしてはだめよ。シキ」

「うう……わ、わりい」

「なん……で……」

AIじゃ、なかったのか！？

「あー、こっちも諸事情があつてね……別にチート使ったわけじゃないんだけど……あ、声渴れてるね。水いるかい？」

頭が混乱してる……諸事情？そんなんで茅場のシステムコマンドを回避できるのか！？

取り合えず水はもらっておいた……

喉は一向に良くなるらない……

「ひつ……だ……ん」

「おk」

サクマはポケットからペンとメモ用紙を出した

《なんでお前らは筋肉とか衰えて無いんだ？》

「スルーの方向で」

明らかに怪しい…

まあ、いいか

《他の皆は？》

「知らん。この病院に居たのは私達とキリトだけよ」

数分間駄弁っていた

そしたら、菊岡とかいう男が大慌てで来た

なんでもSAO事件に関することを捜査していた警視庁の方らしい
真っ先にアスナの居場所を訪ねた。すると、猛スピードで調べて始
めた…

幸いアスナは生きていたが…まだ眼が覚めていないらしい…

直ぐに覚めるだろうと思ったのだが俺は知らなかった…この後大変な
事が起きるとは…

菊岡はサクマとシキが活発に動き回れる事が驚いたらしく訪ねたが、
二人はそれとなく誤魔化していた…

それからいくらか経って家族が迎えにきてくれた…

「お兄ちゃん!!」

扉を開けるや否や、妹の、桐ヶ谷直葉：スグが俺に飛び付いてきた

「あなた達は？」

母さんがサクマとシキに聞いた

「初めまして、宇都宮咲魔です。んで、こつちが宇都宮シキ。コイツとSAOでパーティー組んだりとかしてた輩ですよ」

本名だったのかよ…

「そうですか…？なぜ、あなた達は筋肉の衰えがないんですか？」

「仕様です!!」

…答えになってない…

「そう言えばコイツ喋れないらしいからコイツの名前教えてもらっていいですかね？」

「ああ、そうね。この子は桐ヶ谷和人よ。私は母の翠、この子は妹の直葉よ」

それと、どうしたことが、スグが離れてくれない…まあ、嬉しく無くは無いが、どうしてまあ、こんなになつたんだ？

昔は…俺が悪いんだけど、もう少し距離感があったと思うんだが…

まあ、いいか

《咲魔、シキ。お前らは何処に住んでんだ？取り合えずメアド交換しときたいが、病院だからな》

「ん、あー、住むところ…ねえ…うー。無くは…無いんだけど…お金が…」

お金？なんで住むのにお金が必要なんだ？親がいないとか？まさかな

《親とか居ないのか？家出？》

「う。あー、まあね…諸事情で…家出じゃないけど…住むところ無し…」

なんてこつたい、孤児だなんて…

「なら、家に居候する？」

母さん…いまなんて言った？ちょっとまってよ。別に悪くはないが…

「本当ですか！？有り難うございます！！お金は自分で稼げますので！」

咲魔はノリノリだな。まあ、良いけど男女比の問題が…いや、父さんが帰ってきたらまあいいか

ん？お金を稼ぐって、その年齢でバイトか？

「じゃあ決まりね」

決まってしまった…相変わらずスグは退いてくれない…

目覚め(後書き)

咲魔とシキは事ある毎に居候してる希ガス…

居候の日々(前書き)

何故かむちゃくちゃ長くなりすぎました…本編でもないのに…

あ、補足として、ノシキのブーストとしてのケモノミミは魔術で誤魔化してます

では、ゆっくりしてってね…!

居候の日々

咲魔 side

「ふああああ…ん」

んー、あ、キリト…和人家か…

そっぴや居候だったね…

取り合えず直葉ちゃんの部屋に泊めてもらってるんだっけ…

「あ、ごめんなさい。起きた？」

直葉ちゃんが起きたときにちょうど起きたらしい…

「んにゃ、別に大丈夫だけど…今何時？」

「6時…」

「えらく早いね、学校？」

「私は中二で自由登校なの。ちょっとコレの朝練でもしよつかない？」

と言つて直葉ちゃんは壁に立て掛けてある竹刀を持った

「へえ、剣道やってるんだ。私もちょっとかじった程度なら出来るわよ？」

「本当！？なら今日のお昼くらい道場で試合しよう」

「ん、おっけ」

「やったあ！！」

ぴよこんと飛び上がり、外に出て行った…

「ふああああ…もう少し寝ようかな…」

また、浅い眠りに落ちた…

一時間程寝ると、直葉ちゃんが帰ってきたから起きた

「えっとね、咲魔とシキは私の部屋にしばらく泊まる訳だけど…」

「いきなりどうした？」

隅っこからゴソゴソと何やら取り出す…

私の前に出したそれは、ヘッドギアみたいな…

「ナーヴギア？」

「ううん、これはアミユスフィアって言うんだよ。ナーヴギアと違って安全なんだって」

「へえ、それで直葉ちゃんも仮想世界に？」

「うん、私はお兄ちゃん見たいにネットとか、あんまり詳しく無いんだけど、お兄ちゃん達の見ている世界ってどんなのだろうって思ったの」

「おおよそ察しはつくよ。和人には言うなでしょ？理由はいつか自分で言うから」

「うん、そつだよ。じゃあ、宜しくね」

「宜しく、直葉ちゃん」

「私のことはスグでいいよ。皆そう呼んでるし」

「おっけ」

ほえ、SAO以外にもVRMMOって有ったんだ…

「んで、そのVRMMOのタイトルの名前は？」

パッケージを取り出した

《Alfheim online》

「アルブ Heim オンラインだよ。由来は妖精の国なんだって」

「妖精…ほう、興味が有るわね。私も買おうかしら」

「ほんと！？買うなら一緒にやるっね！！」

妖精ねえ…なんか、ほのぼの系ね。殺伐としてる世界が私にはお

似合いだわ

「じゃあ、朝御飯できたから食べよ」

おおつ、朝御飯まで作ってくれたのか
なんか申し訳ない…

「あ、うん。ありがとう」

取り合えずシキを起こさないと…

「あ、私シキ起こすから先行ってて」

「うん、私もお兄ちゃん起こさなきゃ」

……スグが出て行ったのを確認した

「おい、いつまで狸寝入りしてるのよシキ」

「……バレた？」

「まったく…しょうがないわね。ほら、朝御飯食べに行くわよ」

とととととてーっと階段を降りる

丁度和人も降りてきて席に付いてる状態だった

翠さんはお仕事で朝早くから出掛けたらしいから三人だけの食卓

「んー、和人おはよ」

「おはよう咲魔。…なんか本名で呼ばれたらむずかゆいな…シキは？」

「ん？着替えてる途中だから先食べてて良いって」

ちなみに、ドレスは派手だし、街中歩くのはどうかと思ったから白いワンピースを着用してる…てかドレス着たらSAOの時と一緒に、疑われるかもしれないし…（キリトに）

「そう言えばお兄ちゃん、SAOではどんな名前を名乗ってたの？」

「んー、別に？変わった名前じゃないよ。まあ、置いていて朝飯食べようぜ。俺腹減ったあ」

「そだね」

上手いこと誤魔化しやがって…

今日の朝食は白米に味噌汁にハムエッグ…和洋折衷ね…

「あ、もう食べてる？」

シキが階段から降りてきた

「いや、今食べようとしたところだぜ」

「お、そっか」

シキがぴよこんと席についた

「「「「いただきます」「」「」

まずはハムエッグ…

おお、いい感じに半熟…これはライスと一緒に食べたなら合うわね

味噌汁…実に…何年ぶりだろうか…SAOに来る前はずっとヨーロツパに居たからね…もちろん英霊として

日本食なんて本当久し振り

では、

ズズズズ…

「あ、味噌汁おいしい。スグが作ったの？」

「うん、そうだよ よかったあ喜んでもらえて」

ホント美味しいわね

私は料理スキル無いし、まあ、スツゴい昔はしたこと有るけど…それから、全然だもんね

「そう言えば、咲魔は向こうで料理できないとか言ってたもんね」

キリトがニヤニヤ見てくる

やめい

確かに料理は出来ない、が、私には創造で賄えるから…

おい、今創造の乱用とか言っただ奴前に出なさい

「うるさいわね…別に良いじゃない。このご時世、スーパーとかで惣菜買えば良いんだから」

「ん、そう言えば咲魔はお金を稼ぐって言ってたよな」

あー、なんかそんなこと言ってたわね…取り合えず宝くじでも買おうかな？当たるでしょ…たぶん…

んー、別に魔術協会 何故か有った。のバイトで死者とか狩っても良いんだけど…

「コンビニとかでバイトでもするのか？」

なっ！？その発想は無かった…

「んー、そんなとこだよ…多分。なんか、時給が物凄く高いバイト見つけたんだ」

「おい、それ騙されてないか？今どきそんなバイトないよ…」

「大丈夫よ、何かあった時の為に木刀一本もって行けば」

「おいおい、その発想はないよ…SAOじゃあるまいし」

あ、そっか

「ま、なんとかなるんじゃない？バイトもたまにしか行かないと思うし」

たまに行くのが海外なのはご愛敬

「「「「「ちそうさま」「」「」

「あー、和人、アスナは眼が覚めたって？」

「ああ…それが、全然…」

んー、死んだ訳じゃないならSAOからはログアウトされるはずなんだけど…

「アスナさん？それって誰？」

「「和人のお嫁さん」「」

「「なっ！？」」

和人は顔を真っ赤に染めた…

「ちよっ…お前なあ…／／」

「なんだよ。ホントの事言っただけじゃんかよ」

「だからってお前…ストレート過ぎるだろう…」

「お兄ちゃん、結婚…したんだ」

ずっと空気だったスグが話に参加してきた…これはカオスになるわね

「ゲ…ゲームのなかだよ…現実ではまだ……」

「なんだよ。水くさいなあ。あんなにラブラブだったじゃんかよ」

「…う…うむ。まあな」

開き直った…

昼…

昼食を朝食と同じノリで摂った後、和人とシキはアスナちゃんのお見舞いに行った

待ってる間、約束した通り、スグと試合をすることになった…

剣道できるってのは微妙な所で、剣術は出来るけど剣道のルールはまったくもって知らない…まあ、面を叩いたら一本だし、思いつきりじゃなくて、頭で止めるようにしないといけないのは知ってる…てか思いつきりやったらスグ死んじやうし

で、今思った

「なんで家の中に道場があるのよ…」

まるで衛宮邸ね…あそこは土郎君が住んでるだけだったからもっと
贅沢だけど…

「お祖父ちゃんがね、剣道一筋の人だったの」

「あー、なんか言ってたなそう言えば…まさか道場まであるとはね
え…」

むー、しかしまあ…立派なもんだね

「咲魔、これ」

「ん、さんきゅ」

防具…

防具の装備に悪戦苦闘…防具とつけたことナッシング
途中からスグに手伝ってもらった

………

防具の装備完了

いつもは剣を使ってる訳じゃないから構え方は知らん

取り合えず、セイバーの構え方を真似てみる

うむ、中段の構え…

ま、いつか

「あ、そう言えばスグってどんくらい強い？」

「中体連全国大会ベスト8だよ」

「うっ…きつついね」

まさか…そんなに強いとは…

道場の中央に向き合って、礼をする…

さっきみたいに中段に構えてみる

スグも中段

「んじゃ、こっちはいいよ…っていつても、構えだけしか様になつてないんだけどね」

言った瞬間、スグが迫ってくる

「うおっ！？」

ヤバい…速すぎるでしょ…土郎君涙目なんじゃ…

竹刀で防ぎ、少し距離を…とれねー

めっちゃ打ち込まれてるんだけど

「はあっ！いやあっ！」

「うわっ！？ちよっ！」

無理矢理横にステップしたら、頭が冷えてきた

再度スグが打ち込んで来るが、ひょいひょいと避ける

「りゃあっ！！！」

横薙ぎにカウンターっぽく薙ぎ払ったが避けられる

ってかマトリックスみたいね…

お返しとばかりに連続技…小手面とかいうらしい…を打ってきた

両手で持っていた竹刀を右手で逆手に持ち換え、止める

「なっ！？」

うっわあ…これ剣道っていうか何て言うか…

逆手のまま打ち込みをパ…ゴホン、弾いて、隙を見つけて順手に持ち変える

上段に振りかぶって

「どおおおおお!!!」

ん、見切られてた

ギリギリのラインで避けられた

更に鏢迫り合いに持ち込まれた…

スグの足腰に力が入る

が、咲魔の体は一步も動かない

力比べは不利と悟り、距離をとられた

それに、隙が大きいが、斬りつけた

スグはチャンスとみたか、かわして、面に打ち込む

「めええええん!!!」

強引に攻撃をキャンセルして、隙に打ち込ませる

すれすれでかわし、いつの間にか左手に持った竹刀は、上段に振りかぶっていた

「面!!!」

それすらもかわされた

もうやだ

しかしまあ…

「ヤツバ」

「めえええん!!」

一本取られた

「ふぎやつ!!」

頭に衝撃が走り、情けない声を上げた

「あ!!ごめんね!私、つい本気で打ち込んだじゃった!!」

「いやいや、それにしても強いわね」

「まあ、一応全中ベスト8だし…でも、全中の最後の試合より激しかったよ?咲魔はどこで剣道習ったの?」

「あー、いや、自己流?習ってないからルールわかんないし…」

スグがぽかんと口を空ける

「自己……流!?!」

次いでorzになる

あー、うん、なんかごめん

それからキリトラが帰宅してきた

「で、アスナちゃんは？」

「……それが……まだなんだ」

「え？遅すぎるよね……」

一日経って起きないし、……やな予感がする……

「咲魔……ちよつと来て」

「ん。」

和人とスグを足止めして、庭に出た

追い掛けて来れないように屋根によじ登り、防音結界を張る

「で、解析したんでしょ？」

「うん。単刀直入に言えば、アスナはまだゲームの中に居る」

「ふむ。で、SAOの中？」

「詳しくは解らないけどね。SAOの中……によく似たソフトだと思
う……私見ではね」

「うむう……SAOは完全に崩壊したはずなのにSAOの中に居るのは矛盾してるからね……」

むー、どうするかな…

「あ、本格的な術式を組んだ上で、SAOのソフトを入れたナーヴギアに解析を掛けるとか？勿論無理矢理オンラインにした上で」

「んー、まあ試してみる価値はあるわね…確か和人はナーヴギアを持って帰ってたわね。あれを使おう」

「おっけ。なら今日の夜に防音結界張りながら和人の部屋でね」

屋根から降りて防音結界を解除して、部屋に戻る

「何してきたんだよ…」

「いや、ちょっとその自販機に…」

ポケットからコーラを召喚する

「お前なあ…」

「取り合えず結論は多分SAOに閉じ込められてるって事になったから。まあ、そこら辺詳しい奴に聞いたら良いわ」

「なんだ、考えてくれたのか。んじゃ、エギルにでも会ってみるか」

「あれ？あいつのメアドもってるの？」

和人は「ああ」と頷いて、付け足した

「菊岡サンから教えてもらった」

警視庁エ…

菊岡エ…

「じゃあ、和人はエギルとコンタクト取って。私達は私達で動くから」

「ああ、さんきゅな」

和人は部屋に戻っていった

スグは話に着いていけてなかったから、途中から部屋に戻った

私達も部屋に戻る

スグはアミュスフィアを装備してアルブ Heim オンラインに接続してる…

あれ？

「シキ、アルブ Heim オンラインってVRMMOよね？」

「ああ、そうだったね」

「VRMMORPGは今出てるジャンルはSAOとALLOアルブ Heim オンラインよね？」

「うん…あっ！！そうか！」

シキも気づいたらしい…考えてみると、あそこまで精密なVRMMORPGを開発出来るのは、茅場晶彦だけ…和人が言ってたが、S A Oのちよつとしたデータをレクトという会社が多額の金を支払って買ったらしい…

そして、アルブヘイムオンラインの開発元は…

「「ビンゴー!!」」

やはりレクト!!

ならば、一々和人の部屋に入って解析しなくても、今スグが入ってるから簡単な術式で解析できる!!

「防音結界発動!!術式準備…3…2…1…解析発動!!」

この際、スグがログアウトしたら、強制的に術式が解除され、リバウンドとして強烈な頭痛がするけど気にしない事にする

「咲魔!アスナ居るよ!!」

よし…解析を深くまで

……え?

「咲魔…これ、入るのにGM権限が必要みたいだね…」

術式を終了する

「まあ、アスナちゃんが居ることだけは確かね…まあ、その情報だけでも有り難いわ。さ、今日はお仕舞いにしよう」

防音結界も解除する

取り合えず和人には説明できない…魔術使ったからね
和人の事だから後々気づくでしょう

夕食は…和人はネット、スグはALO、だからバラバラに食べた…

翠さんが帰ってきたから私達は三人だったケドね

「ねえ、咲魔ちゃん」

「なんですか？翠さん」

「和人の事…ちょっと聞いても良い？」

「良いですよ。っと、その前に、翠さんはゲームとかします？とくにRPG」

「私はバリバリのゲームマニアなのよ 小学校一年生くらいからもうMMORPGの世界に入ってたから」

うっわ…マジでバリバリだ…

「まず、一番初めのプレイヤータウンで和人と会ったんです。アイツ、テストからのベテランで、ハナツからソロで行こうとしてたんですよデスゲームに」

クスクスと翠さんは笑う

まあ、ソロでデスゲームクリアなんて無理な話で、やるうとする阿呆は和人くらいなもんだからね…

「まあ、アイツに目をつけて、コンビに誘ったんです。でもアイツときたら「足手まといになられたくない」とか言って断りやがったんですよ。笑っちゃいますよねホント」

「ホント…馬鹿な子ねえ…誰に似たのかしら」

「そこでムカついた私は実力を証明して、パーティーを組んだんですよ…途中からソロになったんですけどね。それからというもの、やたら強いボスを和人と…私達と…あと7人位のギルドと…アイツの彼女と馬鹿やってぶっ倒したりとか、ラスボスなんか、アイツが一人で倒したんすよ？相討ちで…私が見る限り最強のソロの剣士でした…ああ、そうだアイツいつも革装備でしたよ金属製じゃなくて…理由は動きにくいかららしいです…しかも片手剣使いなのに盾を持ってないんすよ」……………

長々と続くSAOの思出話に翠さんは聞き入っていた

シキも頷きながら聞いていた…

和人とは馬鹿な事しかやってない…

ま、いいか

夕食も終わり、その日は軽くシャワーを浴びて、寝た…お金は早いと稼いでALLOを買わなくちゃね

居候の日々（後書き）

謝ります

剣道愛好家の皆さま

本当に御免なさい！！

剣道ホントに知らないのです…あ、でも作者の心は発泡スチロール製
なので誹謗、中傷はらめえですよ？

エギルと再会（前書き）

繋ぎの話なのでなにかと短いです

エギルと再会

咲魔side

日曜の朝

朝食を囲んでいるのは、私達居候と、桐ヶ谷兄弟である

因みに桐ヶ谷母の翠さんは昨日の深夜帰ってきたばかりだから疲れて寝ている
多分昼まで起きない

「咲魔にシキ、今日エギルんとこ行く予定なんだけど、ついてくる？」

和人は朝食を食べながら話しかけてくる

「ん、いいよ。バイトも入ってないし」

つと、バイトは結局、魔術協会の死徒狩りなど、異端者の排除をすることになった

金は一回につき三十万

私は金銭感覚がゼロだからなんとも言えないけどね
取り合えずアミュスフィアとALOを買う金はあるけど、まだ買っていない

買おうとしたらけっこう売り切れてて、泣きたくなる…
アミュスフィアって発売されて一年は経ってるのにさ…

「お兄ちゃん、エギルって誰？SAOの中の友達？」

「ああ、大体そんな感じかな。取り合えずアスナの事を言って、原因の究明に協力してもらおうよ。強制的に」

強制的なんだ…

エギルなら仕方ない

朝食を食べ終え、寝間着を着替えるために、二回に上がる

今日は黒のTシャツにジーパンにした

ふむう、今日はいつもと変えてツインテールにしてみようかな…

黒いシュシュでツインテールにしてみた…今日は真つ黒だ

ポーチに、自動修復機能（大神の神力）搭載の白いケータイ（おサイフケータイ機能も有るよ）と、アミュスフィアが発売されてからめっきり売れなくなったPSPにソフトは太鼓のアレなんかあったときのための小刀

小刀さえ有れば大抵の敵は殺れる！！

ん？今私おかしいこと言った？

自転車で三人で最寄りの駅まで走る

タイヤは強化の魔術でパンク知らずだし、椅子の下の小道具入れに

はハンドガンが一丁：鍵は私の魔力だから警察対策もバツチリ
勝つる！！

駅に着いた

「切符買ったぜ」

「さんきゅ。はー、電車つて久々だあ…」

まあ、何千年は乗ってないしね…乗るより走った方が速いし

電車に人はあまり乗ってなかった

幸い、通勤、通学ラッシュは避けれたらしい

椅子に座るや否や、ポーチからPSPを出して、太鼓のアレをやり
だした

もちろん難易度は鬼

今更周りの視線なんか気にしないから電車内でカチャカチャ鳴らす

もちろんヘッドフォンはしてるよ？公共の乗り物だからね

シキの服装はpsppoiのコスで、ストーリーアジャケット黒と、
ゴジゴツジショートパンツ黒、プリティアショートブーツ赤

和人は…説明めんどくさいや。取り合えず全身黒。黒ずくめ（ブラ
ッキー）

「あ、どうしよう」

太鼓のアレも飽きてきたので、止めようとしたら気づいた

「私とシキはおもいつきしAIって思われてんじゃん…説明めんどくさいな」

「あ……ブラッキー先生、説明宜しく」

「ブラッキー先生って俺かよ…今日はお前らも黒いじゃんか……」

四十分程で駅に到着

台東区御徒町の御徒町駅から出て、10分くらいの道のりで、ごみ
ごみとした裏通りにある、《Dicey Cafe》ダイシー・カフェ
そこがエギルの経営してる店だと、菊岡sに聞いた…ちょっと脅した

総務省エ

カランとベルが鳴り、扉が開かれる

客は居ないようだ

「いらっしやい！……席はこちらになります…へ？」

「よう、エギル。一ヶ月半ぶり」

「おめえ…キリト!？」

「俺だけじゃないぜ」

和人の後ろから私達がでてくる

「不景気な店ねえ。儲かってんの？」

「おひさ〜エギルう」

「さ…サクマにシキまで…おい、AIじゃなかったのか!？」

「現実にいるんだからAIなわけないじゃない。てか…エギルの筋肉の衰えが解らぬ…」

口をパクパクさせて困惑するエギルを三人で一頻り笑った

「ふう、立ち話もなんだし、座れよ。どうせ客なんか夜にしか来ねえからよ」

「おう、俺はオレンジジュースな」

「私もそれで」

「マスター、バーボンをロックで」

「あいよ!!…ってSAOじゃねえんだからシキも酒は未成年だからオレンジジュース持つてくるぜ」

エギルが店の奥からオレンジジュースをグラスに入れて持つてくる

「ツチ…100%じゃない」

「いちいち文句言つな…それにおめえら、要件が有って来たんじゃ

ねえのか？よ？キリト」

少しの沈黙

和人は少し深呼吸をして、真面目な表情に戻し、口を開いた

「ああ…アスナが、目覚めないんだ…」

「……何？」

エギルは眉をピクリと動かした

「まさかな…茅場の野郎がミスるとは考えられねえ…SAOに残ってるのは有り得ねえな」

「ああ…俺とアスナは…アインクラッドの崩壊を見たんだ。茅場から、ゲームクリアおめでとぅって……エギル…俺はどうしたら……」

さすがのようにエギルを見上げる和人

「ごめんね…私は知ってる…でも最低限魔術は秘匿しないといけないから説明できないんだ…」

「…わかった。できる限り協力してやる…アスナちゃんの為にもな」

「ありがとな…エギル」

「……アンドリユー・ギルバート・ミルズ…俺の本名だ」

エギルは少し微笑み、キレのいい発音で名前を言った

「外人さん？」

「人種的にはアフリカン・アメリカンなんだが、親が江戸っ子なんだよ。ほれ、おめえらも本名あかせよ」

「俺は桐ヶ谷和人。改めて宜しくな。ええつと…」

「「アンドリユー・ギルバート・ミルズな」」

さらさらつと英語の発音で訂正する

「宇都宮咲魔よ。宜しく」

「宇都宮シキだよ。宜しくな、アンドリユー以下略」

「俺はエギルでいいぜ…つと、話を戻すぜ。まず、おめえらの意見を聞きたい」

和人が少しオレンジジュースで喉を潤して、口を開いた

「俺はSAO以外のSAOに類似したVRMMOに居ると思う…アインクラッドは崩壊をしたからな。すべてのデータが消されてるはずだ…しかし情報が…」

「うむう…そうか。ならこっちはこっちで調べるからおめえらの連絡先を教えてください」

エギルにメアドと住所を教える
住所を見るやエギルは顔を上げた

「おめえら、同居か？」

「咲魔とシキは居候してる…」

ほほう…とエギルは頷いてニヤニヤと和人を見た

「な…なんだよ………」

「せいぜいアスナちゃんを助けるこつたいな」

かっかつかと笑った

和人は意味が解らない風でコテンと首を横に倒して、頭からハテナマークをだしている

「じゃあなエギル、また来るぜ」

「おう！おめえらならいつでも歓迎するぜ！バーボンは飲ませんがな」

エギルの店をあとにした

エギルと再会（後書き）

次はいよいよ原作フェアリィダンスに入る予定です

ALO(前書き)

取り合えずセッティングの話です

A L O

咲魔 side

「アスナちゃん……」

居場所はわかっている。でも行動ができない

歯痒いよ…ホント…

助けたいのにシステムの壁が阻む…

魔術使えって？冗談じゃない…魔術は一般人の前で目立つちゃだめ…
てか、そんなことしたら大神の介入が入るね確実に

え？なんで確信してるかって？それはメールが来たからよ大神から

「クソツ!!」

小さく壁を殴る…

まあ、アスナちゃんなら私に助けられるよか和人に助けられる方が
嬉しいんだろうな

だんだんと焦らしてきた

「咲魔、帰ろ？」

「……うん」

ゆうに一時間アスナちゃんの所に居た…

不意に自動ドアが開いた

入ってきたのは男性

パツと見好青年だけどその瞳には欲深い色が滲み出ている

後ろにはこの前会ったアスナちゃん…明日奈ちゃんの父親である結城彰三氏だ

「いやあ、いつもいつも済まないね、宇都宮君。明日奈も喜ぶよ…」

「私達に出来るのはこれくらいの事ですから…それに彰三さんもお忙しいのに…それと、貴方は誰？」

胡散臭げに睨みをきかせる

「初めまして、宇都宮咲魔さんと宇都宮シキさん。結城氏から話は伺っております。私の名前は須郷伸之レクトプログラムの社員です」

自己紹介が終わった後、彰三氏がハツとして時計をみる

「済まないね、用事が有るから失礼する。君たちはゆっくりしていただきます」

そう言って出ていった

すると、次第に須郷伸之の顔が、いかにも愉快そうにニヤニヤし始めた

「明日奈はね、僕と結婚するんだ」

その言葉は全身の鳥肌を立たせ、私を身震いさせるのに十分過ぎるほど嫌悪感を催すものだった

歯がガチガチなるのを懸命に抑えて言葉を発する

「明日奈ちゃんは……望んでいるの？」

「望むとか望まないとかは二の次さ。確かに意思確認が出来ないから法的には入籍できないがね、書類上僕は結城家の養子になるんだ…実を言つとこの娘は僕の事を嫌っているんだよ」

須郷の指がアスナちゃんの首元を這いずりまわる

見ているだけで嫌悪感を催すそれにシキは見えていられないみたいで顔を背けている

「だから、眠ってもらっていた方が都合が良いんだ」

須郷を押し退けて明日奈ちゃんを庇うように立ちはだかる

「明日奈を利用する気！？そんな許されない！！」

ドスの利いた声でシキが須郷に吠える

「利用する？違うね。権利が有るんだよ僕には。SAOを開発した《アーガス》したがね、レクトの方にサーバーの維持が委託されたんだ」

「……知ってる」

須郷はヒヒツと笑い、続けた

「僕の部署だよ」

体が強ばるのを感じた

つまり、こういう事なのだ

アスナちゃんは、須郷に囚われている

「式には君らも誘ってあげるよ子猫ちゃん」

須郷は病室を後にした

痛切に思った

私の創造世界で小間切れにしたい…と

桐ヶ谷家には、新しい部屋が二つ出来ていた

私が稼いで翠さんに頼んだら笑顔で了承してくれたのだ

家についても何も考えられず、部屋に入るなり鍵を閉めた

服を脱ぎ捨て、下着のままベットに入った
知らず知らず涙が溢れてくる

私の中のバーサーカーとしての強さは人を殺す為のもの…でもこの
世界では殺せないのだ…

戦争でも紛争でも、ましてやデスゲームでもない
私がここで須郷伸之という狂人を殺すと、殺人罪の前に大神からの
制裁が下る

その強さを失うと自分は何も出来ないのだ…

布団に踞って泣いていると、いつの間にか寝てしまっていた

起きたのはスグからの着信音が鳴ったからだだった

『咲魔、晩御飯ができたよ。降りてきて〜』

『うん、わかった』

精一杯の元気な声を出して答えると、脱ぎ捨てていた服を着直し、
髪を整えて行った

食卓に和人の姿は無かった
寝ていると推測して食事を始めた

「なにか…あつたの？」

スグの言葉に私とシキはドキッするが、直ぐに落ち着く

「いつ…いや、…別に？」

落ち着けてなかった

スグはいぶかしむ様子だったが、これ以上の追求はしないようだった
手短に食事を終わらせ、風呂など済ませた後、和人の部屋に向かった
中は真っ暗だった

そして、今は冬なので、寒いがエアコンを普通つけるのを考えたら
不自然なくらいの冷気が漂ってきた

「和人……」

「悪いな、今は一人にさせてくれないか？」

無視してエアコンの暖房と部屋の電気をつける

無言で隣に座った

「はあ、行動を起こさない自分が馬鹿みたいね…私は行動を起こす
わよ。でも、結局はあなた次第ね」

そのまま出ていくと、スグと鉢合わせた

「お兄ちゃんは？」

「慰めてやんな」

それだけ言っただけで部屋に戻った

早起きをした…

珍しくスグに起こされなかった

だからといってどうすることもなく、リビングでテレビを観る事に
した

階段から降りてきたのはスグではなく、和人だった

「おはよう和人。たつぷりと慰めてもらった？」

「うっ…あ…ああ……済まないな」

「良いってことよ」

珍しく朝食を振る舞った

別に料理ができない訳じゃない！断じて

スグも和人も喜んでくれて普通に嬉しかった

朝食はいつもどりの他愛のない話を盛り上げて、終わった

今日は朝イチに開店間近の電気屋に寄って、アミューシアと、アルブ Heim オンラインを購入するつもりだ

まあ、知ってるのはタイトルと、RPGということだけであって、予備知識は皆無だけど…

取り合えずレベル制MMORPGでないことを祈ろう…

レベル制は新参にとっては少々キツイからね…

今は午前8時で、電気屋の開店が午前10時だから…それまでは
先ず家に居よう…

なんともなく、リビングに居た私とシキの所に和人が血相変えて来
たのは、午前9時

「咲魔、シキ！！来てくれ！」

言うなり階段を駆け上がる和人
走って着いていくと、和人のデスクトップパソコンの画面には、E
メールのページが開かれている
送信者はエギル

題名は《Look at this》

本文は無く、添付ファイルが一つ…

何らかの写真を限界まで引き延ばしたような写真…

大木に吊るされた黄金の鳥籠の中に人が…

「これって…アスナ？」

シキが和人に訊ねた

「取り合えずエギルん所に行くぞ！！」

「うっし。やっと足取りが掴めてきたな和人！」

「わからないさ…」

ダッシュで階段を駆け降りて、家をでた

あ…私のアミュスフィア……

「おう、いらっしゃ」あの写真は何だ!？」キリトか…立ち話もな
んだ、座れよ」

烏龍茶を四人分取り出して、喉を潤した後、話し出す

「これの事だ」

ゲームソフトを取り出す

この前スグに見せてもらったタイトル《Alfheim Online》

「コレは?」

「俺たちが向こう側に居る間発売されたナーヴギアの後継機。《ア
ミュスフィア》だ」

複雑な心境なのか、和人は顔をしかませた

「で、このパッケージはアルプ Heim・オンライン…妖精の国だぜ
…かなりハードだがな」

「ハード?どついう意味?」

少なからず興味を引かれて問うた

エギルはニヤリとして、答える

「どスキル制。プレイヤースキル重視。PK推奨。いわゆる《レベル》が存在しないらしいな。どうやら魔法もありで、動きや精度もSAOに迫るスペックらしいぜ」

ある単語にシキの耳がピクツと動いた

「PK推奨って？」

「プレイヤーはキャラメイクで多種多様な妖精の種族を選ぶんだが、違う種族間ならキル有り。更に、金なんか幾らかドロップするらしいぜ」

やっべ…ニヤニヤが止まらん

プレイヤースキル重視ってことはSAOの攻略組の独壇場じゃん
少なくとも戦闘を知ってる人とか有利だし

あ、そっか。スグは剣道強いから有利よね

「で、話は戻すがあの写真は何だ？」

「このゲームのスクリーンショットなんだが…」

烏龍茶を口に含み、続ける

「この樹の天辺に辿り着くのがプレイヤーの当分の目標らしいぜ」

「ナルホドね」

「それとだな、妖精には羽根があるだろう？フライトエンジンが入ってて飛べるらしいんだ。それで立体的な戦闘ができる」

「飛ぶって、コツはあんのか？」

「ああ、だが、相当難しいらしいぜ。しかも、滞空時間があるらしく、樹：世界樹っていうらしい…の頂上には飛んで行けないらしい」

むう…滞空時間ね

リアルで飛んだことある身としては飛び方は問題ないわね…

…大体解った。ハードを買わないとな…」

「ナーヴギアで動くぜ。アミュスフィアはナーヴギアのセキュリテイ強化版に過ぎないからな…もつとも、被る勇気があるならな」

「もう何度も被ってるさ」

「私ら棄てたからな。バイトで金も貯まったし、アミュスフィアとソフト買うよ。咲魔もそのつもりだろ？」

「ええ。勿論よ」

「なら、ソフトを持ってけ…ま、お前らならアスナさんを救えると信じてるぜ」

「…死んでもいいゲームなんて又ルすぎる！」「」

情報を提供してくれたエギルに礼を言い、いつかここでオフ会をすることを誓い、後にした

和人は家に、私達は電気屋に

家に帰った面々は、ろくに取説も見ずにナーヴギア、もしくはアミユスフィアを個々の部屋で被った

「『リンク・スタート』」

視界がブラックアウトする

続いて設定画面

若い女性の声の説明を軽くスルーして種族を決める

…どうせなら、シキと一緒に……

ケットシーを選んだ

ケットシーとは、猫に似た耳と尻尾が特長の妖精

でキャラクターネームは…

《ALS》

適当に決めた…本名じゃ普通にスグにバレるでしょ…因みに読み方はアルス

凡な名前

最後のOKを押した瞬間浮遊感を感じた

ん？加速してね？

「って…きゃあああああ！！」

一人で悲鳴を上げていた

A L O (後書き)

次回から本格的に始まりますよ!!

さて、目指すは世界樹なんだ（前書き）

ALOに入ります!!

さて、目指すは世界樹なんだ

咲魔side

ヒュウウウウウン

スタッ

スタッ

ズゴオオオ

「いでえー!」

「おー…いきなりバツタリだね…和…キリトとサクマでおk?」

「ええ、キャラクターネームは《ALS》。種族はケットシーね」

「キリトだよ…ってて。種族はスプリガン」

「シキこと《TAU》だよ。種族はケットシーね」

ですか

んで外見…まあ、自分のは見れないな

キリトはツンツンしてる髪の毛と浅黒い肌が特徴的かな。顔はガキっぽいけど…悪くはないわね

因みに羽根は昆虫みたいなの

は獣耳は勿論猫耳

髪はダークブラウンのストレートヘアで、腰まで伸びてる

身長は…135くらいかな？

小さいわね…

服装…は、キリトは真っ黒のコートに中のシャツも黒…ブラッキ―

ーム
はカッターシャツにミニスカ。誰が考えたんだよ…このコスチュ

因みにリボンじゃなくてネクタイ

私は…

「なんで服装がSAOと変わらないんだろ…」

白黒ドレスでした

ん？SAOと変わらない？

ステータス確認…

oh…

「キリト、ステータス見てみ」

「ステータス？…なっ！？」

この数字の羅列は間違いなくSAOで私が育てたサクマだね…スキルもエクストラスキルは消えてるけど、戦闘時回復、体術etc…

「ちょっと待て!!それなら!」

キリトはいきなりアイテムウィンドウを開く
そこには文字化けしたアイテム群が大量にあった
必死の形相で何かを詮索しているようだ

「あつた…あつたぞ!!」

何かの結晶を取りだし、震える指でクリックする

瞬間、結晶は光だし、ヒトの形を象っていく

そこには、幼い少女の姿があつた

「ユイ、俺だ。わかるか?」

若干興奮気味のキリトの問いかけに、ユイと呼ばれた少女はにっこりと笑い、返した

「はい。わかります、パパ」

「…パパあ!?!」

なん…だと!?!?

「ああ、説明してなかったっけ?この子はユイ。AI(人工知能)だよ。…お前らと違って本物のな。アスナと住んでた二十二層で出逢ったんだ」

おお、よく見ると可愛いじゃないか…ロリータに黒髪長髪で白のワンピースとはつくづく私のドストライクポイントについてくるわね。お持ち帰りレヴェルで

「ふ…ふうん？まあ、そういうことにしといてあげるわ。よろしくねユイちゃん。私はアルスよ」

「私はタウだよ…よろしくっ…！」

ユイはニツコリと笑う

「パパとママのお友達ですね？ええっと…サクマさんとシキさんですわね」

あれ？

「ユイ、実はここはSAOじゃないんだ」

「え！？そうなんですか？プログラムがとても類似していたので解らなかつたです。今調べますわね」

類似してるか…そりゃそうよねえ。レクトがSAOのデータをコピーして創ったんだからね

「ああ、ユイ。俺らのステータスがSAOと全く一緒になってるんだけど…」

「ちょっとパパのステータスを拝見しますね…間違ひありません、ALOはSAOのコピーみたいですよ…そのステータスも必然的ですね。でも、文字化けしてるアイテム群は全て捨てておいた方が良く

ですよ。GMにバレると大変ですし」

私達は頷いて文字化けしているアイテムを全て消去した…残ったアイテムは安っぽい鎌一つ

「あ、そういえばユイはALOではどんな立場なんだ？GM権限とか」

するとユイは光に包まれ、縮小して、小さな手のひらサイズの妖精になった

ますますお持ち帰りしたい

「これがこの世界での姿で、ナビゲーションピクシーに属します。でも…GM権限は使えないみたいです…でも、近辺の索敵はできますよ」

索敵か…。うむ、可愛い上に役に立つ。お持ち帰りい…

「ユイ、この世界にアスナが居るんだ」

「ママがですか！？一体どこに…」

「言い方が悪かったな…正確には、この世界に囚われてるかも知れないんだ…つまり、あれからまだ現実世界に帰還してない…アスナだけじゃない…二百人ほどもまだ…」

「え…！？…じゃあ、パパはママを助けるために…？」

「少しでも可能性に掛けたいんだ…手伝ってくれよな！ユイ！！」

「勿論です!!」

「ありがとう…それと、妖精って飛べるんだよな？あれ、どうやるんだ？」

ああ、そう言えば飛べるんだったわね

といっても、私と（タウ）はログイン時の着地の際に羽根で減速したし…ってというかガチで飛んだことあるし違和感ない…

「初心者は補助スティックを使うみたいですよ」

ユイのジェスチャーどおり、キリトは左手の親指を立て、何かを握る手の形をつくった

「おお、これが…アルスもやってみるよ？」

「いや、私達飛べるから」

「なん…だと!？」

ALOの初心者にしていきなり飛べるのはおかしいんだけど…そこは経験が違うのよ普通の人間とはね!!

「パパ!この近くで対人戦が行われているみたいですよ」

「よっしゃ。見に行くか!!」

「相変わらずパパは暢気ですね」

「まっただ」

が苦笑いを浮かべた

ウィンドウから鎌をポップさせ、背中に担ぐ…うっわ軽っ

キリトも片手直剣…の安っぽいのをポップして苦笑い

は…

「あれ？武器変えた？」

「うん、大体の武器は使えるからね。それにしても、軽いなあ」

まあ、不満だね…武器の重さ

キリトはユイに従い補助スティックを使っての飛行
私達は自分で羽根を動かして飛行する

おー、遠目で見えるね

派手にドンパチやってる訳じゃ無いみたいだけど…
うわっ…二対多数だよ…解せないわね

「キリト、加勢するわよ」

「オツケー！」

丁度男の子が殺られて女の子一人みたいね

頑張って長刀振るってるけど分が悪い
てか強いなあ娘

急降下で私達は着地したが…

ズゴオオオ!! (二回目)

「……………」

私達は呆れ顔でキリトを見た

「……おう!! その子、助太刀に来たぜ!!」

場違いな位の元気な声を張り上げた

女の子を襲っていた集団は馬鹿にするような視線を私達に向けている
あ、そっか。この武器が初心者丸出しの装備だから嘗められてるのね

キリトが女の子に声を掛ける

「なあ、コイツら倒して良いのか?」

「えっ……ええ、他種族なら大丈夫だけど……」

「そっかあ、ならいつちよ行くかな」

女の子の回りにはデカイ盾と槍を携えて、鎧もそこそこの奴らがざつと数えて二十はいる

キリトは地面を蹴ったと同時に俊敏力にものをいわせ、懐に潜り込み、抜刀と同時に安っぽい片手直剣を振り下ろす
俊敏力と筋力の補正が高かついたのか、重装甲を割って、HPを一瞬にして奪い去った

これを火蓋に私達も加勢する

持ち前の技術で只の鉄でできた安っぽい鎌の刃を重装甲の兜の間に
潜り込ませ、首を落とす

クリティカルでひとたまりもなく一人、また一人をリタイアさせる

「最後のっ!!」

一人だけ補助スティックを使っていなかったプレイヤーが今まさに
に止めを刺される瞬間だ

「一人だい!!」

槍の矛が深々と心臓（のある場所）を貫く

赤い装甲を纏った軍団を全て討伐完了した

「で、あなた達は敵？味方？」

私達が救出した金髪の少女…よく見ると可愛いな…が頑張って平静
を保ちつつ尋ねた

「うーん、俺達は集団に襲われてる女の子を正義の味方らしく参上
したシチュエーションなんだけどなあ…」

「あなた達は見たところ初心者よね…というか、ケットシーはとも
かく、スプリガンの領地は反対方向なのに…」

「ああ、俺達はどうも道に迷ったみたいだ…」

「迷ったあ！？あなた本当に変ね〜。まあ、良いわ。私はシルフの

リーファ。お礼がしたいから、着いてきて」

「おう、サンキュな！！俺はキリト。で、アルスにタウだ。よろしくな。ああ、それと飛びかた教えてくれよ」

おお、何の悪びれもなくレクチャーさせようとしてるよキリト

それから三十分くらいで飛行をマスターしてしまった…流石だね。
無駄な技術

リーファに並んで私達とキリトが並んで飛んでる

「リーファ、もっと飛ばしても大丈夫だぜ？」

「お？いったわね？なら！！」

羽根をほぼ広げていない状態で、ロケットの如く加速していく
キリトも負けじと着いていく……のが運の尽きだったらしい

シルフ領の塔が目の前に…

「なあ、着地って…」

「あ、ドンマイキリト。今教えても間に合わないわ」

三人は急降下していく

「嘘だあああああああああ！！」

ズドオオオオオン！！

キリトは顔面から塔に激突したのであった

さて、目指すは世界樹なんだ（後書き）

リーファたん可愛いよリーファたん

あれ？後書きになってnry

バイトとかゲームとか（前書き）

今回はクオリティが低いかも知れませんが
宜しくです

ゆっくりしていつてね!!

バイトとかゲームとか

咲魔 side

「馬鹿ね」

「馬鹿だね」

「聞いてくれたら、教えたのに……」

ただ今キリトが撃墜した場所

慌てて見に行ったら、HPは半分を割り込んだくらいになってるし、たんこぶが三段くらい積みまわてるし……

うん、要するに初心者のくせにめちゃくちゃ飛行でギョーンギョーン飛ばすのは只の馬鹿ってことだ

「酷いぜ。教えてくれたら良いのによ……」

「私はキリトなら頭から着地してくれると思ったんだけど。予想の右斜め上をいったわ」

「うう……」

「まっ……まあ、教えなかったのは私だし、お詫びとお礼で……飯でも奢るから」

「ご飯って言葉に三人の耳がピクツとなる
VRMMOの飯…SAOで食べたNPCレストランの料理は見た目
と味がマッチしてなかったしね…
でもALOまでそうとは限らないし…」

「ものは試しね…」

「ん？何か言った？」

「リーファには関係ないと思うよ多分」

「ふうん？私、凄く美味しいお店知ってるんだよ！！行こっ」

「「おー！」」

「グフウー！」

キリトの口の中にポーションを無理矢理突っ込んで回復させとく

今度は歩いて街をまわる

時おりシルフがギョツとして私達を見るけど、隣に居るリーファを
見るとホッと肩を撫で下ろす

「へえ、リーファは結構名の通ったプレイヤーなんだね」

「キミ達程強くないよ。しかも、強いのは単純な剣のぶつかり合
いだけだし」

「ほー。剣道でもやってんの？」

「まあね。あ、見えてきたよ。」

さっき話してたのは とリーファでした

洒落たNPCレストランに入っていく

「あんまり食べ過ぎない方がいいよ。ログアウトしても満腹感が残るから。お母さんにそれで文句言われたことあるから…」

「あはは…そうだな」

リーファはチョコレートケーキ、キリトはバウムクーヘンを頼み、私はアップルパイで はマフィンを頼んだ
驚いたことに、AIであるユイもクッキーを注文した

「ユイ、旨いか？」

「おいしいです」

「へっ…へえ。プライベートピクシーってそんなに感情が豊かなんだ…？キリト君ってプライベートピクシーを当てるくらいだからリアルUcK値も高いんだね？」

「ん？…あっ…ああ、まあな」

ほどほどにしておかないとスグに申し訳ないな…今日も晩御飯はスグを作るらしいからね…

「んじゃ、私は一旦ログアウトするから、君達は上の宿で落ちてね

「じゃあ、また。次行く時はメールでね」

「一応eメールは交換しといた
んまあ、夜くらいにメールするかな？」

「リーファの姿が消えた」

「じゃあ、俺達も落ちるか？」

「そだね。今日は確かスグがご飯作るらしいから食べ過ぎたらだめ
だしな。そだ！寝落ち試してみよう」

「食事はほどほどにしておき、レストランの二階の《鈴蘭亭》に向かう」

「ごめんなユイ、また夜にログインするから」

「……パパがログアウトするまで一緒に寝ても良いですか？」

「え？あつ……ああ、いいぜ」

「ユイは本来の少女の姿に戻り、キリトのベットに潜り込む」

「何気ない話でキリトは眠りについていった」

「私達と言えば……」

「咲魔って、ALOに来てても乳でかいな（モミモミ）」

「ちよっ！？やめっ！！」

「良いではないか良いではないか」(もみくちや)

「ひゃっ!...」(仕返し)

「わひゃっ!?!ちよっ／＼／」

「おりゃあ!?!」

「なっ...なにやってるんですか?」

「「あ...」

おお、超純情少女が居る

「「あっ...あははは」

これは醜態を見せてしまった

「ゆっ...ユイも落ちたら?」

「そうですね」

ユイがログアウトしました

「「ふう...」

「寝よっか」

「そっね...」

眠りに落ちた

むくり…

「ふう…」

ケータイが鳴った

「ん？スグ？」

『ご飯出来たよ～。降りてお出で～』

「了解」

着替えるのが面倒だ

だがしかし、しわくちやのままなのもどうかと思い、黒いジャージに着替える

今日はスグが夕食当番である

テーブルにはずらーっと和食が並ぶ

「おお、青魚美味しい」

スグは料理が上手いねえ

あ、そう言えば

「和人く。私ら今からバイトだ」

「あ！！忘れてた！！ナイス咲魔！」

「こんな時間からどんなバイトだよ…って聞いても無駄だったな…。
気を付けろよ」

ケータイをジャージのポケットの中にしまいこみ、手ぶら状態で目指すは…福岡県

遠っ！！

隠蔽結界を発動させ、飛ぶ

三十分の空の旅をしたあと、福岡県の山奥にある、とある洋館に到着した

洋館の門の前には協会の人があつてる

「よっ。お務めごころうさん。今日シフトのと咲魔だよ」

「お待ちしておりました。ただ今あの洋館には、死者五十体、死徒十体がおります。全て殲滅で、報酬額百万円で宜しいでしょうか」

「おっけ。んじゃあ、終わり次第指定の口座に振り込んでくれ。忘

れると協会に殴り込むよ…主に咲魔が」

「……なんで私よ」

「やりかねない…」

「畏まりました、では、健闘をお祈りいたします」

黒光する大鎌を取り出す

よく切れる以外なんのへんてつもない只の大鎌

よし、殴り込むか

扉をガチャリと開く

いきなり待ち伏せだったようで死者二十体ほど飛び掛かってきた

「死者は寝る時間よ…」

一閃すると、一気に死者の首が飛ぶ

第二波として、一気に三十体ほどで私達を包囲する

仕方ないので一体ずつしらみ潰しにぶっ飛ばすしか無いようだ

「それにしても…死者は学習しないわね。主に行動が」

「仕方ないよ。脳が腐ってるんだから。リアルで」

本当に一体ずつしらみ潰し

「貴様ら、ここに来たからには「五月蠅い」（ズシャアア）」

あ、死徒五匹目

「いや、台詞くらい最後まで言わせてあげようよ」「死ねやあああ！
！」だが断る！！（グツシャアアア）私も五匹目」

「…ネタに走ったわね」

「知らん。あとは死者だけね。仕上げは任せました先生」

「宜しい。無限の創造世界」

剣や槍や、銃などが空間に現れる

「発動」

結論だけ言おう

洋館は洋館跡地になった

バイトとかゲームとか（後書き）

更新遅れて申し訳ないです

それと、いま気づきましたが、17ものユーザーさんがこの小説をお気に入りしてくれていました

ありがとうございます！！

レネゲイト（前書き）

更新遅れてすみません

いつもより長く書きました

では、ゆっくりしていったね！！

レネゲイト

和人 s i d e

朝…か……

いつもより早く起きたな…
でも、二度寝は出来そうにない

ちよつくら、外の空気でも吸いに行くかな

今は冬で朝になるとかなり冷え込む
和人は、黒のスウェットに着替えて、縁側に向かう

「お、やってるやってる」

庭では、妹の直葉が無心で竹刀を振っていた

和人はスグの真剣な表情が結構好きなのだ

スグが竹刀を振り終えて、一息入れると、縁側に座る和人の姿に気づいた

「おはよう、スグ」

言うなり、少しぬるめのミネラルウォーターをスグにヒョイと投げた
うん、運動の後にキンキンに冷えた飲み物を飲むのは自殺行為だからな

「お…おはよう。やだなあ、見てたなら声かけてくれても良いのに」

「あんまり真剣だから見入っちゃってさ」

スグは何気無く和人の隣に座って、ミネラルウォーターを飲み始めた
横にある竹刀をヒョイと持ち上げてみる

「…軽いな」

「ええ？それ、真竹だから結構重いんだよ」

「あ…ああ。なんつうか…比較の問題がな」

「何と比べてるんだか」

「ああ、まあな。なあ、ちょっとやってみないか？」

「やるって…何を？」

和人はひょいっと竹刀を肩に掛けてニイツと笑う

「剣道の試合だよ！」

スグは心底驚いたように眼を見開いた
しかし、ニヤリとしかえした

「ほーお、随分とブランクがあるんじゃないやございません？全中ベスト
8私相手に勝負になるのかな？負ける気がしませんわよ？」

「ま、やってみてのお楽しみだな。毎日ジムでのリハビリの成果を
見せてやるさ」

道場

「そ…それなあに？お兄ちゃん」

防具を着け終えた俺たちは一礼して、取り敢えず後は始めるだけ…
なんだが

どうやら、俺のSAOからの構え…腰を落として、刃先を地面すれ
すれに落として、力を抜いた構え方は、剣道のエキスパートである
スグの眼には珍妙に映ったようだ

「俺流剣術だからいいんだよ！！さて、かかってこい！！」

「へ…へえ。なら、行くよ！！」

スグの突進は大したもんだ、スツゲエ速い
でも、SAOんときの咲魔とかシキとかに比べたらっ！！

面に打たれる直前下に垂らしていた竹刀を振り上げる…SAOで言

うパリイをした

そのまま、身体に教え込んだ《バーチカル・スクエア》を発動する連撃と言っても、システムに頼らないものなので再現率は百パーセントではないが、四連撃は確実にスグに襲うが、全ていなされ、左手に竹刀が振り下ろされる

でも、これくらい、モンスター（咲魔）がやってた憶えてる！！

柄から左手を外し、竹刀を体側に引き付けた
右手一本で握った竹刀をスグの面に振り下ろす

ギリギリ対応された

でも、瞬間的な力は弱いけど、SAOんときの技術はあるな…よし、ALOで使える

スグは本気モードでかなり連撃を打ち込んできたが、回避するスグの竹刀を狙って《ヴォーパル・ストライク》を繰り出した
確かに威力が弱いので、武器破壊は無かったが、これも使えそうだ…

業を煮やしたスグが強引に鏢迫り合いに持ち込んだ

もやしっこの俺はスグの猛攻に耐えきらなかったようだ

「面！」

スグの放った一撃が俺の頭に当たった

「ふう、スグは強いな。ヒースクリフなんか目じゃないぜ…」

そう言つて、SAOんときの感じで無意識に竹刀を左右に払い、一回転させて背中に…

「…どつか頭打つたの？お兄ちゃん…」

「あっ…えっと…だな。うむ」

我ながら何が「うむ」だ…

礼をして、どすんと座ると、防具を外し始める

「それにしても、吃驚したよー。お兄ちゃんいつのまにけいこしたの？」

「んー。SAOんときの感じでいけるかな〜とか思ってたんだけど…スグには敵わないな」

咲魔ノアルス side

只今キリトとリーファとの待ち合わせ場所である喫茶店

と二人でタピオカジュースを注文して飲んでる

「おっす。待った？」

キリトがログインしたようだ

「いんにゃ、今来たところよ。……それにしても、周りの視線が」

シルフ領である《スィルバーン》には、当然ながらシルフしか居ない

私とはケットシー、キリトはスプリガンだ

かなり注目されてる…

気まずい雰囲気の中、タピオカジュースを飲む三人である

「ヤッホー 待った？」

おお、女神降臨

「いや、別に今来たばっかだよ」

「そっか」

「そついえばさ、俺たちは世界樹を目指してるんだけど、世界樹ってどこあんの？」

「ええ…あのグランドクエストに挑戦するの？……いくら君達が強くてアレは無理だよ」

んー、グランドクエストってなんだ？

「『グランドクエスト？』」

「君達、そんなことも知らなくて世界樹に挑戦しようとしてたの？」

「わりいな、私達はある知識が無いんだよ。教えてくれ」

「あきれた…グランドクエストはね、世界樹の天辺に登ることなの。道中の敵がやたら強いし、今までクリアされてないんだよ。でも、天辺に登りついた種族は『アルフ』っていう種族になって、飛行制限無く、自由に飛べるんだよ。」

「へえ、情報ありがとな。んじゃ、私達は行こうかな？キリト」

「そうだな。色々と有り難う、リーファ。助かったぜ」

腰を浮かして私達は立ち去ろうとする

「ねえ…君たち、その装備で行くつもり？何なら武器でも買わないの？」

「『あ…』」

そう言えば初期装備のままでは幾ら反応速度が異常とは言え、高級な防具は買けないだろうな…

金ならSAOからのコンバートで大量にあるから武器ぐらい買っとこう。そうしよう

「仕方ないなあ、もう。…じゃあ、着いてきて！」

案内近くに武器屋兼防具屋があったので入ってみる

「店長、最高に重い片手直剣を持ってきてくれ」

店長が持ってきたのは、そこらの片手直剣より重そうな剣でも、それは…

「もっと重いやつ」

二、三回素振りをして、軽すぎたらしく、もっと重いのを要求する…それが数回続いて妥協したのが、土妖精^{ノーム}、闇妖精^{インプ}などが持つてそんな、片手直剣っぽくない大剣だった

私は、キリトほどでは無いけど、ある程度の重さの大鎌を二つ、はキリトのより重い大槍を一つ買った

現在、防具選り中

「キリト、どっちが似合う?」

私^が持ってきたのは、黒のドレスと、黒のポンチョと、カッターシヤツにミニスカート
戦いに行くには程遠い装備だ

「んー、ドレスが良いと思うぜ?」

「じゃあ、そうしよう」

けっこうあつさりと決まったのであった

「私も着いて行っっちゃおうかな？」

「ん？領地の方は良いのか？俺達は三人で大丈夫だけど…」

「いや〜。私、領地とかあんまり興味無くて、いつか出ていこうと思ってたんだよ。着いて行っても良い？」

「んー、俺は良いけど…」

キリトが私達の方を向く
了承を頷きで伝える

「別に良いぜ」

「やったあ！！よし、今のパーティーに伝えるから着いてきて！！」

一行は、歩きだした、

その目指す先は、昨日キリトが猛スピードで激突して、危うく死にかけた例の塔で、キリトとしては、余りいい思い出ではないので、いつも浮かべるイタズラっぽい笑顔ではなく、苦笑をうかべた

さて、塔の中に入り込み、かなり階段を登ったら、小部屋が一つあり、そこに入っていた

「リーファちゃん！！どこ行ってたの？心配したよ！……って…ス

ブリガンにケットシー!?なんでここロ」「五月蠅い!!レコン!」
うう…酷いよリーファちゃん」

レコンと呼ばれたシルフの独特な黄緑色のおかっぱの少年は厳しい
リーファの言葉に頭を垂れた

「レコン、シグルドは知らない?」

「向こうに居るけど、なんかあつたの?」

「私、しばらくの間この人達のパーティーに加入するから」

「えっ!?!…」(まあ…シグルドに着いていくよりはマシなんだろうね…):…わかったよ」

やけに肯定的ね…シグルドってやつは、そんなにやなやつなのかな…

「それは聞き捨てならないな、リーファ」

「…シグルド」

シグルドはここ数週間リーファと共に行動しているパーティーのリーダーである。シグルドはリーファと並ぶ最強剣士で、リーファが嫌う政治的にも力がある

しかし、シグルドは効率は良い反面、自分の利益にならないことはいらない傲慢さがある

リーファもそろそろパーティーから抜ける潮時かと考えていた…

「パーティーから抜ける気なのか、リーファ」

シグルドは機嫌が悪そうだ

「まあね、貯金もあるし、今は、この人達とパーティーを組むことにしたわ。他種族だけど、サクヤなら気にしないだろうし」

因みにサクヤと言うのは、シルフ領の領主であり、人望厚く、長い間政治の実権を握っている
リーファとは友人である

「勝手だな。残りのメンバーに迷惑だとおもわないのか？」

「ちよつ、勝手え！？…あんたねえ、私の条件は忘れたの？」

リーファは前々回のデュエルイベントでシグルドを下した時に、スカウトされたのだが、条件を二つ出した

一つ目は、パーティー行動に参加するのは都合のつくときだけ
二つ目は、抜けたくなったらいつでも抜けられる

リーファは自由を好む

だから、束縛は御免だと伝えたつもりだった

だが、シグルドは大仰に続けていたが内心聴いていなかった

リーファは、いつになく真面目な顔でレコンが忠告してきたのを思い出した

《このパーティーに深入りするのは止めた方がいい。シグルドはリーファを戦力としてでなく、自分のパーティーのブランドを上げるために、半ばアイドルとして、スカウトした》と

リーファはやるせない感覚になり、俯いた

「仲間はアイテムじゃないぜ」

キリトの声だった

リーファは顔をあげると、二人の少女が庇うように前に立っている

「なんだと？」

「他のプレイヤーを、あなたの大事な剣や鎧みたいに、装備欄に口ツクは出来ないと言ったのさ」

「貴様、屑漁りのスプリガン風情が付け上がるな！リーファ、お前もこんな奴と相手をするんじゃない！どうせコイツは領地を追放された《レネゲイト（脱領者）》だろうが！！」

剣の柄を握り、今にも抜刀しそうな勢いだ

「この人達は今のパーティーなの。悪く言わないで」

「なっ！？…リーファ、領地を捨てる気なのか？」

「そうよ。挨拶はこれくらいにして、サクヤには後で手紙でも出しとこう。じゃあ、私達は行こう」

私達が離れるとき、シグルドは苦虫を噛み潰したような顔でリーファを睨み付けていた…

塔を出た私達は屋根の上に立っていた
なんでも、高度を稼いで滑空するらしい

「良いの？私達のせいでパーティーから脱退したみたいだけど」

「うん。あのパーティーには飽々だったし、抜けようと思ってたんだよね。あのレコンって子も警戒してたけど、もうちょっと残って探るらしいし」

「そう。なら良いわ」

三人が屋根を蹴り、大空に舞った

レネゲイト（後書き）

まあ、原作と違う箇所は多々ありますが仕様だから仕方ないので

サラマンダー（前書き）

さて、今回は長いですよー！

まあ、彼奴等無双はありますけどねww

サラマンドー

咲魔 side

羽根を高速振動させて、辿り着いた所は洞窟の前だった

「リーファ、なんでここで降りるの？」

「あー、この山見えるでしょ？これ、大きすぎて越えていけないんだ。だから洞窟抜けるしかないの」

ああ、デカイね

そういえば、飛行限界があるのね
現実との違いね

「なら、ローテアウトする？」

「ろ…ろーて？」

「おい、キリト…お前さ、ネットに詳しくなかったっけ？」

「こつこつVRMMOには疎いんだよ」

二年間現実とVRMMOが入り交じった世界で戦ってきたからね
まあ、あれこそ本当のVRMMOだったと認識してるんだけどね

「即落ちしたら中立地帯だから、魂がないプレイヤーアバターが一定時間留まるから、交代で、ログアウトするんだよ。ほら、この時

間だと、晩ごはんとお風呂まででしょ？」

「なるほど。なら、女性の皆さんはお先にどうぞ」

「ありがとねキリト君」

「サンキュー」

「なに当たり前のこと言ってるの？どうせアンタはいつも一時間くらい入ってんじゃない」

「なんで知ってるんだよ…まあいい。さっさと入ってこい」

「あはは、じゃあ20分よろしくね」

「ユイ、パパが私達になんかしたら殴って良いわよ」

「分かりました！！アルスさん！！」

「しねえよ！！さっさといけ！！」

「はいはい」私達三人は洞窟の外壁に腰掛け、ログアウトした

自室で覚醒した私はすたこらさっさと居間に出た

「あ、スグじゃん。料理手伝うよ」

「ありがと、咲魔」

軽めにおかずを作り、ベーグルサンドを作った

シキには、お皿とか出してもらった

「あ、そーだ。キリトの奴、爆睡してたから晩ごはんは作り置きし
といてごうよ」

「おっけ。なら、食べよ」

「「「いただきます」」」

一分半後

「「「ちそうさま!」」」

「早いわね、なんかあったの？スグ」

「えへへ〜ちよつとALLOでね〜」

スグはヒョイヒョイと食器を洗浄機に放って、浴室に向かった

十分くらいで上がってきたので、黒ビールを飲んでるのがバレた

「あー、また呑んでる〜。未成年は駄目だよ」

「「「ああ…あー」」」

私とシキー（お酒にも馴れたらしい）はジョッキを取り上げられ、
言語になってないだらしない声を上げた
そのままビールは流された

私達はと言うとだらだらとお風呂に入って、寝間着に着替えたら予定の20分は5分超えていた

気にせずログインした

「「ただいまー」」

「うーい。五分遅刻だな」

「キリトに時間感覚があるなんて驚いたわ。……何ぞ？それ」

「アルス、それはどう受け取っていいのか解らんぞ？それと、これは薄荷味のパイプだよ。雑貨屋で買い込んだ」

ヒョイと投げてきた

「……悪くは無いわね」

「だろ？じゃ、次は俺が落ちる番だな。護衛宜しく」

「もし襲われたら護衛代しっかりもらうからね」

「うお、そりゃ勘弁」

言うなり、自動的に待機姿勢になり、キリトはログアウトした

取り敢えず、ウィンドウから鎌をポップさせて一応警戒する
備え有れば憂い無しだ

「ねえ、鎌つてさ、AL0の中でもかなりの《使いずらくて、性能もよくない武器ワースト10》に入ってた気がするんだけどな」

「へえ。確かに幾ら筋力を上げてても何故か重いし、首に当てたらクリティカルだけどその有効範囲狭いし、何故か細剣と並ぶ攻撃力だからねえ…でも、問題ないわ。攻撃範囲広いし、クリティカルが出たら、どの武器のクリティカルより攻撃力が高くなるから」

「パパはアルスさんの事、『最凶の鎌使い』と言ってましたよ」

「いやいや、最凶つてなによ。失礼ね」

「失礼なことはないよ。咲魔は他のソフトじゃ《殺戮人形姫》って呼ばれてたじゃん」

「シキ、黒歴史は頭の片隅に置いときなさい」

「何が黒歴史だった？」

「ワオ。ミスター・ブラッキー」

「黒歴史といえば、シキは《二爪の黒戦姫》だぜ？かわんねーよ」

「あわわ…随分と早いね《黒の剣士》さん」

「家族が作り置きしてくれてたからな」

一瞬、アルスとのケットシー特有の耳がピクリと動くと同時にキリトは後ろを振り返った

「ど…どうしたの？」

「いや、なんかこっちを見られた感じが…ユイ、誰がいるか？」

「いいえ、半径三百メートル圏内には誰もいませんね」

「私は何も感じなかったけど…」

「けど、こいつは意外と馬鹿に出来ないんだ…一説によると、アミユスフィアが処理落ちして、殺気みたいなのを感じるってのが有力なんだが…」

「でも、そんな簡単に処理落ちするハードはフルダイブじゃなくて、漬け物の重石にしたほうが役に立ちます」

「ユイ、アミユスフィアだと重さが足りないわよ」

「そうでした…」

「でも、気のせいかも知れないし、洞窟、入っちまおうぜ？」

そうして、洞窟に入ろうとした瞬間、視界の片隅に小さな赤い蜥蜴が…

「リーファー!!」

「使い魔!?!このっ!?!」

リーファの一太刀で使い魔は消失した

「覚悟…決めるしかないようね」

リーファが呟いた

つまりこうということなのだ

使い魔を倒しても、位置は敵にバレてしまっている

しかも、炎属性だから、最近力を伸ばしているサラマンダーであるこの前、私達がリーファを助けるために暴れまわった時点でお尋ね者なんだろう

「まったく、マンダーも飽きないわねえ」

「同意見だよつと」

「パパ、頑張ってください！」

「よっしゃあー!!」

「君たち…暢気だね…」

アルスは大鎌を担ぎ、は槍を構える

キリトはあの重心を低くする珍妙な構え
リーファは太刀を中段に構えた

すぐ近くにサラマンダーの大軍が現れた

重装備の盾役重視の後ろで回復役が構えてるね
後ろで回復と攻撃魔法をやってくるのか

タンクは堅そうね。何とかして盾を壊したいな…

次の瞬間、大量の炎属性魔法が私達を埋め尽くした

「あつつう！！このやるつ！！」

眼前のタンクに攻撃するが、分厚い盾に阻まれて、雀の涙程度のダメージしか与えられない

ま、これは予想済み

「キリト！あれ使っわよ！！」

「わかった！！」

私が地面に投げたのは煙玉

それも、かなりの高級な煙玉を買ったから、一個しか持ってないんだけど仕方ない

当たり前の事だが、煙玉は使つと、自分の視界も利かなくなる単なる時間稼ぎのアイテムだ

只のプレイヤーならば

煙の中で、キリトとアルスは疾走していた

は、用心のため、リーファの近くで護衛だ

何故、的確に動けるかは、実に簡単なことなのだ

なにせ、こちらには《ユイ》という心強いパートナーが居るのだ

「パパは三時の方向、アルスさんは、九時の方向にメイジが固まっています!」

「了解」

つまり、高度な探知が使えるというだけだ

そして、計算どおり…いや、セオリーの通りに魔法職は防御と体力に劣っていたので、背後からの、急所への攻撃は一撃で魔法職を葬ることができたのだ

霧が晴れた頃には、タンクが二名しか残っていなかった

「あ…ははっ…はははは…」

完璧に戦意を喪失していた

「ま、これ以上やるのめんどくさいし、放つとこじよ」

「そうだな。もう追ってくるなよ?」

「あ…はい」

二人のタンクはその場に立ち尽くして、洞窟に入っていく四人を見送った

「俺たち…助かるの?マジで?」

「お…おい！！マズいつて！！早くSに報告しないと！」

「あ…ああ、でも。俺、彼奴らの討伐隊に入りたくないぜ…」

「……俺もだ…」

「君たち…本当にすごいね…」

リーファの感嘆…九割呆れを聞きながら洞窟、《ルグルー回廊》を歩いている

一方、キリトはユイと一緒に、先程リーファから指摘を受け、呪文を唱える練習をしていた

私達はと言うと、呪文は一通り覚えたので、適当に警戒しながら歩いている

数匹のオークが出たが、一瞬のうちに葬り去った

「ええつと…ア…アール・デナ…レ…レイ…」

キリトは覚束ない口調でスペルワードを呟くが、つつかえ過ぎて発動できない

「頑張ってくださいパパ。上級スペルは二十ワードあるんですよ」

「うう……。俺もつピユアファイターで良いよ……」

「泣き言いわない！！ほら、もういつかい」

リーファのレッスンはかなりスパルタであるようだ

ともかく、第一チェックポイントの地底湖に到着しそうだ

「あ、メッセージ入った。ごめん、ちょっと待ってね」

リーファは立ち止まりメッセージを眺めた

「なんじゃこりゃ？」

「なにになに？見せて」

《レコン》

《やっぱり思ったとおりだった！気をつけて、S》

最後のSが凄く気になる

二人で考えていたら、ユイがキリトの胸ポケットから顔を出した

「気をつけてください、プレイヤーの集団が来ます」

「人数は？」

私が尋ねた

「十二です」

んー、こんな辺鄙な場所誰が通るんだろ

「なんか、嫌な予感がする…隠れてやり過ぎそうよ」

「ん？でも、隠れる所無いぜ？」

「そこはオマカセよん」

四人は窪みに入り、リーファは風魔法を唱えた

大気の膜が、包む

「話すときは小声でね」

「へえ、便利ね」

「あれ？なんか、赤いコオモリが…」

「！？」

リーファは道の真ん中に転がり出ると赤いコオモリを一刀両断した

「トレーシング・サーチャーよ！！サラムンダーに見つかった！！
街まで走るよ！！」

頷きあい、走り出した

「…スイルベーンにサラマンダーが入り込んでいた？」

「妥当な考えね。どうしたものか」

「お、湖だ」

キリトが言う

湖があるなら後は橋を渡るだけだ

全速力でダツシュする…が

いきなり橋に巨大な岩壁がせりあがり、……激突

「きゃっ!?!」

「いつ!?!」

「ぬおっ!?!」

上からアルス、キリト

背後を見ると、サラマンダーの軍隊は橋に着いていた

またもや魔法の詠唱に取り掛かった

「リーファとメイジ役宜しくね、前衛は私とキリトに任せなさい」

「まったく、不本意だねえ…まあ、アルスとキリトは回復魔法覚え

てないし…仕方ないか…な？リーファ」

「そ…そうね…性分じゃないけど」

リーファと が岩壁ギリギリまで下がった

キリトが気合一閃、前衛らしき…何故か盾しか持っていないサラマンダーに攻撃した

が、大音響を響かせ、後方に押しやった

チャンスとばかりに、アルスがタンクを抜ける

そして、メイジ役のサラマンダーの首に一閃

見事クリティカルが発生するが、防具が良いのか…はたまたアルスの鎌が弱いのか。体力を半分削り取っただけで終わった

その瞬間、零距离からの爆撃魔法をまともに食らったアルスは、間一髪、体力を一割を割り込んだくらいで、止まった

アルスは宙に吹き飛ばされた

この集団は凄まじい物理的攻撃力を知っており、対抗しているのだ…堅くなることだ

二人は、もう何度も火に飲まれ続けている

これはもう、技量がどうこうではなく、単なる数値的問題である

そこには、只、数だけが真の強さだった

もはや、キリトと咲魔による一騎当千は不可能に近い状態だった

咲魔／アルスは気づいた

魔法は属性攻撃か、防御でないと止められない
ならば！

魔法を詠唱する

アルスの鎌は水属性の青いエフェクトが迸っていた

だが、その雀の涙程度のことので、戦況をひっくり返すことは出来ない

でも…

「もういいよ！！またスイルベーンから何時間か飛べば済むことじゃない！とられたアイテムもまた買えば良いよ…もう……諦めようよ」

リーファの感情を生真面目にアミュスフィアが感じとり、涙ぐんだ声になった

「…「嫌だ！」「」」

「俺が生きてる間はパーティーメンバーを絶対に殺させやしない！」

「だから…私は身内と友人にだけは甘いのよつと…！」

「……だ、そうだから、もうちょいトライしてみようよリーファ」

死の瞬間は人によって様々だ

照れ笑いを浮かべるもの、恐怖するもの、錯乱するもの
しかし、結局は擬似的な死になれていく
そうでなければ、ゲームは遊びにならない

でも、三人は違う

リーファの知る余地は未だ無いが、本物のゲームを経験した三人には、懸命に生き残ろうとする意志があった

キリトが無茶無防備な突進を、咆哮しながら敢行した
剣と、そこそこ鍛えた体術で無理矢理こじ開けようとする

タンクによる防御を魔法を使わずに崩す戦法はイレギュラー中のイレギュラーだった
だが、そのキリトの行動に、サラマンダーはたじろぎ、反応を一瞬だけ遅らせた

その合間にアルスがアイテムを操作する
寸分狂わぬ早打ちで、左手にもう一つの大鎌を携える
キリトにより、こじ開けられた狭い穴をアルスが疾走する

「リーファ、アルス集中で防御呪文よろしくな」

「え？」

いつの間にか槍をポップさせた　がリーファの肩をポンと叩いて、
走り出した

次の瞬間、アルスに攻撃魔法が集中した

今度は、アルスの無茶な反応で魔法の半数を叩き落としたので、ギリギリ体力がグリーンで止まった

隙について がメイジ隊に特攻して、乱戦に持ち込んだ
キリトも鬼気迫る表情で参戦した

メイジ隊は混乱して、一人、また一人と爆散していく

攻撃力のないタンクは丸々無視したのだ

「このやる!!」

必死に体術でタンクが攻撃しようとするが、目の前にはいつの間にかリーファが…

「だああああ!!」

盾を構えることすら忘れ、サラマンダーの軍隊を、一人のこして殲滅させた

「さて、物は相談なんだが君」

キリトがにこやかな表情でサラマンダーに話しかけた

「殺すなら殺しやがれ」

「まあ、落ち着いて。君の情報全部教えてくれたら、ここにある君の仲間のアイテムをあげちゃおうかな？なんて」

サラマンダーは周囲を見回し、全員いないことを確認した

「まじ？」

「大まじ」

すると、サラマンダーはニヤリと笑い、キリトと握手した

「「「男って…」「」」

「なありーファ、さっきメッセージ入ってなかった？」

「あ、そうだった…」

さっきのメッセージは、やけに気になる内容だった。特に、最後のSの意味…

しかし、仮想世界に、現実世界の問題を持ち込むのは、一種のマナー違反なので、どうしようかと悩むところだ

「俺たちはここで待ってるから見てきていいぜ」

「うん、ごめんね。すぐ戻るから！」

リファは、申し訳なく思ったが、断るのもどうかと思い、現実

帰って行った

サラマンドー（後書き）

ああ、なんてこつたい。…無双やっちゃいましたよw

同盟（前書き）

おうぶ、あと三分で日付かわるww

では、楽しんでいってね!!

同盟

咲魔 side

先程リーファがログアウトした
理由は、レコンからのメッセージにあった

なんとも、興味が惹かれる内容：というか、なんかありそうなんだ
けど全く意味が伝わらないメッセージを受け取って、大事をとって、
確認しにいったのだ

しばらくするとリーファが再びログインした

「お帰り、リーファ。なんかあった？」

「ごめんなさい、私、急いで行かなきゃいけない用事ができちゃっ
た…説明する時間もないし、ここに帰ってこられないかもしれない
…」

「……そうか。じゃあ、移動しながら話を聞こう」

キリトは腰掛けから立ち上がった

「どっちにしても、ここから出なきゃいけないんだらう？」

「……わかった。なら、走りながら話すね」

ルグルーを、アルン側の門を目指して、人並みを縫うように駆けて

いく

反対側にも地底湖を貫く橋が伸びていた

四人は疾走しながら、事の顛末の話をしていた

「レコンから、シルフとケットシーの同盟が秘密裏に行われるって
いう情報が入ったんだけど…」

「……サラマンダーの妨害？」

「察しがいいね。そうなの、サラマンダーが大軍を抱えて妨害しようとしてるの？」

「何故レコンがそれを？」

リーファは間を置いて話し始めた

「私達がシグルドに邪魔されたあと、レコンはお得意の尾行でシグルドを着けたらしいの、それで、気付かれずに着いていたら、シグルドの奴、サラマンダーと内通してたらしいわ…それで、話を聞いてたんだって」

ふむ、シグルド…あの偉そうなシルフね…

「なるほど、確かに同盟したらパワーバランス逆転するし、領主を討つてもそれはそれで得ね…しかも、シルフ側から漏れた情報だから、シルフとケットシーの仲違いもできるわけか…考えてるわね…」

リーファはこくりと頷いたが、何故か悲しげな顔で言った

「これは、シルフの問題だから君たちはこれ以上付き合ってくれ理由はないよ……。アルンまではあと一息だし、会談場に行ったら生きて帰れないから……。それに、世界樹に行くなら、サラマンダーに協力するのが最善かもしれない……。今ここで私を斬っても文句は言わないから……」

もしそうだったら……。私、ALOを辞めるかもしれない……。そんなことをリーファは内心考えていた……

パーティーが苦手なリーファだが、何故かこの三人と居るときは楽しかった

リーファも少しは自覚しているが、キリトに小さな恋心を抱いていた隣で走るキリトの横顔は、変わることなく、ポツリと言った

「所詮ゲームなんだから何でもアリ。殺りたければ殺るし、奪いたければ奪う……。そんなふう言う奴は嫌ってくらい出くわしたよ。それも真実だ、でも、仮想空間だからこそその真実もあるんだ」

キリトは優しさを含んだ声で後を続けるように言った

「VRMMOは矛盾してるけど、プレイヤーと分離したロールプレイは有り得ない。現実での人格が仮想にも出るし、仮想での欲望もまた同じ。俺、リーファが好きだよ。友達になりたいって思う。だから、どんな理由があってもそんな相手は斬りたくないし、斬らないよ」

「キリト君……」

「なーんか、キリトが言っちゃつと、やけに現実味があるよな」

「茶化すなよ？」

「わかってんよ」

リーファは不意に胸が詰まって立ち止まった
遅れて三人も立ち止まる

「……ありがとう」

「悪いな、偉そうなこと言って」

「ううん、嬉しかった。じゃ、洞窟出たらお別れかな？」

なけなしの笑顔を振り絞ってリーファは言った

「いや、俺らも行くよ、もちろん　しまった！時間無駄にしちや
つたな。ユイ、走るからナビ宜しく」

「りょーかいです!!」

「えっ、え？」

いまいちリーファは状況を掴めていない様子

「ちょっと手を拝借」

「ふえっ!?!?」

「キリト、それがフラグ立ててるんだって気付きなさい。一生涯リア充を防ぐ為にも」

冗談半分で言ったものも、キリトは意味が解らないといった風に首を傾げた

次の瞬間には駆け出していた

敏捷力はキリトより上なので、《トレイン》という、モンスター集団をつくる非マナー行為を防ぐため、擦れ違い様にモンスターの首を刈り取る

ポリゴンが着いていけないスピードで疾走すること数十秒

「おっ、出口かな？」

瞬間足元から地面が消えた

あらかじめ羽根を滑空体制にしていたので、そのまま大空に射出したユイのナビ道理に高速で飛翔していく…

「あっ、プレイヤー反応です！六十八人、恐らくサラマンダーの部隊です。さらに十四人、恐らくシルフ、およびケットシーの会談出席者と思われまます」

「間に合わなかったね…」

リーファがポツリと呟く

既に双方刀を抜いて戦闘する勢いだが、多勢に無勢すぎるか…

「そつでもないさ」

キリトはニヤリと笑って、急降下体制に移った

「リーファ、領主さんたちの口止めお願いしますわ」

「え？」

三人はロケットバズーカよろしく、急降下していった

サラマンダーと会談出席者の間に流星が飛び込んだ

爆音と土煙をあげながら仁王立ちになる

「双方！！剣を引け！」

先程の爆音より大きいくらいの大声でキリトが叫んだ

「指揮官に話がある」

出てきた大柄の男は超のつくレアアイテムと知れる赤銅色のアーマーに、巨剣を携えている

「スプリガンがこんなところで何をしている。どちらにせよ、殺すのには変わらないが、度胸に免じて話を聞いてやるっ」

「俺の名はキリト。シルフとケットシーが同盟を結ぶと聞いて、ス

ブリガンも加わろうと、使者を派遣したんだ。ま、ここを襲うんなら三種族との戦争を望むと解釈していいんだな？」

キリトは不敵な笑みを見せながら指揮官に言い放つ

「ふんっ、護衛もなんとも弱そうな女か。そんな貴様が大使とは信じられん…」

「サラマンダーのおっさん、そんなのを先入観って言うんだよ？ いつちよ、殺り合うかい？」

が槍を抜いた

「 良いだろう、俺の首を取れたら貴様らを大使と認めてやる」

指揮官は真紅の大剣を抜剣した

side

「随分と気前がいいね。さ、かかってきな」

同高度を保ち、戦闘が開始される

横薙ぎに振るわれる剣を槍で受け止めようとする…

が、刀身が霞んだ

「なんじゃそりゃ！！」

半分脊椎反射で体術スキルを発動し、蹴り上げ、弾いた

「チート臭い……」

恐らく、所謂、伝説武器の一つだろうね……

刀身が霞むって……全部見切らないとダメかな……

槍を構え直し、突進する

突きはすんでのところで避けられる

薙ぎ払い、切り上げと攻撃するが、ギリギリで武器防御される

次の瞬間には巨剣が振り上げられていた

反射的に槍で受け止めようとするが、やはり刀身が霞み、……

「痛いなあ……もう、その武器反則だろ……」

HPは一気に三分の一持っていかれた

「次は手加減無しで行くよ……!」

羽根を高速震動させる

猛烈なスピードで突きを放った

突きはサラマンダーの横っ腹を少し抉った

「へえ、今ので直撃じゃないんだ……なかなかやるねおっさん」

「……ユージーンだ」

ニヤリと笑みを交わし、連撃の応酬が始まる

だが、ほとんどユージーンは守りに入っていた
の連続した攻撃に着いていけないのだ

「ぬっつー!」

「悪いけど、終わりにさせてもらっつー!」

ユージーンが槍に集中したのを見計らって、腹にボディীবローを
はなつ

当然堅固な鎧に固められ、ダメージはさほど通らないが、体術スキ
ル完全習得のボディীবローは、かなりのノックバックを起こす

そこに、全力の突きを放った

深々と槍が突き刺さり、ユージーンのポリゴンは爆散した

咲魔side

あの男：ユージーンは、私たちが来る以前のALOでは、最強だっ
たらしい

あの、赤き刀身を持つ《魔剣グラム》はレジエンタリーウエポンの
一つの両手剣で、剣や盾で防ごうとすると、《エセリアルシフト》
と呼ばれるエクストラ効果が発揮され、非実体化し、すり抜けて攻
撃できる

因みに、この剣に対抗できるのは、《聖剣エクスカリバー》だけ

らしいが、こちらは未だに見つかっていない

これを、誰とも知らない という無名の剣士が打ち破ったのは、かなりシヨッキングなことだったらしい

しかも、このALOは、プレイヤーキル推奨のかなりハードな内容なので、女子にはあまり人気がない

なのに…と言ったら偏見だが、女子に男子最強が負けるのはシヨッキングどころの問題ではないのだ

さて、ニヤニヤしてる私とキリトだけど、そろそろ硬直解除しないとね

「おい、誰かユージーンのス生頼むわ」

「あ…ああ、解った」

頷いたのは、シルフ領主のサクヤ

深緑の頭髮に、明るい緑の着物を着ている

腰にさしている長刀は、華奢だが、リーファのより長い

サクヤがスペルを唱えると、エンドフレイムになったユージーンが蘇生した

「見事な腕前だな。俺が今まで見た中で最強のプレイヤーだ、貴様は。名はなんという？」

「（タウ）だよ。槍使いの。と言っても、武器は何でも使えるけどね」

「ふっ…おもしろい奴だ」

「さてよ！！俺はまだスプリガンの実力は見てないぜ！！そいつも殺れば良いじゃねえか！！ユージーンの旦那！！」

後ろに控えたサラマンダーが言いはなった

「俺は良いぜ。十人だったら一人で行ける」

キリトが不敵な笑みを見せた

「…いいだろう、ならお前ら十五人とそのスプリガンが戦って、スプリガンが勝てば本当に認める」

ユージーンは無表情で言ったので、辺りは再び沈黙した

「げ、十五人かよ…リーファ、剣借りるぜ」

「え？」

リーファの腰から剣が引き抜かれた

久々の二刀をやるみたいだ

キリトを取り囲むように十五人の壁戦士タンクが槍を構えた

「やっちまえ！！」

言うなり、サラマンダーが突進するが、そこにはキリトの姿はない

「まずは二人だな」

突進の瞬間、キリトも残像が残るほどのスピードで二人を討ち取った

更に、再び地を蹴り、右手の大剣で、《ヴォーパル・ストライク》を放つ

渾身の突きはサラマンダーの鎧の隙間に的確に入り込み、一撃で体力を吹き飛ばした

「で、まだやる？時間の無駄だし、君たちも、デスペナルティが惜しいんだろ？惜しい奴は降参したほうが身のためだぜ？」

言い出しっぺ一人を残して全員降参した

「ふざけやがって!!」

サラマンダーは槍を構えた

「うおおおおお!!」

そのまま、羽根を使いながら加速し、突進する

キリトは二刀流最強のソードスキルをなぞっていた

「……《ジ・イクリプス》」

十四連撃

一撃で突進を止め、二撃、三撃でノックバックを起こす。四、五、六撃で武器破壊^{アイテムラスト}。最後の七連撃は高級な鎧を貫通して、HPを吹き飛ばした

「ま、ざっとこんなもんか」

「約束だ、貴様の言うことを不本意ながら信じよう」

ユージーンという言葉で締め括った

サラマンダーの部隊は身を翻して、飛んでいった

なんとも気まずい沈黙を破ったのはサクヤだった

「見事…見事！」

両手を高らかに打ち鳴らす

「すごい！ナイスファイトだヨー！！」

ケットシー領主である、とうもろこし色のウェーブヘアに、小麦色の肌を露出するような戦闘スーツを着たアリシャ・ルーが続いた

それを切っ掛けに、後ろの十二人、さらにサラマンダー達にも伝播し、大盛り上がりを見せた

「サラマンダー部隊は退くとしよう。だが、スプリガンの貴様。次は貴様と戦うぞー！！」

「望むところだー！！それに、俺の名前はキリトだ」

ニヤリと笑い合い、別れた

「すまんが、状況を説明してもらえると助かる」

リーファは事の成り行きを話す

「なるほどな。ここ何カ月か、シグルドの態度に苛立ちめいたものを感じていたが、そういうことが…ふむ」

「それで…どうするの？サクヤ」

リーファが訊ねた

「私はシグルドに直接あつて、領地を追放することにする…その判断が正しいかどうかは次の領主投票で問われるだろう。礼を言うよリーファ。執政部への参加を拒み続けた君が救援に来てくれて嬉しい。それにアリシャ、シルフの内紛のせいで危険に晒してしまつて済まなかつた」

「生きていれば結果オーライだよ!!」

「わ…私はなにもしてないよ。お礼なら三人にどうぞ」

「そつだ、そう言えば君たちは一体…」

二人の領主はマジマジとみつめる

「ねエ、キミ、スプリガンの大使ってほんとなの？」

「勿論大嘘だ。ブラフ、ハツタリ、ネゴシエーション」

「「んなっ……」」

二人は絶句した

「手札がシヨボい時は取り敢えず掛け金をレイズする主義なんだ」

アリシヤは悪戯っぽい笑みを浮かべた

「女の子二人もケツトシーにしては、知らないし……」

「あー、なんかの手違いで粹なり中立域に飛ばされたのよ」

「確かにアレはビビったな……ログインした瞬間空中にいたからすこい早さで落ちたし……体力減ったしな……あれはないぜ」

「ぷつ。にやははは……フリーならキミ、ケツトシー領で傭兵やらない？三食おやつに昼寝つきだよ」

アリシヤはキリトの右腕を取って胸に抱いた
上目遣いでキリトを見つめる

「おいおいルー、抜け駆けはよくないぞ」

サクヤも心なしか艶っぽい声

着流しの袖がキリトの左腕にからむ

「あー、領主のお二人さん、私たちはアルン目指してるから今は無

理よ
「

取り敢えず宿めといた

「ほづ…それは、残念」

「あ、そういえば、この会議って、最終的には世界樹攻略が目的だよね?」

「あ…ああ、そうだが」

「実は私たちもとある目的で世界樹を目指してるのよ。だから、その部隊に入れて欲しいわ。その為に…」

アイテムから無造作に重そうな袋を取りだし、テーブルに置いた

「資金の足しにしてくれて良いわ」

袋の中身を見たサクヤとアリシャが蒼白になるのがわかった

「に…二十万ユルドミスリル貨!?これ、一等地に城が立つぞ?いいのわ?」

「問題ないわ。キリトも も十万ユルドミスリル貨くらい持つてるから」

「すごい！これで大分目標額に近づいたヨ!!!ありがとう…えっど…」

あ、忘れてた

「自己紹介がまだだったわね。私はアルス。流しのプレイヤーよ」

「恩にきる。このような大金を持っていくのはぞっとしないな…アリシャ、早くケットシー領で会議の続きをしよう」

「そうだね。じゃあ、バイバイ！」

領主たちはケットシー領目指して飛翔した

「俺たちも行くか!!」

元氣良く進みだした…時間が遅いのでルグルーに帰って行った

同盟（後書き）

かなり何故か長くなりましたw
w

アインクラッド番外編リンドーアの武具店（前書き）

行き詰まりは番外編で解消です！！

…早くネタを考えねば…

アインクラッド番外編リンダースの武具店

咲魔side

四十八層のリンダースの町に来ていた

いま、私の背中には鎌が一振りしかないのは理由がある

キリト達と行った七十四層の《ザ・グリーンムアイズ》との戦闘で疲弊した漆黒の大鎌で、MOBを殲滅しながら洞窟内を駆けていた

転移結晶を忘れていたのだ

洞窟内を駆けていたのはいいのだが、立ち寄ったことがない洞窟だったのでかなり迷った

しかも、あるうことかプレイヤーが、MOBを大量に引き連れて、通称、《トレイン》と呼ばれている所謂MOBを擦り付けるといいうプレイヤーキルをしてきたのだ

ムカついて殺してやろうかと内心思ったが、やけに脚が速い上に、MOBに囲まれていたので、双鎌で迎撃したのはよかった

しかし、運の尽きというものだ

大量のMOBの中に、攻撃したらその武器の耐久値を大幅に下げる奴がいたのだ

まんまと引つ掛かり、漆黒の鎌がロストした

それで…今に至ると

キリトから、腕のよい技師を紹介してもらったのを思い出して、わざわざ四十八層に足を運んだのだ

水車が回る小屋で、煙突からはモクモクと煙が立ち上っている

看板には《リズベット武具店》と、ファンシーな文字で書かれている

因みに今は一人だ

シキは血盟騎士団に臨時で呼び出しを食らっている
というか、アスナちゃんから、団員の稽古を依頼されたのだ

木でできたドアをノックする

「すみませーん」

「あ、はい」

ドアを開けたのはピンクの短髪で童顔の女の子だった

どう見ても鍛冶屋には見えないから引き返そうかとおもったが、奥に工房が見えたので思い止まる

「キリトの紹介で来たサクマっていうんだけど…」

「あ、あいつ宣伝してくれてんだ！…っつと、すみません。お入り下さい」

中に入ると、壁一面に武器が掛けてあった

店買いのやつよりかなり質が良さそうな刀剣がずらりと陳列してある

「初めましてサクマさん。ご注文はいかがなさいますか？」

「うーん……オーダーメイドで頼みたいんですけど……」

「オーダーメイドだと多少高額になりますか？」

「んー、お金は別に気にしなくていいんですけど……」

アイテムウィンドウから、深紅の大鎌を取り出す

「この鎌と同等かそれ以上の鎌を作って欲しいの」

この鎌はモンスタードロップだ

なぜか、武器を創造するのは、茅場に悪いし、やる気もないのです
つとモンスタードロップか店売りを使っている

名を《ルビーアヴェンジャー》

おもむろにリズベットに渡したが、かなりの筋力を要求する鎌だと思
い出した

「うっわ…重っ…！キリトのやつより重いよ？これ」

なぜか、嬉しそうな表情だ

しかも、敬語がいつのまにか抜けている…まあ、気にしないけど

「いやー、重いねこれ。今は対抗できるインゴットがないねえ」
インゴットとは、武器や防具に使う金属の素材のことだ
勿論インゴットの質が良いほど強い武器ができる

「仕方ないわね…じゃあ、素材掘りに行くからこの鎌の研磨をお願いするわ」

「了解！っと…お代はキリトの紹介だから初回無料にしてあげる」

「お、ありがとね」

リズベットは回転砥石に刃をあてる

SAOに於いて、武器の研磨も入るが、スキル関連のことは、スキルに任せて適当にやればできる

例えば、裁縫スキルなんかは、同じところを何回か縫えば勝手に光って完成する

しかし、リズベットはそれを無下にする様子はなく、真剣な表情で研いでいる

「かつこいいな……」

変なことを呟いた

まあ、なんでも、真剣になる人間の顔ってかつこいいと思うよ…うん
やがて、研磨が終わると、よっこいしょと掛け声をかけて、重そうに持ってきた

「ほい、まいど」

「ん、ありがとねリズベツト」

「私はリズでいいわ。それに、インゴット取りに行くってどこいくの？」

「たしか、五十四層にインゴットの噂が流れてたから」

インゴットはあるらしいが、獲得はまだされてない
そこに真つ黒な獅子がボスとして出るらしいが、たかが五十四層ク
ラスだから攻略組にとっては楽しいが、肝心なインゴットが出現
しないという

「あー、あれね。よし、私も着いていこうかな」

「へ？」

リズはアイテムウインドウを確認しおえると、元気にいった

「私だってマスターメイサーなんですからね！！」

「なぬ…まあ、良いけど…」

やったあ！！と言うリズは店を閉めた

来た所は古代遺跡だった

外は熱帯雨林に囲まれていて、虫型MOBが大量にポップして、かなり不快だった

てか、虫型は小さすぎて鬱陶しいし、見るだけで不快だし、麻痺毒もつてて厄介だからムカつく

だが、熱帯雨林は抜けたので、あとは遺跡に入るだけだ

「リズ、ヤバかったら直ぐにポーション飲んでよね」

「了解了解っと」

「わかってるなら良いけど…」

遺跡の中に入り込んだ

なんだか、かの有名なインディ・ジョー　ズ宜しく、遺跡には大量の…アラームトラップがあった

しかも、ポップするMOBは全部ミイラや骸骨系統

「まったく…めんどくさいわねえ…死人は死んでなさい!!」

いつものごとく、首を集中して狙った攻撃はすべてクリティカルになる

「す…す…すいね…」

「そうかな…ソードスキルが苦手なだけなんだけど」

大量にポップするミイラや骸骨を蹴散らしていく

苦もなくどんどん奥に進んでいくと、大広間に出た

向かい側の通路から飢えた猛獣の唸り声がする

「来たわね…リズ、ヤバかったら直ぐに転移結晶使って逃げて」

「う…うん」

通路から出てきたのは体長が三メートルは優に越えているであろう漆黒の獅子だ

体は、やや灰色だが、鬣たてがみが黒光りする程艶やかである

尻尾は長く、針のようなものが付いている

眼は鈍く光っている黒…宝石みたいだ

長く伸びている爪も黒く、獰猛さを際立たせている

名を《The darkness heart》 暗黒の心

攻略組が居れば楽に狩れるといったボスだが、それはパーティーで話である

「さて、狩りの時間ね」

唐突に漆黒の獅子が牙を向いて突進してきた

牙が迫る瞬間、すれすれで避ける

下に垂らした深紅の大鎌が獅子の銅に突き刺さる

刃を引き抜いて首に鎌を振り下ろすが、流石にバックステップで避けられた

さらに、体勢を低くして尻尾を立てた

尻尾の針が長く伸びる

「リズ！！隠れなさい！」

次の瞬間、前方120度に針が飛ぶ

針と針の間をすり抜ける

そのまま前方にダッシュ

だらしなく垂れた尻尾を切断した

漆黒の獅子は咆哮して、爪を突き立てて来た

難なくパライに成功し、次こそ首に攻撃を当てる

クリティカルヒットのエフェクトが現れ、怒れる猛獣は吹っ飛んだ
流石に五十四層クラスのボスは、今の最前線のボスに比べたら桁違
いに体力が低い

もう、獅子は口からよだれを垂らして弱っている

突進からの横薙ぎは、獅子の全力に受け止められた

しかし、体術スキルのソードスキルを発動する

突きは獅子の心臓を貫いた

HPが消失する

慌てて首を切り取り、胴体は爆散した

「いやー、すごいわねえ。サクマ」

終わったと見て近づいてきたリズは不思議な顔で獅子の頭を見る

「その首…どうするの？」

「この眼球ってさ、結構綺麗よね？」

ニヤリと笑うと、右手で、獅子の眼球を抜き取る
リズが生理的に嫌悪を催したようなしかめた顔を見せる

《ダークネス・ハート・インゴット》

探していたインゴットは、ボスの眼球だったのだ

取り敢えず、二つとも頂戴した

リンダースのリズベット武器店に帰ってきた

「じゃあ、鎌でいいんだよね？」

インゴットが眼球であることを思い出したのか、リズは、少し引いた声で言った

「ええ、二個とも使っていいわよ」

「了解」と

まずは、炉でインゴットを溶かす事から始める
そして、赤く光る金属を勢いよく叩く
サクマはやはり、このリズの真剣な表情をかつこいいとか思いながら
らみいつていた

インゴットは輝きをまして、一際眩い光を放った

「おー…」

私は感嘆し、その変化を見守った

出来上がったのは、何ともシンプルでかつ、黒光りが美しい大鎌だった

「えーと、名前は《ブラツキーマインド》ね。初耳だから今のところ名鑑には載ってないと思うわ。試してみて」

右手を伸ばし、漆黒の鎌を握る

まるで使い手を選んだかのようにしっくりくる

「リズ、これ気に入ったわよー!!」

「本当!? やったね!!」

「さて、いい気分だし、リズには見せていっか」

「ん? なんのこと?」

おもむろに、アイテムウィンドウから《ルビーアヴェンジャー》を装備し、背中から抜く

「離れててよ?」

「うっ…うん」

慣れないソードスキルを発動する

《リパルスオブダーク》

十の連撃と三回の回転連撃を織り混ぜた双鎌最強のソードスキルだ
…使わないけど

「殺戮人形姫……」

「止してよ。その通り名は厨二臭くて気に入ってないのよ…」

「ぷふっ…あははは。なにそれ」

「うう…笑うなんて酷い」

そのとき、店の扉が開かれた

「おーっすリズ。研磨頼むぜ！！……お、サクマだ」

「うわっ…ブラッキー」

キリトだった

ん？リズの顔がほんのり赤いような…

リズは小走りで工房に入っていた

「……フラグメイカー」

「いきなりなんだよサクマ」

「自覚症状がないのはもう末期ね。救いようが無いわ」

「酷いな…」

何処までも鈍感なキリトだった

アインクラッド番外編リンダースの武具店（後書き）

リズベットは個人的に書きたかったので、番外編思い付いてよかったです

ヨッシン Heim (前書き)

何回も連続ですみません
ファーストもちゃんとしますよ…

ヨツン Heim

咲魔 side

「くしゅっ!」

リーファの可愛らしくしゃみが洞窟に響く

洞窟内には冷気が漂っていて氷柱だの雪だのが至るところにへばりついている

洞窟の名は《ヨツン Heim》

ALO最大級のMOB、《邪神》がポップするフィールドである

ルグルーに戻る途中、大きな都市を見つけた一行は、取り敢えずこの宿に泊まることにした

都市に入っても、ひとつこ一人居ないのに疑問を感じつつ、宿に泊まることにしたのだが

まさか、都市自体が超巨大ミミズ型邪神だと気づかず入り込んだのが運の尽きというもの

大きな口を開けた邪神に対抗する暇もなく飲み込まれた

一時は死戻りも覚悟したが、どうやらそれはなかったようだ

身体中にへばりついた邪神の唾液やら粘液やらにぞっとしながら辿り着いたのがこの《ヨツン Heim》であった

光が届かない極寒の地にて、ログアウトできずに右往左往しているのである

「うー寒っ…」

リーファが寒そうに身震いをする

「うー、邪神が出てこないかが一番不安よね…」

何度か雑魚MOBはポップしたが、難なく切り抜けることができた
だが、異様に複雑なフィールドを一時間以上歩き回り、流石に眠気が催し始めた

「リーファ、眠いなら着いててあげるから落ちていいわよ？」

「えっ！？いつ…いいよ！！」

「でも、見たところ学生なんでしょ？学校は？」

「全然大丈夫！！もう自由登校だから」

「そっか…じゃあ、眠かったらいつでも言っただけ。キリト、アンタは駄目よ」

雪を大量にすくいあげ、顔に引っ付ける

「ぎゃっ!?!」

キリトの胸ポケットからひょっこりとユイが顔をだす

「すみません…私がナビをしていたらあんなところに街が無いと言えたのに…」

「ユイは悪くないよ。広範囲索敵を頼んだのは私たちなんだしな。……それにしても…長いねえ」

複雑に入り乱れた回廊は時には同じところを回っているのではないかとさえ錯覚させる

だが、そこはユイが的確にナビをするので心配は要らないのだ

「あれ？索敵圏内に巨大なMOBが…二匹で戦ってる？」

「はい？巨大というと邪神かな…。でも戦ってるの？」

「はい、相互攻撃してますし、MOBの体力も少しずつへってます。

……片方が圧してますね」

んー、フラグクエでも立てたのかな…

今は構ってる暇はないんだけど…

五分くらい歩いたら、確かに邪神と思わしきMOBが攻撃しあっていた

片方は辛うじて人形と言えるだろう

一つの頭に幾つかの不気味な顔を持ち、巨大な腕で、攻撃しているもう片方はかなり珍妙な容貌をしていた

簡単にいうと、クラゲの体に象の頭がついているような形だ

戦闘はかなり巨人型が圧しているようだ

「ねえ…助けよう」

「「「なぬ?」「」」

リーファがとんでもない事を言い出した

え? 助けるって? は?

「ど…どっちを?」

おそろおそろキリトが訊ねると、さも当然といったふう answered

「勿論、いじめられてる方だよ」

途端進み出したリーファをキリトが制止する

「待て。あのフォルムに意味があるとしたら…」

フォルム…触手が沢山ついてて、ぶよぶよしてて、頭が象で、キモくて…クラゲ
ああ、クラゲ

「ユイ、近くに湖とか無いか?」

「はい、北に五百メートル進んだ所に地底湖があります」

キリトはニヤツと笑うと言った

「みんな、走るぞ!!」

キリトは巨人型邪神に、ソードスキル…といってもシステムではないが、硬直が短い《シャープスネイル》を放った

巨人型はギョロツとキリトを見る

「こつちだ!!」

全力で走り始めると同時に巨人型邪神も大股で追いかけて始めた

「きゃあああああ!!」

リーファが涙目に成りながら必死で逃げている

私たち三人の敏捷力パラメータが異常に高すぎて追いつけてないのだ

私は速度を落とした

「よっこいしょ」

「ひゃっ!?!」

所謂お姫様抱っこなるものでリーファをヒョイと持ち上げ、そのまま全力ダッシュでキリト達に追いついた

尚も四つの腕の剣を振り回しながら巨人型邪神が追いかけてくる

ちよつとした広間に出た

真ん中にはかなりの大きさの地底湖がある

「リーファ!!ちよつと水にダイブするよ」

「え?」

まるでカタパルトから飛び出すように回廊を抜け、そのままの勢いを維持しつつ地底湖にダイブした

「ちよっ！？ひいいどおひいい！？」

寒すぎて死にそうだ

まもなく、巨人型邪神も追いかけてきて、湖に飛び込んだ

なおも追いつがる邪神から逃げ惑ううちに、先程の象クラゲ型邪神が追い付いた
そのままダイブ

つまり、そういうことだったのだ
もともと象クラゲ型邪神は考えれば解るが、水棲タイプだったのだ
陸地では、攻撃に使う筈の触手の大半を移動に使わなければならなかった

しかし、水に入ると、まさに水を得た魚：いや、クラゲ
プカプカと浮いて、触手のオールレンジ攻撃を始めたのだ

代わりに、巨人型邪神は泳ぐのに手一杯で反撃が出来ず、数分後爆散

これは戦いたくないわね

強さ的にも…絵的にも

「さて、このあとどうするのよ…」

この瞬間にクラゲにタゲられて無いたことが奇跡だし、タゲられない
とは言いがたいし

その瞬間、象クラゲは四人に触手を伸ばしてきた

やばい…本気でやばい…絵的に

「げっ…」

飛び退こうとしたキリトの耳を今まで半分空気だったユイがきゅつと引っ張った

「大丈夫ですパパ、この子怒ってません」

子おおお！？と突っ込もうとしたが時既に遅し…絵的にヤヴァイ触手に絡まれながら象クラゲ型邪神の背中に乗せられた
邪神は満足げに声をあげ、地底湖に沿って前進していく

クラゲ型邪神の背にて一時間半

リアルでは午前三時半である

正直リーファが心配である

キリトはどうでもいいとして、夜更かしは健康に良くないからね
アミユスフィアだから運動はないけど、脳がフル稼働してるからだ

そんなことを考えてる私を尻目に、キリトと はこっくりと船を漕いでいた…キリトは爆睡だが

リーファと目が合った

ニヤリと笑う

どうやら考えてることは一緒らしい

邪神の背に乗った雪を両手ですくいあげ、首筋と服の間に投下

「ひゃい！？」

「ぬあっ！？」

あ、悲鳴可愛いn…って…いかんいかん

「うー、なにすんだようさくm…アルス」

「寝たら落ちるわよ？」

「うおっ勘弁」

キリトは性懲りもなくまた微睡みに…

「どっせい！？」

「ぐはあっ！？」

キリトの体がすっぽり収まるくらいの雪玉を叩きつけた

キリトのHPが三分の一減少する

「あのさーこの子に名前つけない？」

この子について…うん、キモクラゲ邪神だろうか…
名前ねえ…

「名前つけんのか？このゾウムシだかダイオウグソクムシだか奇妙

な邪神君に」

「ちょっとまってよ。なにそのダイオウなんかかって…聞いたことないしクラゲじゃん!!」

するとキリトはニヤリとして続けた

「え?リーファ知らない?別名ジャイアント・アイソポッド。深海の底にいる、これくらいのダンゴムシ」

とって、両手をピンと伸ばすくらい広げた
そんなダンゴムシが出たら堪ったもんじゃない

「リーファ、キリト落つこととして良い?」

「うん」

即答した

「酷いな…てかユイ、なんかこっからした真っ暗だけどどうなってるんだ?」

クラゲ型邪神はいつのまにか飛んでいた
ずっと乗ってて気づかなかったが底が見えないくらい高いところに
居るみたいだ

「私がアクセスできるマップデータには、底部構造は定義されていません。簡単に言えば底なしですね」

「そりゃまた…早いとこ抜けたいものだね」

の言う通りだ…万が一足を滑らしたら全口スト確定だからね…

「で、話しは戻すけど、名前どうするのよ」

「じゃ、トンキー」

キリトにしては、ファンシーな名前だ
どっか頭打ったのかな

「……あんまし、縁起いい名前じゃないね」

リーファが呟くと、キリトはバツの悪そうな顔をした

「あ、ああ…頭に浮かんできたけど…そうだったな」

「何ぞ？」

まったくついていけない

「ああ、絵本で有るんだよ。戦争の末期、動物園にいた象に処分命令が出されたんだけど、象は利口で、毒餌は食わずに餓死したって話」

絵本なのに殺伐としてる…子供泣くよ？それ

「まあ、いいわ。それにしよー！」

リーファが押しきって決まった

私としては、どうでもいいのだけど

「トンキーさん、はじめまして!!よろしくおねがいますね!!」

ユイの声が届いたのか、トンキーはなんとも奇妙な声をあげた

トンキーはひたすら北上していった

どちらにしるアルンは同じ方向だからいいのだが

そのとき、不意にトンキーが動きを止めた

降りろってことかしら...

「おい、上を見てみるよ!凄いで」

巨大な氷柱が伸びていて、くりぬいたように何らかの構造があるようだ

あれが一つのダンジョンだとすると...みごとにクエストフラグを立てたわけだ

行く暇ないんだけど

「パパ!!東からプレイヤーが接近中です!!一人...いえ、後ろに二十三!」

二十四人:明らかにボスを狩るくらい的人员:いつたい...

すると、到着したのは男性

白い肌ウンディーネに水色の髪:水妖精に違いない

「あんたら、その邪神、狩るの？狩らないの？」

「狩らない…だが、引いてくれないか？この邪神は、俺達の友達なんだ」

キリトが叫ぶ

「友達？NPCじゃあるまいし…ヨツンヘイムに来てまでそんな奴等に会うとはな。だいたい、単調なアルゴリズムで動いてるMOBを友達呼ばわりとは」

「頼む！！」

「駄目だ。十秒待つから退け。十秒たったら広範囲魔法が放たれる」

普通、ここまで待っていてくれるのすらイレギュラーなのだから、それ以上の要求は厚かましい…か

「退こう…みんな」

リーファが悲しげな声で言った

直後、魔法が放たれる

どんどんとンキーのHPは削られていく
キリトの胸ポケットの端をキュツとつかんで、綺麗な顔をくしゃくしゃにしながら、ユイが泣いている

まったく…

「行くわよ」

「行くぜ」
「行くよ」
「行こう」

見事にハモったが意も介さず、先ずはメイジ隊を削ることにした
鎌を担いで走る

スレ違いにクリティカルを四、五人お見舞いするが、防具が良いのか、はたまた武器がちゃちいのか、HPの六割削っただけだった
しかし、後ろからきた の槍が心臓を貫き、HPを吹き飛ばした

「しっ…正気かよ!?!」

「……さあね!?!」「……」

メイジ隊も馬鹿ではなかった

邪神相手に組まれたエリート軍団であるから当然といえば当然。 範囲魔法を高速のショートレンジ集中型魔法に切り替える

ちやちな鉄の鎌に属性付加の初期魔法を掛ける

魔法の属性値が60%、武器の属性値は10%

相殺しようにも、ソードスキル以上の速度で重い鎌を振り続ける必要がある

しかも、高速なので、必ず撃ち漏らしがあり、確実にHPを削っていく

魔法の集中放火に、HPもMPも尽きようとしてる時だった

トンキーが悲鳴に似た叫び声を上げたのだ

トンキーはクラゲというフォームを廃していた

羽根が生え、地上でも触手が使えるようになった

さらに、綺麗な声が響き…

「んなっ！？HP全回復！？トンキーにそんな能力あったの？」

「アルス！！ウンディーネ水妖精にディスプレイが！」

ウンディーネ水妖精に掛かっていたスペルがディスプレイ無効化されたのだ

さらに…

「アルス、伏せろ！！」

キリトの声に従い伏せた頭上に電撃が走った

トンキーが触手の先から放電し、ウンディーネ水妖精を殲滅していく

十人が死んだ

「ちっ！！撤退、撤退だっ！！」

口々に悪態を吐くウンディーネ水妖精の精鋭部隊は踵を返すと、即座に撤退していった

辺りに残ったのは静寂だった

「……で、これからどうするんだ？」

キリトがボソリと呟く

背後からトンキーの触手が…

「きゃああああっ!?!」

口々に悲鳴を上げ先程と同じようにトンキーの背に乗った

「アハハツアルスの悲鳴可愛いな」

「うっ…五月蠅いわよ!?!」

トンキーは飛翔を開始した

先程の氷柱の一番天辺には何やら光るものが…

「うがっ!?!」

リーファが乙女らしからぬ悲鳴をあげた

「どっ…どうしたんだ?リーファ」

「あっ…あれ、《聖剣エクスカリバー》だよ!そうか、このクエストはアレを取るための奴なんだ!?!」

「……なぬ」「」

又してもハモった

「あー、でもアレじゃあ取りに行けないな…もっと仲間を集めない」と

「あー、君、未練たらたらし過ぎ」

トンキーの背に乗って移動すること十五分、長い長いヨツンヘイムの旅は終わろうとしていた

トンキーに階段まで送ってもらい、一気に駆け上がる
リーファは が担いでいった

出たのは巨大な都市^{アルン}

「来たあああああああ！」

「来ましたね！！ほら、パパもリーファさんも喜びましょう」

苦笑混じりだったが、ユイの案内で、高級のホテルに泊まることにした。お金なら私達が払うことにしたが、こんどキリトには返してもらおう…利子付きで

ヨッシン Heim (後書き)

やーっと終わった!!

正体（前書き）

なんか、更新が不定期過ぎてごめんなさい

正体

咲魔side

朝起きて、まどを開けると雪が薄く積もり、冷たい朝の空気が私を包んだ

寝たのは二時間前

とてもじゃないが起きてられない

何故起きたか、そんなのは決まっている

日曜の朝と言えば特撮戦隊シリーズと相場が決まっている

必死に眠気眼に冷や水をぶっかけ、目を覚ます

和人はまあ、いつも寝坊だけど、毎日鍛練を欠かさないスグまで起きてないのはいやはやどうした事なのか

いや、どうでもいいか。今私がすべき事は仮面ライダーを見ることだ

特撮とかアニメはストーリー的にも面白いが、まずアイテムやウエポンの設定が良いのだ

私の創造の基礎にも繋がるしね

大方楽しんで見てるんだけどね

だいたいこのままポケンやら遊戯やら色々流して見ていくつもりだ

テレビ鑑賞をしていると、時間はとっくに九時代を回っていた階段から音が聞こえる

「お、おはよ咲魔。朝から早いな」

「仮面ライダーは一日の活力よ和人」

「飽きないな。昨日遅くまで付き合ってくれてサンキュな」

「キリト（・・・）があんな畏に引っ掛かるせいよ」

和人は苦笑して、バスルームに向かった
さらにテレビ鑑賞を続ける

和人が戻ってくるのと同時にスグが眠気眼を擦りながらふらふらした足取りで二階から降りてきた

「おはよ、スグ。眠そうだな。何時に寝たんだ？」

「おはよー。えっとね、四時くらいかな？」

四時くらいか…私が寝たのとあんまり変わらないわね

そつえば、昨日の夜にALLOで良いことがあったって言ってたわね…

「子供は早く寝ないと駄目だぞ。俺が言えたことじゃないんだけどな」

「子供じゃないもん！ー！」

「そつえば、遅くまでなにやってたんだよ」

「えつと…ネットとか？」

何故疑問形…

和人が絶句している

そういえばスグはネットに弱いとか言ってたからネットで夜更かしはあり得ないからね

とにかく朝食をとることにした

日曜は何がなんでも私が一番に起きるから私が料理当番である

ご飯大盛りに、豚汁に、ハムエッグ。そして、サラダだ
なぜご飯が朝から大盛りかって？

朝飯は一日のエネルギー源であって、活動するのに炭水化物を糖分に分解して、エネルギーにする必要があるし、スグは剣道で、和人はスポーツジムでリハビリをしてるからそれ相応の量を調整してるし、思うが、夜にガツツリと食べるのは特にスグ。女子にとって自殺行為に等しい。昼間は活動でエネルギーを燃やしてるから良いもの、夜は基本寝るだけであって、使われないエネルギーは体脂肪になって、肥満の原因になるのだ。だから、朝食を抜くなんぞ言語道断なのである

長々と回想をしてしまったがまあそんなもんね

「うう…咲魔、やっぱり朝から多いよ…」

「スグ、朝食へなくて、お腹空いて、間食を食べる生活したら確実に肥るわよ」

スグの顔が一気に青ざめて、ががつと食べ始めた

「そついえばお兄ちゃん、今日はどうするの?」

「うーん、昼から約束があるんだよな…それまでアスナン所行くよ。咲魔も行く?」

「……………行かない。エギルん所で酒飲むわ」

須郷と会ってから、病院に行くことを躊躇い始めた

それでも和人は一人で通いつけている…

須郷さえ居なければ…………

「そつか、飲み過ぎんなよ」

和人は私の気持ちを知ってか知らずか、いろいろと、気を使ってくれてる気がする

エギル…アンドリユー・ギルバート・ミルズが経営する喫茶店、《ダイシー・カフェ》の鈴付きドアが開き、店主が顔を見せる友人だからでもあるが、この店は、なかなか居心地が良いのだ。なんだか、アインクラッド五十五層の《アルゲート》の裏通りにあるエギルの店に来たのと何らかわらない

因みに、シキは和人とスグに着いて、アスナのお見舞いに行っている
夜間賑わうこのカフェは、昼間はガランとしていて、奥さんと交代で番をしているらしいが、日曜はエギルが出る
ドサツとカウンターに腰掛ける

「よう、今日はどうした？」

SAOと容姿が変わらないので、スキンヘッドの巨漢である。しかし、キリト改め和人は、二年間の昏睡で筋肉やら何やらの機能が低下し、もやしを更に極めていたが、エギルはまったく変わらない……一応リハビリはしたらしいが、一週間で終えたと聞く。とんだ公式チートが居たものよね

「……スクリユードライバー」

「また酒かよ、あいにく、未成年に出す酒はありませんよ」

「っさいわね……これが飲まずに居られる訳がないでしょ……！」

エギルは店の奥に入って、なみなみとグラスに液体を注いだ

「……スクリユードライバーはやれんが、一応酒だ」

ドンと、ピンク色の酒が前に置かれる

アルコール度数は一パーセント未満だと思われる

「で、こっちは新しい……解像度を増した写真が手に入ったぜ……極秘な」

毎回エギルがどんなルートで情報を入手しているのか気になって仕方がない

やはり、スクリーンショットでは解像度が良くはないが、もう間違えようの無いくらい、アスナのAvatarだと認識できる

それは、世界樹の枝に黄金の鳥籠が吊り下げられ、アスナはデジタルの世界に監禁されていた

「こつちだつて…世界樹の真下まで飛んできた…でも、世界樹の中はGM以外侵入不可…ハッキングで調べたわ」

「ハッキングできるのかよ…紙防御だな。取り敢えず、グランドクエストをやってみてくれ。動画撮影しながら」

動画撮影は…まあ、証拠でしょうね

世界樹の中が侵入不可だと、グランドクエスト自体手の届かない人參と何らかわりない

そこまでして調べられたらこまるものが有るってことになるからね
須郷が逃げたら…この手で…

「あー、まあ、犯人は取り敢えず解ってるから、警察に頼んだ方が良くねえか？」

「無駄よ、須郷が相手となると、企業全体を敵に回すのと一緒にだか
らね。しかも、表の顔は好青年よ。警察に頼るのは阿呆ね」

まあ、愚痴った所で何も始まらない訳だけどね

「キリトは知ってるのか？」

「知らないと思うわ。教えないし。それに、可能性がないわけじゃないわ」

「そうか、なら俺はレクトプログレスについてもっと調べとくぜ。
頑張れよ《殺戮人形姫》」

「うるさいわよ壁」

「ひでえ!?!」

場所は変わって中立都市^{アルン}の高級宿屋で、リーファ、キリト、との待ち合わせ時間に覚醒した

リーファが暗い顔でログインした

「どうしたの？」

「私、ふられちゃった…」

ああ、恋愛ね

「リーファみたいな器量よしをふるなんて罪作りな男ね。死ねばいいわ」

「うっん、もういいの。キリト君達を待とう」

気まずい固有結界を破り、キリトと がほぼ同時にログインしてきた

「よう、アルスにリーファ、待った？」

「大丈夫だよキリト君。さあ、君の目的を果たしに行こう」

なにやら気になるが、リーファが言いたくないなら追求は止そう

アルンから世界樹まではそう遠くないが、キリトは鬼気迫る形相でダツシユする

遂に、世界樹の真下に来た

これまでに見たことない程巨大な樹だ

地上から見上げてても枝一本見えないのだ

「パパ！！確かにママのIDがこの上に有ります！！」

「解った！！ユイ、しっかり捕まれよ！！」

私が制止するより早く、キリトはロケットブースター以上の加速で垂直飛行する

「ちよっ…ちよっと待ってよ！キリト君！！」

「待て！リーファ」

がリーファを制止する

眼で会話をし、私がゆっくりと垂直飛行する

やがて落ちてきたキリトを抱え上げ、地表から二メートル位の位置に降下すると、キリトを地面に叩きつけた

キリトのHPバーが眼に見えて減る

キリトを立ち上がらせ、胸ぐらを掴んだ

「あなた、わかってるでしょうね。あの距離から落ちたら確実にあんな死戻りなんだからね！！」

キリトはうつむいたままだ

「アルスさん、上から端末を使えばGM権限を行使できるIDカードが落ちてきました!!」

……まあ、十中八九アスナちゃんがやったんでしょっかね…
ん？待てよ、GM権限を行使できるIDカード…
これは…いける

「キリト、次無茶したら殺すわよ」

「……わかってるよ」

なんとなく気まずい空気になったリーファとであっだが、四人で（……）無事クエストの入り口にさしあたった

「パパ、今までの情報から類推すると、かなり不可能に近いですが…」

「そんなときはぶつかってみるしかないさ。失敗しても命まで取られる訳じゃない」

その会話にちょっとした違和感を感じ始めた

三人が突入したのだが、やはり、リーファも心配になって着いてきたのだ

世界樹の中とは思えないくらい、神聖な廻廊を進んでいくのだが、やたらとMobのポップが早い

それも、白銀の甲冑を纏った、妖精型かつ、ほかのどのMobより獰猛に襲いかかる

Mobの津波はどんどん四人パーティのHPを着々と奪っていく

全員が囲まれてしまう…

「パパ、もう無理です！四人の力だったら戻れますから、一旦戻りましょう！」

だが、キリトは聞く耳を持たず、勇猛果敢に白銀の甲冑を薙ぎ倒していく

「なっ!?!」

一瞬の油断でキリトのHPバーが吹き飛んだのだ…

「キリトっ!?!」

そっちに気をとられた の背後から胸にかけて、深々と貫通属性の槍が刺さっていた

削りダメージでどんどんバーが削れていく

「リーファ、撤退！」

窓から三人を抱えて飛び降りた

すかさず復活アイテムをジェネレートし、リーファに握らせた
どうせこの高度じゃ、羽根を広げても間に合わないし、落ちたら確実に即死だ

のHPも残り少ない

私は、三人をかばって死んだ

爆散するとほぼ同時にリーファが《世界樹の雫》という甦生アイテムを使う

「ありがとう、リーファ。…でも、いいんだ。これ以上迷惑はかけたくない」

「迷惑なんて……私……」

キリトはまた身を翻した

「馬鹿キリト！！一人で行ってなんになるのよ！私達が着いてきた意味すら拒絶するわけ？」

ウインドウを操作する

デュエルをキリトに申し込んだ

形式はHP全損モードだ

「構えなさい。正してあげるわキリト」

リーファが涙目で訴えかけてきた

「もう……やめてよ。いつものキリト君に戻ってよ……私……キリト君のこと……」

「リーファ……ごめん。俺は、会わなきゃいけないんだ……もう一度……」

次の言葉が爆弾であることも知らず……

「もう一度……アスナに」

リーファは驚愕の表情を露にした

「……………え？」

「俺の捜している人だよ……………俺はそのために……………」

「だっ……………だって、その人は……………お兄ちゃん……………なの!？」

「え？スグ……………直葉？」

リーファは、……………いや、スグは、直感的に私達も解っただろう
それだけに、驚愕も大きい

だが、直葉は血の繋がっていない兄を愛していた……………しかし、兄には、
恋人が居たのだ
だから、ALLOに居る間は、キリトに心を寄せていた
次第に、現実にも於いても仮想にも於いても、罪悪感はあるが、どん
どん世界が色ずいてきたのだが……………

思いもよらない結末がリーファの心に突きつけたのだ

「酷い……………あんまりだよ……………」

うわ言のように、呟き、SAOの攻略組もこれはないというくらい
なスピードでウィンドウを操作して、ログアウトした

「クソキリト……………アバターは私達が護るから早く行きなさい!……………」

キリトは仮想世界から出ていった

正体（後書き）

やっべー。シリアス多すぎる〜
ギャグとかコメディをください！！

最愛の……（前書き）

いやー、遅くなってごめんなさい
なかなかネタが思い付かなくて…

では、どーぞ（＾・＾）ノ

最愛の……

咲魔side

キリトがログアウトしたのを確認して、宿屋に連れていく
宿屋の二人部屋を二つ借りた

ロビーに向かい、暫く と二人で羽を休めることにする

コーヒーを注文して、落ち着くことにする

砂糖を大量に投下

さらに、ありつたけのミルクをぶちこむと、テーブルに凄絶に溢した

「アルス、それ塩」

「……………」

sugarではなくsaltだったようだ。頭文字がsだから間違えた

続けて塩を大量に投入した

「何？飲みたいの？」

「いや、そうじゃなくて……………」

「遠慮は要らないわ、ほら」

ずいずいと向かい側のテーブルに座る に渡した

「やっぱキリトのことが不安なんじゃ」「飲みなさい」……「はい」

はマグカップを小さな手で持ち、微妙な顔をして飲んだ
直後に盛大にむせたのだが

咲魔は苛立っていた……とは言っても、何にたいして苛立っている
のかが解らない

なにもかも、キリトのせいよ……まったく…

根拠のない考えがぐるぐると頭の中で回転していた

「ほーら、シャキツとしなよ咲魔。らしくないなあ。まさか、キリ
トとデュエルできなかったから？」

マグカップをガタンとテーブルに置いた。 がビクツと反応する

「表に出なさい、鬱憤を晴らしてあげるわ。悦びなさい」

「悦ばないよっ！…！てか、やっぱりそのシチュエーション？」

「あら？私の鎌に首を飛ばされたいんじゃないの？」

「何処の変態だああああ！…ああもう怒った！ぶっ飛ばしてやる
よー」

二人が牽制しあいながら宿屋をでると、自動的に料金が差し引かれる
出来るだけ人目のつかないアルン郊外の安全地帯で降りた

アルスがデュエルメツセージを送ると、も即座に承諾した
双方、武器を構える
アルスは鎌を二本ポップして、肩に担いだ

デュエル開始時間が刻一刻と迫ってくる

「そう言えば、本気の死合は とは初めてね。……殺しがいがある
わ。ひざまづかせてあげるわ」

「ふうん。なら、勝った方の言うことを聞くつつルールで」

「上等」

がスウツと眼を細めて槍を構える。完全戦闘モードだ

《DELL!!》

目の前に戦闘開始のウィンドウが出現すると同時に双方、地を蹴った

和人／キリト side

アルンから直接ログアウトして、現実世界の自室で覚醒した俺は、
様々な思いを交錯させながら何故リーファ……直葉が傷ついている
のか考えていた

確かに、俺を二年間インクラッドに閉じ込めたナーヴギアを使用した
したのは俺が悪い…だが、どうもそれだけではないような気がした
なにか、直葉の思いを見落としているような…
胸の中がざわめく

心臓はバクバクと鼓動をしているが、それでも俺は、コンコンと直葉の部屋のドアをノックして、努めて抑揚を持つ声で囁いた

「スグ、いいか？」

だが、愛する妹の返事は早かった

「やめて！！開けないで！！……一人に……しておいて」

正直、その言葉は胸に突き刺さる。だが、俺は諦めずに続ける

「どうしたんだよ、スグ。俺もそりゃ驚いたよ。……また、ナーヴギアを使ったことを怒ってるのか？それなら謝るよ。でも、どうしても必要だったんだ」

渾身の力を込めて言った筈なのに、最後になるにつれてか細い声になるのがわかった

「違うよ、そうじゃないの」

俯いてた顔がふっと前を向く

スグが、ドアノブを回し、ドアが開けられた

そこには、今にも泣き出しそうなスグの姿があった

「あたし……私……」

スグはもう堪えきれないといったふうに涙を溢す

「私……自分の心……を裏切った。お兄ちゃんが好きな……気持ち……を裏切った」

嗚咽混じりの声が深々と俺に突き刺さる

「全部わすれて、諦めて、キリト君のことを好きになろうと思った。うづん、もう……もうなつてたんだよ……なのに……」

「……え」

俺は蚊の鳴くような声で絶句した

「好きって……俺たち」

「私は……知ってるんだよ……」

「え？」

一瞬、スグが何を言っているのか分からなかった。だが、次の言葉が明確にする

「私とお兄ちゃんは、ほんとの兄妹じゃないってこと、二年も前から知ってるの……!」

「なつ……」

俺の顔から血の気がひいていくのを感じた

俺は、小さい頃ネットワークを駆使して、自分が桐ヶ谷家の人間でないことを知った

知ったのだが、別に気にする風もなく、妹には隠して今まで生きてきたのだ

「お兄ちゃん、知ってたからずっと私を避けてきたんでしょ？でも、こんなのなら避けられたまんまの方がよかった！！」

直葉が大きな目で俺を睨んだ…

実は、その事を知っていたからスグを避けていた訳ではない

確かに、桐ヶ谷家の人間でないことは知っていた。だが、俺は生来人に会うたびに、《この人は誰なんだろう》という感覚を抱いてしまっ… S A Oでの仲間との交流が、それを取り払ってくれたのだが

「……………」

俺は絶句して何も言うことができない

「もう、お兄ちゃんにもキリト君にも、好きな人が居たんだもん…
…こんな…こんなことって……………」

俺は正直、スグに土下座したい気分だった。なにがS A Oから解放されたらスグとの交流を深めようだ…俺は…自分の事しか考えられてないじゃないか
俺も泣きたい気分を必死に堪えた…こんなんで泣いたら…卑怯じゃないか

須郷に会って、どん底に落ちていた俺を必死になだめてくれていたスグに申し訳が立たない…

あの時からなのかな…スグが俺を好きになっただって…それなのに、自分の事しか頭に無かった…兄失格だな

それからのスグの言葉は、放心状態だった俺の耳に入ってこなかった

スグが部屋に戻っていく。ドアの鍵を閉めた時、少し心が痛かった俺はスグの部屋の前に座り込んだ
ずっと考えていた。俺がスグに今しなければならぬこと……

気丈に振る舞うことでは断じてない。だが、暗い雰囲気を通り切りたい。

スグに……本当の気持ちをつづけたい

ふと、ある考えが頭に浮かんだ……浮かんだ瞬間、それだけの事しか頭に浮かばなくなった

「スグ、アルンのバルコニーで待ってる」

動揺して、声が震えるのを必死に耐えながら、努めて平静を装って、声を掛けたが、勿論返事はない
だが、きつと来てくれると信じて……

side

「たあああつ！！」

地面を蹴り、その反動で前に飛び、槍で突進する

アルスは槍に当たる直前に体を反らし、背中に鎌を振り払う

だが、それも予想済み。そのまま地面にダイブして、鎌を蹴り上げる

アルスは蹴られた衝撃で後ろに飛び、投剣スキルを発動させ、アイスピックを投げつけた

咄嗟のことに反応が遅れ、掠りはしたが、HPが数ドット減っただけで問題ない。というか、アルスも体術をくらって同じくらいのダメージが入る

今度は、アルスがいつのまにか零距离に接近していた
鎌の切り上げを槍でいなす

そのまま切り払いをするが、もう一方の大鎌が槍をパリィする

「やるねえ」

「こそねっ!!」

鎌が左右から迫る

棒高跳びのように槍でジャンプして、避けた

そのまま、槍を叩きつける

「うりゃあっ!!」

アルスは硬直していたので体が一瞬動かず、HPがごっそり吹き飛んだ…が

「隙有り」

下げられた大鎌が振り上げられ、ダメージがごっそりと入る

槍ごと斬られたので、槍は耐久力が消滅し、爆散した

ついでに斬られた瞬間、体術を使い、鎌の一番脆いところを打つ
二つの鎌も爆散した

お互いHPは危険域レッドゾーン

次の攻撃で決まる…

アイテムウインドウから予備のモンスタードロップの片手直剣を装備した

アルスもモンスタードロップを持ってみたいだ…同じぢゃちな片手直剣

「いくよ、咲魔」

「返り討ちにしてやるわ、（・）」

先手は私だった

縦切りを放つ

咲魔は的確にパリィをする。そのまま蹴りが飛んでくるのをバック宙で避ける

着地と同時に目の前に咲魔が回転切りを仕掛けるのをパリィしたが、足場が悪く、たたらを踏む

「ちいっ」

咲魔の最速の突きが炸裂する。右にかわしたが、左腕に掠り、HPが数ドット減った

倒れながら零距离でアイスピックを投げる

咲魔の恐るべき反射速度に避けられるが、完璧ではなく、あちらもHPが少しへる

お互い、弱攻撃で爆散する……緊張感が漂う

二人の反応は同時だった
たたらを踏んだ足を無理矢理建て直して、地面を蹴る
咲魔の縦切りと、 の降り上げが同時に炸裂し、一瞬のタイムラグ
もなく、完璧にリークしたタイミングで爆散エフェクトを発した

キリト side

バルコニーですっと考えていた。

確かに誘ったのは俺だ。だが、明確な考えがあつてスグに来るよう
に言った訳ではない。ただ、剣で語り合えば、わかりあえると勝手に俺が思つてるだけだ

バーチャルの、ただの脳に直接電気信号が送り込まれて、それを見るだけの所詮だと言いたければ言えればいいさ。

そうだ、普通は《ゲーム》でなければ楽しむことはできない。

その考えからすると俺はゲームをしてる訳じゃなくて、バーチャル
ワールドで生きている（・・・）ことになる。

馬鹿馬鹿しい考えだ。ただの視覚情報だとさっき言ったではないか
でも、《ゲーム内で剣で語り合う》と言う発想は明らかにゲームを
楽しんでいない

俺が思うに、大半のネットゲーマー第2の現実ではないだろうか。

いや、今は問題じゃないか、なんとも哲学的な発想になったな

俺は、きつとスグなら来てくれると信じている。根拠なんてない。
だから、その時まで待つてる。

ふと、足音が聞こえた

「…………お兄ちゃん」

リーファ…スグだ。リーファの金髪が風に揺れた。

金髪だし、プロポーション的にも現実の直葉の面影が残ってる気がした

「スグ…………」

「お兄ちゃん、試合、しょ」

「ああ、そうだな。今度は全力だぜ」

「私も全力で闘う」

リーファが先に腰の長刀を抜刀した。剣道選手らしい揺るぎない中段の構え。

対する俺も、筋力重視の体験を背中から抜いた。

腰を落とし、半身になって、剣先を地面すれすれまで垂らして、力を抜いた構え。

そう言えば、スグはこれを見て苦笑してたな…

無造作にウインドウを開いてデュエルを申し込んだ。

《体力全損モード》

SAOでは絶対にあり得ない…いや、無慈悲な犯罪者達が粗悪な手段として使ってたか…だが、自分が使うとなるとまた感慨を感じる

《DELL!!》

デュエル開始と同時に羽根を羽ばたかせ、突貫しつつ切り上げる。リーファは剣道で鍛えた反射神経と勘を駆使して、俺の一閃を軽くいなし、面打ち。

こちらもお得意のサイドステップで避けた

お返しに《バーチカル・スクエア》ソードスキルを繰り出す

片手剣の連続四攻撃を見事にかわしきつたりリーファは得意の籠手面をお見舞いするが、下に垂らされた大剣がはねあがり、長刀を的確にパリイする。

二人の飛行戦は既にバルコニーから遠ざかって、見る人によっては、二つの光源がぶつかり合っているように見えるだろう。それくらいハイスピードかつハイレベルな試合なのである

キリトは笑みを浮かべていた。

このスリルある闘いこそが、このALLOの真骨頂なのだろうと感じていた。

二人でワルツを踊っているかのような優美かつ盛大な闘いに心を奪われたのだ。

だが…闘いに水を注すような気持ちがある…

二人のHPは激しい攻防で、既に危険域ギリギリでどうにか持ちこたえていた。

二人は次の一撃が最後だと確信して構えた

キリトは《ヴォーパル・ストライク》 単発重攻撃の構え。対

してリーファは大上段の構え

距離はそこそこあるが、飛べるALLOにとって距離はないようなものだ。

これで…

地を蹴った

お互い外すことはないタイミングだった

不意に俺の手から大剣が落ちる。

偶然などではない。意図的なものだった。

キリトは分かっていた…こんなことでリーファ…直葉が許してくれる筈がない…いや、怒るだろう…と。

リーファを見た…といつても、既に武器があたってもおかしくない距離だ…。

そう、リーファの手にも武器がなかった

そのまま空中で激突した

「うわぁっ!?!」

「きゃあああぁっ!?!」

この状況でHPが無くなってないことは奇跡だろう

俺がリーファに覆い被さる形になった

「な……どうして…」

「ごめんな直葉、俺はスグに謝らなくちゃいけない」

「お兄ちゃん…」

「でも…」

リーファの手をとって起き上がらせた

「俺は行かなくちゃいけない。ごめんな」

「ううん、わかってるよお兄ちゃん。私、待ってるから」

「ありがとう、スグ」

キリトとリーファは木漏れ日の中、抱き合った

最愛の……（後書き）

なんと、リーファは直葉だったんだぜ！

SAOファンは勿論知ってると思いますがねWWW

そして大空へ（前書き）

遅くなって申し訳ない…では、どぞどぞ（＾・＾）ノ

そして大空へ

咲魔 side

「あー、引き分けだったわね…。」

無論、とのデュエルの話である。

デュエルでHPが全損しても、強制的にセーブポイントまで転送される。

今、宿屋の手前まで転送された。

勿論 もそうであるのだ。

「引き分けだったねー。」

は何故か嬉しそうだ。まったく訳がわからない。

「はあー、勝負はお預けね。」

「いーじゃんいーじゃん。楽しかったんだし。」

「楽しくは…あったわね。まあ、気晴らしになったし、キリト達を待っただけ…。」

リーファ…スグとの決着はついたのだろうか…。

いや、手順はどうであれ、相手はキリトだ。心配は要らないだろう。

アイツは、昔のアイツじゃない。

きつと、リーファとも仲直りして帰って来るはずだ。

何を心配してたんだろうか…私は。

デュエルの前とは別人のように安心しきった顔を見て、はクスリと微笑んだ。

「待たせたな。アルス、それに。」

むー、正体バレてるし、一からアバターつくりなおしてたいな……。今思うと、なぜに名前を変えたんだろうか。疑問すぎる……。まあ、そのお陰でリーファから正体がバレなかったし、お陰でってほどでもないか。別にバレてもいいし。

「で、まあ、問うまでもないか。仲直りしたみたいね。」

「あ、そういえば。アルスとって、咲魔とシキだったり？」

なんだ、キリト言ってなかったのか。

「ご名答だよ、リーファ。」

ニヤリと は笑う。

「やっぱりね。お兄ちゃんはALO初心者だから、誰かと始めるならそうだよね。」

「じゃあ、行くか！世界樹攻略に！」

キリトが背中 of 片手直剣を掲げた。

それに、長刀と鎌と槍が合わせられる。

「「「「おう！」「」「」」

「リーファちゃん！」

全力疾走で緑色のおかっぱシルフが走ってきた。

よく見ると、スイルベーンでみたリーファのリア友のレコンである。

「ぜえ…ぜえ……。や……。やっと追い付いた。君達に追い付くまで、MOBにエンカウトされては擦り付けて来たんだよ……。一晩かかったよマジで。」

「アンタそれはMPKなんじゃあ……。」

まったくの正論である。レコンの名は伊達じゃないと言うことだろうか。

「えーと、……。この状況はどうなってるの？リーファちゃん。」

「世界樹を攻略するんだよ。レコンも来たからには手伝いなさい。」

人数は多い方が良いに決まってるしね。

「そ、そう……。ってええっ！？」

顔が蒼白くなるレコンの肩を、 が笑いながらポンと叩き、リーファが、頑張つてねと言うと、心なしかレコンの顔色がよくなった。さて、五人で世界樹のゲート守護像前に着陸した。

すると、キリトは思い付いたような顔をした。

「ユイ、いるか？」

中空に光が集まり、小さなナビゲーションピクシーの姿であるユイが姿を現した。

何やら両手を腰に当てて憤慨のポーズをとっている。

「もー、遅いです！パパが呼んでくれないと出てこられないんですからねー！」

小妖精は差し出されたキリトの左手にちよこんと乗っかる。
すると、レコンが食いつかんばかりの勢いで言った。

「うわ、プライベートピクシー！？初めてみたよ！！スゲエ、可愛
いー！」

ユイはビクツとして身を引いた。

「こら、怖がつてるでしょ。」

リーファはレコンにボディーブローを決めてぐったりしたところで
耳を引っ張って、ユイから遠ざけた。

「ユイ、さっきの戦闘で解ったことはあるか？」

「はい、守護兵一体の強さは、パパの攻撃で一撃で倒せる程度ので
すが、ポップ率が異常です。ある意味不可侵領域と言えるでしょう。」

「

なるほど、一体当たりは弱いけど、数が多すぎるから絶対倒せないようなフロアボスと戦っているようなものか…。

「でも、パパとアルスさんと　さんの突破力があればもしかしたら…。」

「　も奥の手が有るみたいだしね。」

「あー、それは言わないお約束。」

は、ウィンドウを開いて二つの武器を取り出した。

双爪

かつてインクラッドで　ことシキが愛用していた武器である。

ALOでは、仕様が少し変更していたが、この際気にしない方向で行った方が良さだろう。

そういえば、キリトは大剣のような片手直剣しか持っていない。二刀流はやはり抵抗があるのだろうか。

「うっわ…　って爪使うの！？ソレ…ALOの武器で使いにくさワースト3に入ってた気がするんだけど…。」

リーファが眼を丸くして言った。それ言うなら鎌はワースト1ね。でも、　の双爪の突破力は、馬鹿にならないからね。

さて、相変わらず威風堂々と守護像が門の左右に立っている。

この無理ゲーに挑まなければアスナちゃん解放はできないんだよね。

「なに心配してんだよ。いつもどおり、ちゃっちゃんか暴れてアスナ助けて終了。心配することないよ、咲魔。」

「まったく、あんたはもう少し緊張感を持ちなさい。んで、そのセリフはキリトにかけてあげなさい。」

でも、俄然やる気がでてきた。心の中で 黙礼をして、自らのアイテムストレージから、二本の大鎌をポップした。いつもどおり、肩に担いだ。

「よし、みんな行くぞ!!！」

「「「「おう!!」「「「「

長々とした守護像の説明が終了する。

瞬間、大量の守護兵が、押し寄せてきた。

「あら、なかなか粋なお出迎えね。」

「まったくだ。来るぞ!!！」

大量の白い渦が押し寄せる。

キリトと が特攻で斬り込む。だが、二人とも攻撃力は高いが如何せん範囲が狭いのである。

だから、漏れを私が殲滅するのである。

しかし、奇妙な事に、本来敵のヘイトは、攻撃をされた相手に注目をする仕様だが、今回回復役に徹しているリーファとレコンにも攻

撃をしようとしている。

「咲魔！」

「わかってる！！！」

は私をプレイヤー名で呼ぶのを忘れていたようだ。

とキリトが逃した尖兵を残らず刈り取る。

時おり耳障りな奇声を発するものもいる。

「あんたらには、リーファとレコンに近寄らせないわ！！死ぬっ！」

大鎌二本による範囲攻撃で片っ端から敵を潰していくのだが、いつもとは違い、私の役目は防衛戦である。

白い渦に突っ込めば、防衛線を突破されてしまい、リーファとレコンが落ちる。だからと言って、これが続けばリーファ達のMPが底をつき、泥沼になる。

「くっ！！このままじゃっ！！！」

目の前に妖精が飛翔した。

よく見ると緑色の髪をした少年。レコンである。補助スティックを駆使して前線に出たのだ。

「馬鹿！！戻ってこい！！！」

しかし、レコンは聞く耳をもたない。

レコンの体が紫色の魔方陣で包まれた。

魔方陣の大きさからして、闇属性の上位魔法であるようだ。でも、あの魔方陣の広がり方って…まさか。

瞬間、一気に爆発を起こして、守護兵を吹き飛ばした。

だが、既にレコンは居なかった。

自爆魔法…。自身のHPを引き換えに、最強の攻撃力を誇る魔法。ALOにおいて大量のデスクペナルティが加算される。所謂禁術である。

「なん……で……。…」

呆然と立ち尽くした。

自分が守ると決めていたものが守りきれなかった…。

自分の何かが失われるような喪失感。

だが、立ち止まる訳にはいかない。私達は、アスナちゃんを助けに来たんだから。

「キリト…！」

「わかってる…！」

こうなったら、攻撃は最大の防御である。

一旦キリトとスイッチして、私一人で戦線を整えるのである。

「落ちろおおおお…！」

前に進む度にポップ率が急上昇していく。
もう駄目なのか…。
次第に諦めが入ってきたのである。

その瞬間。

「ファイアーブレス、放て!!」

振り向いた私のめに入ったのは輝く鎧とエンシェントウエポン級の武器をそろえたシルフプレイヤーの軍団と、飛竜の集団であった。

飛竜はケットシーの最大戦力であり、スクリーンショットすら流出していない竜騎士ドラグーンであるのは間違いないだろう。

ケットシー領主アリシャ・ルーとシルフ領主サクヤが救援に来てくれたようだ。

さらに。

「サクマ様!!シキ様!!親衛隊来ました!!」

驚いたことに、シルフの軍団には、SAOの時の親衛隊が入っているようだ。

「私は、あなた様の親衛隊の幹部でございます!!現実で、情報を買いまくって、来ましたあああ!!」

なぬ…。

しかし、流石SAOの攻略組の生き残りたち。キリトのようにバーサーカーではないものの、強い。

「お二人の居るところはたとえば火の中水の中！喜んで飛び込みましょう！！」

……いろいろおかしい気がする。

「みんな、ありがとう！親衛隊も礼をするわ！！」

「」「我が人生、一片の悔い無し……。」「」

……。幸せそうな顔で敵を薙ぎ倒していく姿はシユールだね。

「キリト！今のうちに！！」

「わかった！行くぞ、スグ！！」

「任せて！！」

完璧に同期した動きで、守護兵を薙ぎ倒していく。

かつて、七十五層で、キリトとアスナがしたように……。

二人の呼応した動きは、一切の攻撃を受け付けていなかった。

「、あれを！！」

「わかってんよ！！」

こちらも、完璧に同期しているが、究極かつ極限まで研ぎ澄まされ

た剣筋と、永年の付き合いで完璧にわかる思考で、攻撃をすべてクリティカルヒットさせる。
もうすでに、さしたる脅威は無かった。

「ドームの天頂が！」

「突破するわ！！」

加速度全開でキリトと合流する。

「お兄ちゃん！！」

リーファはキリトに長刀を授けた。

シルフ隊や、ドラグーンは、リーファとともに撤退を始めた。

「咲魔！シキ！！」

「つたく、行くわよ！」

「三位一体！！」

二年間のインクラッド生活で培った、サクマ、シキ、キリトの三位一体戦術。

ボス戦で行われていた戦術が蘇る。

「三時の方向！！」

「パリイとバーチカルスクエア！！」

「いっけえええっ!!」

三人は、一つの光点となり、世界の核心を突き進んだ。

そして大空へ（後書き）

クライマックス近し。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4632v/>

転生してもうた!!2nd～ソードアート・オンライン～

2011年11月21日23時56分発行